ケイマンゴー遺跡

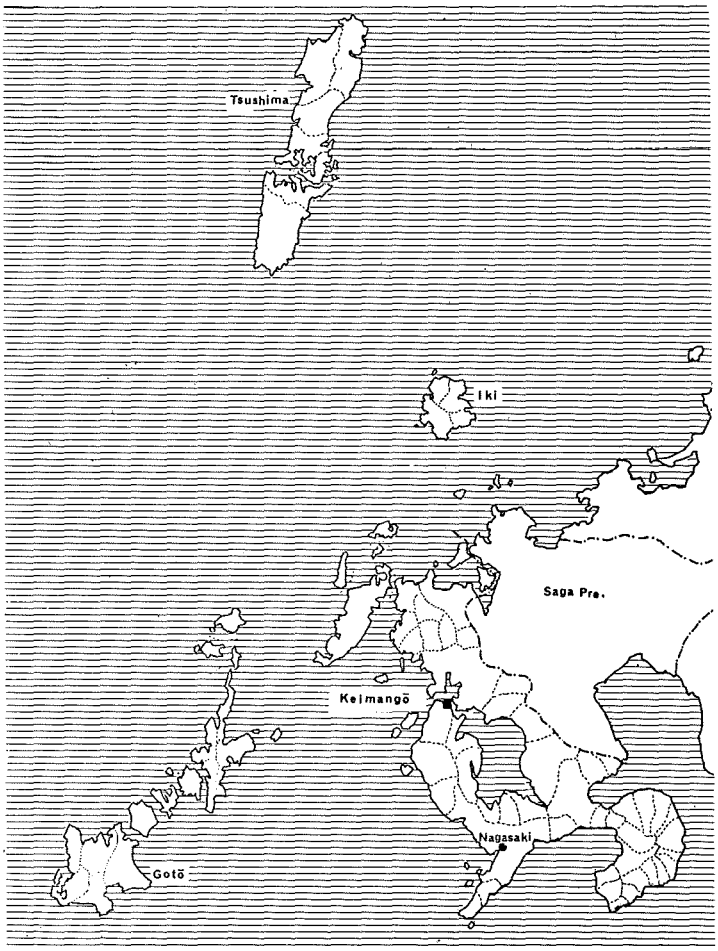
長崎県文化財調査報告書　第52集

1980

西海石油共同備蓄株式会社

長 崎 県 教 育 委 員 会

ケイマンゴー遺跡



序

弊社の石油共同備蓄基地建設計画地である長崎県西彼杵郡西海町横瀬郷はかつて遺跡所在地として周知されておりましたので，建設工事に先立ち長崎県教育庁文化課により，昭和52年６月現地の埋蔵文化財の分布調査と試掘調査を実施していただきました。

その結果，中屋敷遺跡およびケイマンゴー遺跡の存在が確認され，中屋敷遺跡につきましては，縄文晩期から弥生中期（約2400年前から約2000年前）の墓地が判明し，本遺跡の学術的重要性に鑑み現状のまま永久に保存すること，またケイマンゴー遺跡については，発掘調査の上記録に留めることとなり，弊社も微力ながらこれに協力することといたしました。

ここにまとめられましたケイマンゴー遺跡は，昭和53年10月から昭和54年２月まで81日間にわたり，慎重かつ細心の配慮をもって精密な発掘調査が行われ，縄文晩期に属する１万６千点にもおよぶ遺物が出土し，今迄不明であった西海町の縄文文化が確認されますとともに少量ながら旧石器時代の遺物であるナイフやトラピーズが存在し，確実にこの地が約１万５千年前から１万３千年前にさか上って人間の生活の舞台であったことが裏付けられるに至っております。

このような貴重な文化的遺産の発見に弊社がいささかでもお役に立ち，かつ西海町固有の埋蔵文化財として永久保存されます中屋敷遺跡と本書が，郷土の長い歴史を具体的に学ぶ上で今後末永く，広く活用されることは極めて喜ばしいことと存じます。

最後に厳冬のみぎり最善の努力を傾注し発掘調査に当られました長崎県教育庁文化課および地元の作業者の皆様，またご協力いただきました西海町関係者各位に対し，深甚なる謝意を表するものであります。

昭和55年９月

西海石油共同備蓄株式会社
代表取締役　　矢　野　恒　彦

序

各地域で開発事業が増加している現在，地下の埋蔵文化財の保存に関して，開発事業と文化財保護との調整は，万全を期すべき課題であります。

ここに報告するケイマンゴー遺跡は，長崎県西彼杵郡西海町横瀬郷に計画された西海石油共同備蓄基地建設に際して事前に発掘調査を実施したもので，この結果縄文晩期の生活址であることが確認されました。

建設予定地のうち，ケイマンゴー遺跡はやむなく記録保存の処置をとりましたが，縄文晩期～弥生中期の墓地である中屋敷遺跡につきましては，協議の結果現状保存の了解を得ることができました。

保存について深い御理解を賜りました西海石油共同備蓄株式会社並びに関係各位に対し，心より感謝いたします。

なお，本書が西海町の古代史の解明はもとより，文化財保護の資料として有意義に活用されることを願うものであります。

昭和55年９月

長崎県教育長　柴　田　芳　男

例　言

一、本書は長崎県西彼杵郡西海町に予定された石油備蓄基地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

二、調査は西海石油共同備蓄株式会社の委託を受けて，長崎県教育委員会文化課が行った。

三、本書は分担執筆し，遺物に関しては，石器を副島和明，福田一志，横山巳貴子，土器を横山，その他は高野晋司が担当した。各項の執筆者は文末に記す。

四、本書記載の図面作成は執筆者がそれぞれ行った。なお遺物撮影は平野敏和の協力を得た。

五、出土遺物中，岩石の鑑定は長崎大学教養学部教授鎌田泰彦氏にお願いした。

六、本書関係遺物は，小曽根名嘉次郎氏の資料を除き，長崎県教育委員会文化課が保管の任に当っている。

七、本書の編集は横山が行った。

本文目次

頁

第１章　序　　説

一、調査に至るまで……1

二、調査経過……5

（１）第１次調査……5

（２）第２次調査……8

三、遺跡及び周辺の地理的歴史的環境……9

第２章　遺跡の調査

一、ケイマンゴー遺跡……13

（１）層　　位……13

（２）遺物とその出土状況……16

①土器……20

②石器……23

１．先土器時代の石器……23

２．縄文時代の石器……37

（３）遺　　構……72

二、中屋敷Ｂ遺跡……77

（１）出土遺物……77

①土器……77

②石器……79

（２）遺　　構……84

付、中屋敷Ｂ地点表採資料について……85

第３章　ま　と　め……87

挿図目次

頁

Fig. 1　遺跡附近図(1 / 4000)……3
Fig. 2　ケイマンゴー(A地点)試掘壙(1 / 1500)……6
Fig. 3　中屋敷B(D地点)遺跡試掘地点(1 / 1500)……7
Fig. 4　周辺遺跡図(1 / 25000)……10
Fig. 5　調査区配置図(1 / 400)……14
Fig. 6　土層図(1 / 80)……15
Fig. 7　2層堆積状況(1 / 100)……16
Fig. 8　遺物出土状況(1 / 80)……17
Fig. 9　ケイマンゴー遺跡出土土器(その1)(1 / 3)……21
Fig. 10　ケイマンゴー遺跡出土土器(その2)(1 / 3)……22
Fig. 11　A－1区表土出土不明土製品(1 / 1)……23
Fig. 12　先土器時代の石器(1)(3 / 5)……24
Fig. 13　先土器時代の石器(2)(3 / 5)……25
Fig. 14　先土器時代の石器(3)(3 / 5)……26
Fig. 15　先土器時代の石器(4)(3 / 5)……27
Fig. 16　石鏃①(2 / 3)……38
Fig. 17　石鏃②(2 / 3)……39
Fig. 18　石鏃③(2 / 3)……40
Fig. 19　石鏃④・掻器(2 / 3)……41
Fig. 20　石鏃⑤(2 / 3)……42
Fig. 21　石鏃遺存率……44
Fig. 22　サイドブレイド(2 / 3)……45
Fig. 23　彫器(2 / 3)……50
Fig. 24　石核①(2 / 3)……52
Fig. 25　石核②(2 / 3)……53
Fig. 26　石核③(2 / 3)……54
Fig. 27　剥片①(2 / 3)……55
Fig. 28　剥片②(2 / 3)……56
Fig. 29　剥片③(2 / 3)……57
Fig. 30　剥片④(2 / 3)……58
Fig. 31　剥片における礫面残存率……59

Fig. 32　剝片打角表……60
Fig. 33　剝片長幅比……61
Fig. 34　打製石斧①(1 / 3)……62
Fig. 35　打製石斧②(1 / 3)……63
Fig. 36　打製石斧③・その他の石器(1 / 3)……64
Fig. 37　打製石斧④・その他の石器(1 / 3)……65
Fig. 38　磨製石斧・その他の石器(1 / 3)……66
Fig. 39　敲石・磨石・凹石・砥石(1 / 3)……67
Fig. 40　滑石製品(1 / 3)……68
Fig. 41　不明ピット群(1 /60)……73
Fig. 42　埋設甕実測図(1 /15)……75
Fig. 43　ＴＰ20出土甕棺実測図(1 /10)……76
Fig. 44　中屋敷遺跡出土土器(1 / 3)……78
Fig. 45　打製石斧・磨製石斧①(1 / 3)……80
Fig. 46　磨製石斧②(1 / 3)……81
Fig. 47　その他の石器(1 / 3)……82
Fig. 48　中屋敷Ｂ地点表採資料(1 /3)……86
Fig. 49　石鋸スケッチ図(1 / 1)……90

表　目　次

頁

Tab. 1　分布調査結果……1
Tab. 2　調査経過表……5
Tab. 3　グリッド別出土遺物数……19
Tab. 4　先土器時代石器一覧表……28
Tab. 5　ナイフ形石器計測表……30
Tab. 6　台形・台形様石器計測表……31
Tab. 7　細石刃計測表……34
Tab. 8　石斧・その他の石器計測表(その１)……70・71
Tab. 9　石斧・その他の石器計測表(その２)……83
Tab.10　縄文時代石器tool種別表……87

図版目次

PL. 1　ケイマンゴー遺跡遠景・近景
PL. 2　A－6区遺物出土状況，調査風景
PL. 3　D－1区東壁，B－2区東壁
PL. 4　A－2区南壁，B－6区東壁
PL. 5　D－5区東壁，A－7区南壁
PL. 6　C－6区南壁，E－5区東壁
PL. 7　A－7区東壁，B－7区東壁
PL. 8　Pit群(西から)A－6区東壁
PL. 9　Pit群(西から)Pit群(北から)
PL.10　ナイフ形石器・石鋸出土状況
PL.11　甕底部・浅鉢出土状況
PL.12　埋設甕上部石囲遺構出土状況，石囲遺構と埋設甕
PL.13　埋設甕出土状況，甕取上げ後の土壙
PL.14　ケイマンゴー遺跡出土埋設甕・中屋敷遺跡出土甕棺
PL.15　ケイマンゴー遺跡出土土器(1／2)
PL.16　先土器時代の石器(ナイフ形石器，台形・台形様石器)(1／1)
PL.17　先土器時代の石器(ナイフ形石器の裏面，台形・台形様石器の裏面)(1／1)
PL.18　先土器時代の石器(掻器，削器，使用痕のある剥片，剥片，同裏面)(2／3)
PL.19　先土器時代の石器(石核，細石核，細石刃)(1／1)
PL.20　石鏃(2／3)
PL.21　スクレイパー・石鏃遺存状態・サイドブレイド(2／3)
PL.22　彫器・剥片(2／3)
PL.23　石核・剥片，原石(2／3)
PL.24　打製石斧①(1／2)
PL.25　打製石斧②(1／2)
PL.26　打製石斧③・その他の石器(1／2)
PL.27　磨製石斧・敲石・くぼみ石・剥片(1／2)
PL.28　敲石・砥石・滑石製品(1／2)
PL.29　中屋敷遺跡遠景，ケイマンゴーB地点遠景
PL.30　調査状況(TP1)，遺物出土状況(TP18)
PL.31　甕棺出土状況(TP22)，TP22

PL.32　打製石斧・磨製石斧(1 / 2)
PL.33　磨製石斧・敲石・磨石(1 / 2)
PL.34　中屋敷B地点表採資料(1 / 2)
PL.35　中屋敷遺跡出土土器(1 / 2)・発掘調査に参加した人々

第1章　序　　説

一、調査に至るまで　昭和48年以来の不安定な石油情勢から昭和50年には石油備蓄法が制定され、90日間分の石油備蓄が義務づけられた。

それらの一連の動きの中で，本県にも昭和52年６月，石油関連７社の共同出資による西海石油共同備蓄株式会社が設立され，西彼杵郡西海町横瀬（Fig. 1）に一部米軍返還払下地19万㎡を含む87万㎡の広さの中に掘込式地下タンク13基，300万キロリットルの備蓄量を備えた一大石油基地建設の構想がもたれることとなった。

工事計画の概要によると，比高差20～30mを有する丘陵台地と低地より成る地形的要因の為に，大規模な切盛等の土地造成が必要，とあり，もし予定通りに工事が行われれば，旧地形とは全く異なる景観になるはずである。

一方，当該建設予定地内には，従来より夥しい石器片等の散布がみられるケイマンゴー遺跡（長崎県[註1]24—14）や中屋敷遺跡（長崎県[註2]24—13）が知られるなど，町内にあって比較的遺跡の密度の濃い地区であるところから，企業の誘地に熱心な町としてもその取り扱いには慎重であり，計画具体化の前に当該地区内の詳細な文化財の有無について再確認したい旨の依頼が文化課宛提出されることとなった。

これを受けて文化課は，同年６月，３日間にわたって地表面観察の分布調査を実施した。

その結果，下記５地点において遺物の散布を認め，この内すでに地盤が露出していたC，E地点を除くA，B，Dの３地点を一応遺跡として理解した上で，この部分については現状保存の方向で設計を行うべきであるとの回答を町及び企業側に提出した。（Fig. 1）

Tab. 1　分布調査結果

番号	地点名	所在地	面積	備考
A	ケイマンゴー	西海町横瀬ケイマンゴー　2078他	30,000㎡	散布地
B	ケイマンゴーB	〃　〃　〃　2470他	3,000㎡	〃
C	中屋敷	〃　〃中屋敷　2066他	500㎡	〃
D	中屋敷B	〃　〃　〃	12,000㎡	墓址(弥生中期)
E	保立	〃　〃保立　1904他	10,000㎡	散布地

この後，遺跡の保存について，数回の協議がもたれたが，企業側からは設計変更を含めた計画図作製の為には，更に詳細な遺跡の内容（範囲，時期，重要性等）の資料が必要であるとの要望が出された。

このような経過を経て，範囲確認の為の予備調査（以下第１次調査と呼ぶ）の必要性が生じ，翌53年６月実施することとなった。

調査は，上述の要調査３地点に加えて，新たに見つかった地点（Ｆ地点）を含む４地点について25箇所（154㎡）の小試掘壙を設定した結果，Ａ地点の一部（約1000㎡）において整層状態の遺物包含層が確認された他，Ｄ地点の一部（約7000㎡）で弥生中期の土器片に加えて縄文晩期の甕棺が確認されることとなった。

反面，Ｂ，Ｆ地点については，多くの石器片類を表採する事は可能であったが，すでに自然的要因による包含層流失や，重機類等による人為的攪乱の為に層は完全に消失していた。

これらの調査資料を基礎とし，更に遺跡破壊回避の協議が重ねられることとなったが，最終的には，

①Ｄ地点の7000㎡については，その区域が計画予定地の端の方に位置することからも緑地として現状保存は可能である。

②しかし，Ａ地点の1000㎡は，土地造成の核の部分になる為保存は不可避である。従って工事前に全面調査を実施してもらいたい。

との要望が企業側より出され，引き続き，その線に沿って同年８月31日付けで，法57条―２による埋蔵文化財発掘届が提出されることとなった。

調査（以下第２次調査と呼ぶ）は，同年10月16日より翌昭和54年２月３日まで81日間にわたって実施され，遺跡として残存していた約850㎡について完掘した。

しかしその後，基地建設の動きは，建設に強固に反対する住民に対する説得工作が何れも不調に終ることから遅々として進展せず，結局，企業側より事実上の凍結宣言が出されるに及んだ。

調査後，１年半で計画が頓挫した事により，緊急調査そのものの意義が問われる結末となってしまったことは，結果的に行政の先走りの感はぬぐえず，反省と共に調査のタイミングの難しさを痛感した調査であった。

しかしながら，この間，文化財の保存について真摯に御尽力いただい

Fig.1 遺跡付近図(1/4000)〔座標系第1系〕

た西海石油共同備蓄株式会社並びに各担当者の方々に対して衷心より御礼を申しあげたいと思う。

以上の経緯の概略は下記の表のとおりである。

Tab. 2　調査経過表

年　月　日	事　　項	対　　応	結　　果
昭和52年1月25日	基地計画予定地内分布調査依頼（西海町長より）		
同年　6月28日～6月30日		現地分布調査（対象62万㎡）	5地点の内，3地点に遺物包蔵の可能性
同年　6月	西海石油共同備蓄株式会社設立		
同年　12月	遺跡範囲確認の調査依頼（会社側より）		
昭和53年3月1日～3月25日		4地点に25箇所，計154㎡のトレンチ精査	2地点で良好な遺跡確認
同年　8月31日	法，57条―2による埋蔵文化財発掘届提出		
昭和53年10月16日～同54年2月3日		A地点（ケイマンゴー）について850㎡完掘	D地点（中屋敷）は現状保存
この間，基地建設反対の住民に対する説得工作			不調に終る
昭和55年4月	基地建設凍結宣言		会社は存続

註1　文化庁，1976「全国遺跡地図42長崎県」国土地理協会

註2　同　　上

二、調査経過

(1)　第1次調査　　A，B，D，Fの4地点に，計154㎡のトレンチを入れて層の堆積状況を確認した。

以下，各地点の概略を記しておく。

A地点　　遺物散布面積3万㎡に13ケ所のトレンチを設定した。

(Fig. 1，2)　　この結果，それらの内の一部，標高40～43m，丘陵の鞍部に近いゆるやかな傾斜面において良好な遺物包含層が堆積残存していることが判った。

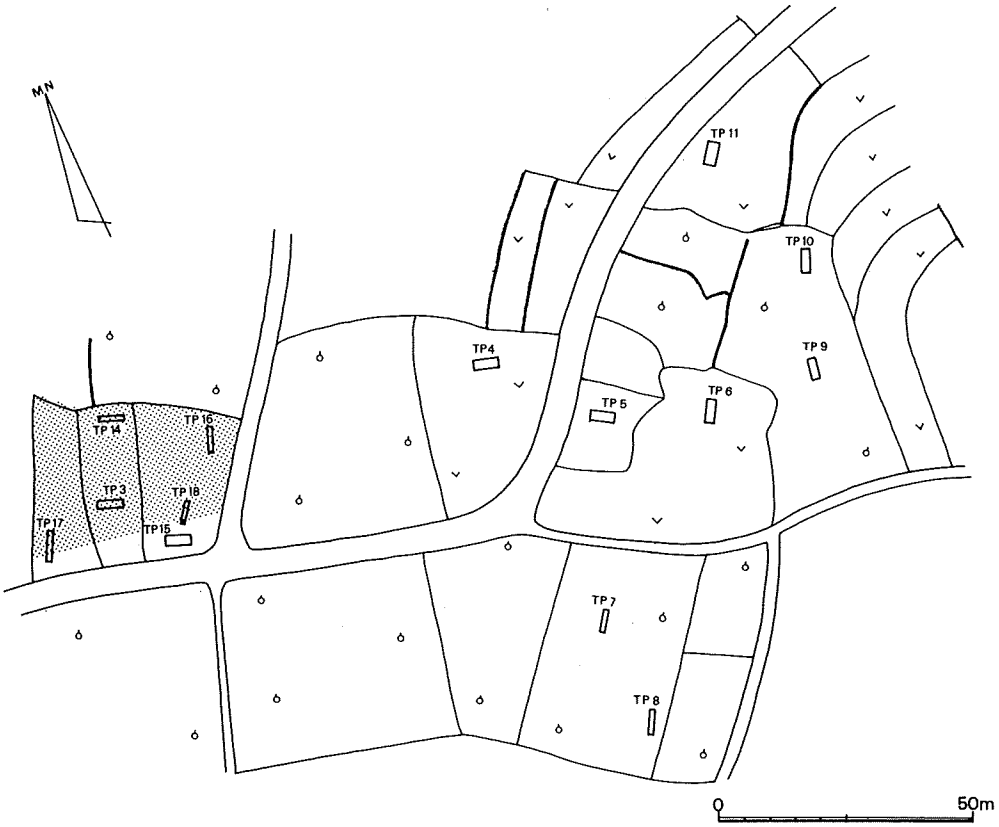


Fig.2 ケイマンゴー（A地点）試掘壙（1/1500）

その詳細な地番は，横瀬郷ケイマンゴー2077—1，2078—2であり，包含層の残っている面積は，当該地区でも比較的北側によった800～900㎡程度であると思われた。

出土遺物は多くの石器片類に加えて若干の縄文土器も出土したが，何れも時期を決定する程のものは見当らなかった。

しかし，以上の事実からこの狭少な区域を縄文時代の遺物包蔵地として理解することにし，従来より呼称されてきたケイマンゴー遺跡として再確認することにした。

B地点
(Fig. 1，PL.29)

標高30～40m，丘陵北側に面する傾斜面に2ケ所のトレンチを入れた。しかし，地表下約20cm程度で自然礫を多く含む地山に到るなど，すでに包含層は消失してしまったものと解される。

D地点
(Fig. 3，PL.29)

A地点から，北東へ直線にして約500m，南面する標高43～47mの傾斜地に4ケ所のトレンチを入れて精査した。

これらの区域の内，現在の平担地部分は，戦後重機によって削平され

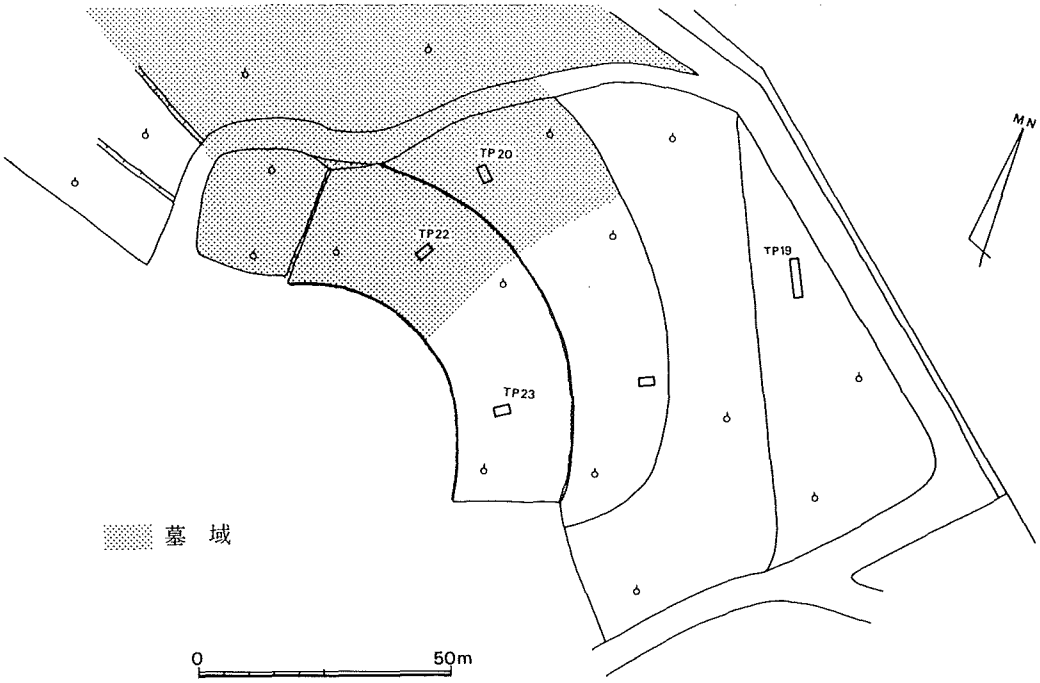


Fig.3 中屋敷B(D地点)遺跡試掘地点(1/1500)

た地点であり，そこから且って「壺の入った石棺」が出土したといわれる。

実物はすでに見当らないが，当該地点を中心として採集された遺物の中には，弥生中期の甕，壺片等に加えて甕棺の底部が散見されるなど弥生期の墓地であったことが示された。

現状は削平と盛土によって旧地形とは異なっているが，それでも小試掘の結果では，表土下約1m位に，なお弥生の土器を多く含む薄い層の堆積がみられ，攪乱が全面に及んでいない事が確認された。

また，隣接する蜜柑畑の中からは，縄文晩期の甕棺が出土するなど，この地一帯7000㎡程度については，縄文晩期～弥生中期にかけての墓地が未だ埋蔵されている可能性が強くなった。

なお，西海町内でこの種の明確な遺構は初例である。

F地点
(Fig. 1)

分布調査の折には発見されず，急拠今次調査で調査追加した地点である。

標高67m前後，丘陵頂上部に位置するが，すでに果樹園開墾の折に重機による削平を受けている為旧状を失っている。

しかし，地表面に散見し得る石器削片類の中にはナイフ型石器も2点程

含まれるなど，風化の進んだ黒曜石削片が多かった。

この地点には，２ケ所の試掘壙を設定してみたが，結果はＢ地点と同じく地表下20cm程度で地山に到り，包含層の堆積はすでに消失していた。

(2) 第２次調査

前述Ａ地点内の全面調査である。

調査地点は東面する比較的ゆるやかな傾斜地で，その東側と南側の延長は，舗装された巾６ｍの道路により分断されている。

そして，同時にこの道路によって遺物包含層の存否も分かれる結果となっていた。

調査は昭和53年10月16日より始まり，当初３人の調査員が専従したが，途中で県内の他遺跡で緊急調査を余儀なくされる事態が生じたために，２名に減ることとなった。

しかし，遺跡そのものの面積が当初予察した1000㎡より850㎡程度に限定された為に調査期間そのものは延長することもなく，翌54年２月３日，延81日間にわたる調査を終了した。

なお，第１次，第２次調査の関係者は以下のとおりである。

第１次調査　(昭和53年３月１日～３月30日)

調査総括	三村長年	長崎県教育委員会教育長	
	辻　　寛	長崎県教育庁文化課課長	
	塩谷安則	同	課長補佐
	田上哲夫	同	副主幹
	菅吉二郎	同	総務係長
調査担当	高野晋司	同	文化財保護主事
	副島和明	同	同

第２次調査　(昭和53年10月16日～54年２月３日)

調査総括	三村長年	長崎県教育委員会教育長	
	辻　　寛	長崎県教育庁文化課課長	
	塩谷安則	同	課長補佐
	田上哲夫	同	副主幹
	菅吉二郎	同	総務係長
調査担当	高野晋司	同	文化財保護主事
	安楽　勉	同	同

	宮崎貴夫	同	同
	横山巳貴子	同	文化財調査員
調査協力	西海町，西海町教育委員会 西海石油共同備蓄株式会社		
内業協力	平野敏和		
整理内業	魚下雅子，江川利子，大坪由紀子，香田裕子，吉田慶子 細田純代，松本直美，登　慶子		
外業協力	橋本幹吉，山滝貞一，山滝伝一，原脇半吉，太田頼作，佐々木次男，池田正利（調査地点地主），太田寅一郎，山滝タモ，太田チク，太田キミ，酒井タツ，田中サカエ谷口カツエ，辻尾チト，山里英子，谷崎トラエ，知念ヒロ子，松棟奈加，橋本啓子，橋本スナ，山崎トミエ，辻尾幸子，辻尾キヨ，楠本サエ，永野ミツエ，太田幸子，一瀬芳子，網田幸子，久保美知代		

三、遺跡及び周辺の地理的歴史的環境

西海町は本県西彼杵（そのぎ）半島の北端に位置し，南側の山間地部分を除いては，三方を佐世保湾と五島灘に突出する気候温暖な地である。

町内の地形は，北半の内陸部は，起伏には富むが比較的低い丘陵性台地と海浜部は複雑なリアス式海岸より成っている。

なお，発達した沈降海岸は，当然ながら多くの入江を形成するが，その規模はさほどでは無く，あまり奥深くない数本の入江がみられる程度である。

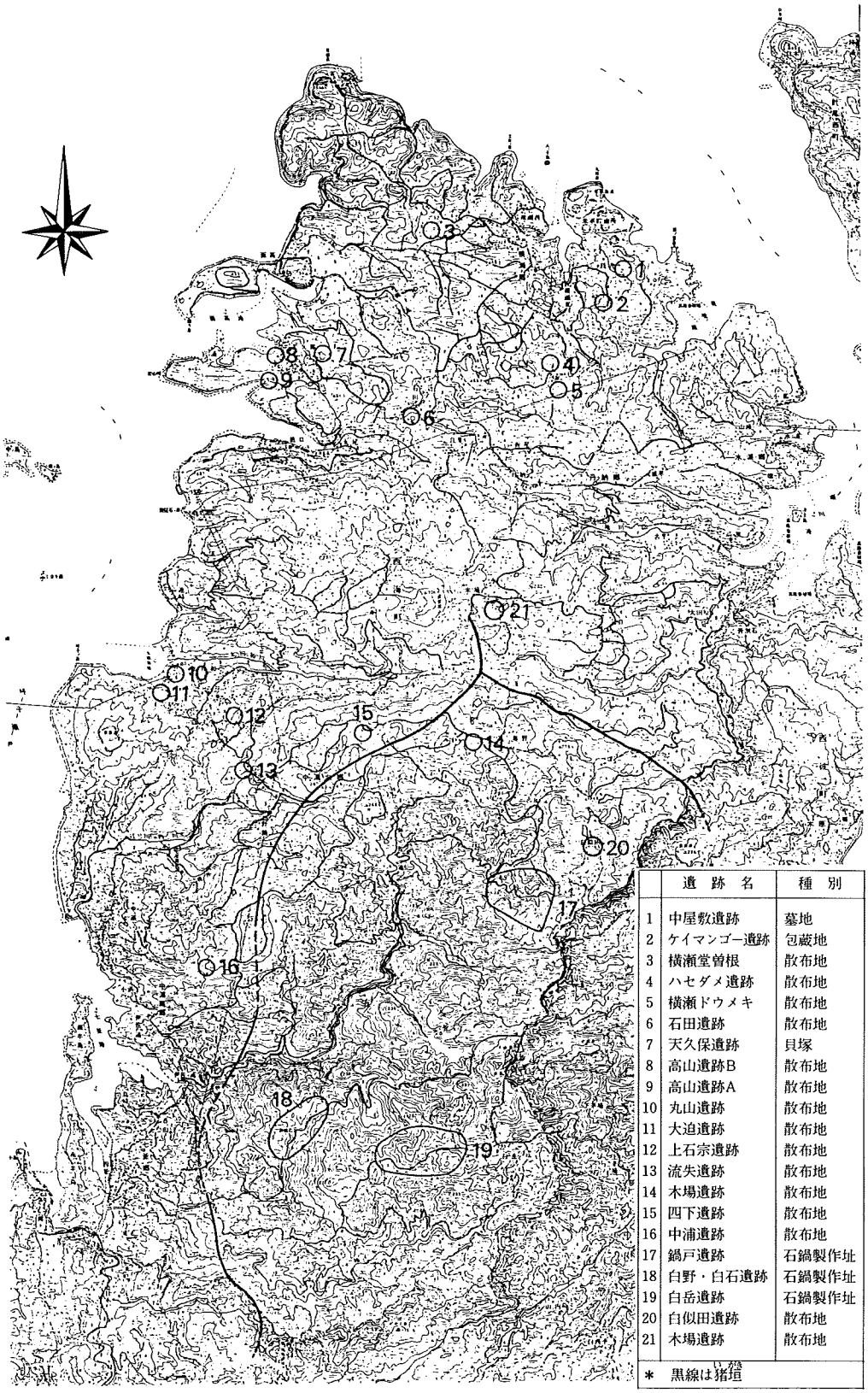
西彼杵半島の地質は，結晶片岩を基盤とし，西彼杵層群と呼ばれる第3紀層が広く分布するが，更に遺跡附近においてはこの上を溶岩流状の玄武岩が被覆している。[註1]

遺跡周辺は，標高30～40mのゆるやかな丘陵と谷筋の小さな沢より成るが，海岸部附近では，一部を除くと波食台となり急崖をなしながら直接海中へ没している。

一方，遺跡の西側には標高70m程度の丘陵が背後に控え，加えて前述の波静かな佐世保湾に面する入江まで，直線にして僅か400mの自然条件は，北面よりの強い季節風をやわらげる効果を持つばかりでなく，同時に漁撈活動をもし易しい環境であったろうと思われる。

なお，附近には豊富ではないが2ケ所の湧水地点が知られている。

周辺の遺跡を概観してみよう。（Fig. 4）



	遺　跡　名	種　別
1	中屋敷遺跡	墓地
2	ケイマンゴー遺跡	包蔵地
3	横瀬堂曽根	散布地
4	ハセダメ遺跡	散布地
5	横瀬ドウメキ	散布地
6	石田遺跡	散布地
7	天久保遺跡	貝塚
8	高山遺跡B	散布地
9	高山遺跡A	散布地
10	丸山遺跡	散布地
11	大迫遺跡	散布地
12	上石宗遺跡	散布地
13	流失遺跡	散布地
14	木場遺跡	散布地
15	四下遺跡	散布地
16	中浦遺跡	散布地
17	鍋戸遺跡	石鍋製作址
18	白野・白石遺跡	石鍋製作址
19	白岳遺跡	石鍋製作址
20	白似田遺跡	散布地
21	木場遺跡	散布地
*	黒線は猪垣(いがき)	

Fig.4　周辺遺跡図(1/25000)

町内の北半の地形は先述したが，比較的視野の開ける北半部と異なり，南半の山間部はあまり高くはないが険粗な山嶺が南北に縦断し，為に交通の便はすこぶる悪い。古代の遺跡にあっても，各遺跡間には距たりがみられ集中的ではない。

現在知られている遺跡は，調査地のケイマンゴー地点を含めて21ケ所である。その内訳は，散布地15ケ所，貝塚１ケ所，包蔵地１ケ所，墓地１ケ所，生産遺跡３ケ所である。

散布地の内容は，何れも石鏃，石斧，石器剝片等を採集し得るのみで土器片の発見が少なく，従ってその時期も内容も不明である場合が殆んどである。[註2] 町内で１ケ所のみ知られる貝塚は，現海面との比高が50m の弥生貝塚で，鹹水産の貝塚に混って，獣漁骨等の散布がみられる。又，この地に隣接して，民家の庭断面に巨石が埋っている。原位置ではないようであるが，附近に石棺材らしき扁平な板石がみられることから支石墓の可能性もある。

山中には滑石製石鍋の製作所が数カ所知られる。これらの遺跡は，隣接大瀬戸町で大規模な工房址がみつかるなど注目された生産遺跡[註3]であるが，山中の交通の便の悪さからまだ未発見のものが多い。詳細な分布調査を行えば，将来更に多くの工房址がみつかるものと思われる。

この他，猪鹿の害から農作物を除く為，延々70kmにわたって尾根から尾根へと延々と築かれた猪垣が山間部を縦走しているのが知られる。(享保７□寅年）の年号が刻まれた近世遺跡ではあるが，まさに壮観という他はない。

他方，町内を文献よりみた場合，明確な形で登場するのは大村藩「郷村記」である。それによると，町内は「外海」４ケ村と「内海」１ケ村に分かれ，それぞれ各村の面積，人口，境界，道路の里程などが記述されている。又，一部には町内の「古城」についても説明があるが，その由緒等については詳細ではない。

遺跡周辺については大村藩が誘致したポルトガル船[註4]の来航が「永禄五年壬戌年」横瀬浦に入港したとあるが，これ以外に際立った記述はみられない。

これより先，肥前風土記「彼杵郡」の項に「周賀の里……中略……因りて名を救の郷といひき…云々」とある〝救の郷〟を遺跡東側に位置する入江，巣喰の浦に凝する説[註5]があるが，これは明確でない。　（高野）

註1　鎌田泰彦　1980「大瀬戸町石鍋製作所遺跡」大瀬戸町文化財調査報告書第1集　大瀬戸町教育委員会

註2　大崎高等学校社会部　1978「寺島遺跡調査概報」には，西海町内に20カ所程の遺跡名が記載してある。

註3　註1に同じ

註4　佐竹　茂　1980「大村湾の漁撈習俗」長崎県文化財調査報告書第46集

註5　西海町文化財調査委員会　1973「西海町史　概括編」

調査風景

第2章　遺跡の調査

一、ケイマンゴー遺跡

(Fig. 5)

ケイマンゴー遺跡は，畑地開墾，蜜柑植樹，及び道路建設等によってその大部分は破壊され，僅かに標高40～43mの東面する傾斜面，凡そ，1000㎡が消滅からまぬがれているにすぎないが，遺物散布面積自体は周囲3万㎡に及ぶことからも，本来の遺跡はもっと広域にわたっていたはずである。

調査方法は，発掘区域の中に最大限に直角の大グリッドを設定し，それを更に1辺5mの方眼で区切った。

グリッドの呼称は，東西を西の方から1，2，3……とし，南北を北の方からA，B，C……と呼んだ。

最終的に調査面積は35グリッド，849㎡であり，これにより調査可能区域を完掘したものと理解した。

調査は，より高所に位置するA－1，B－1より掘り始め，順に下方に移動しながら掘り進んだ。

排土は，当初は全て別地点にトラックで運んでいたが，土置き場等の面でそれが困難になった為，調査が済んだグリッドに漸次置くことになり，この為，各グリッド間，特に東西の層位の比較がしにくくなる結果となった。

(1) 層位

(Fig. 6)

層は基本的に5層に分かれるが，1，2はそれぞれ更に2つの層に細分出来る。

1層は，調査区の東側部分で色調の異なる1′層とに分けられるが，締りがなく，これは上方からの土の流れ込みが堆積したものと思われる為，耕作土（Ⅱ）として扱った。

2層は暗黄褐色を基本とするが，A－1，B－1区と下方のA－6，B－6区等では色調に変化があり，前者のそれは若干赤味がかる。

ために，2層は2a，2b層として区別した。

2b層の広がりはFig. 7のとおりで全体の西南の方に片寄っている。

遺物の出土状況はより2a層の方に集中する傾向をみせる。

なお，この2層も北東部には全面に堆積がみられるが，南側の一部では堆積していない。

3層は区によって若干厚みが異なり，厚い地点で30～40cm，薄い地点で10cm程度の堆積をみる。色調は黄褐色で2層と同じく調査区の全面に

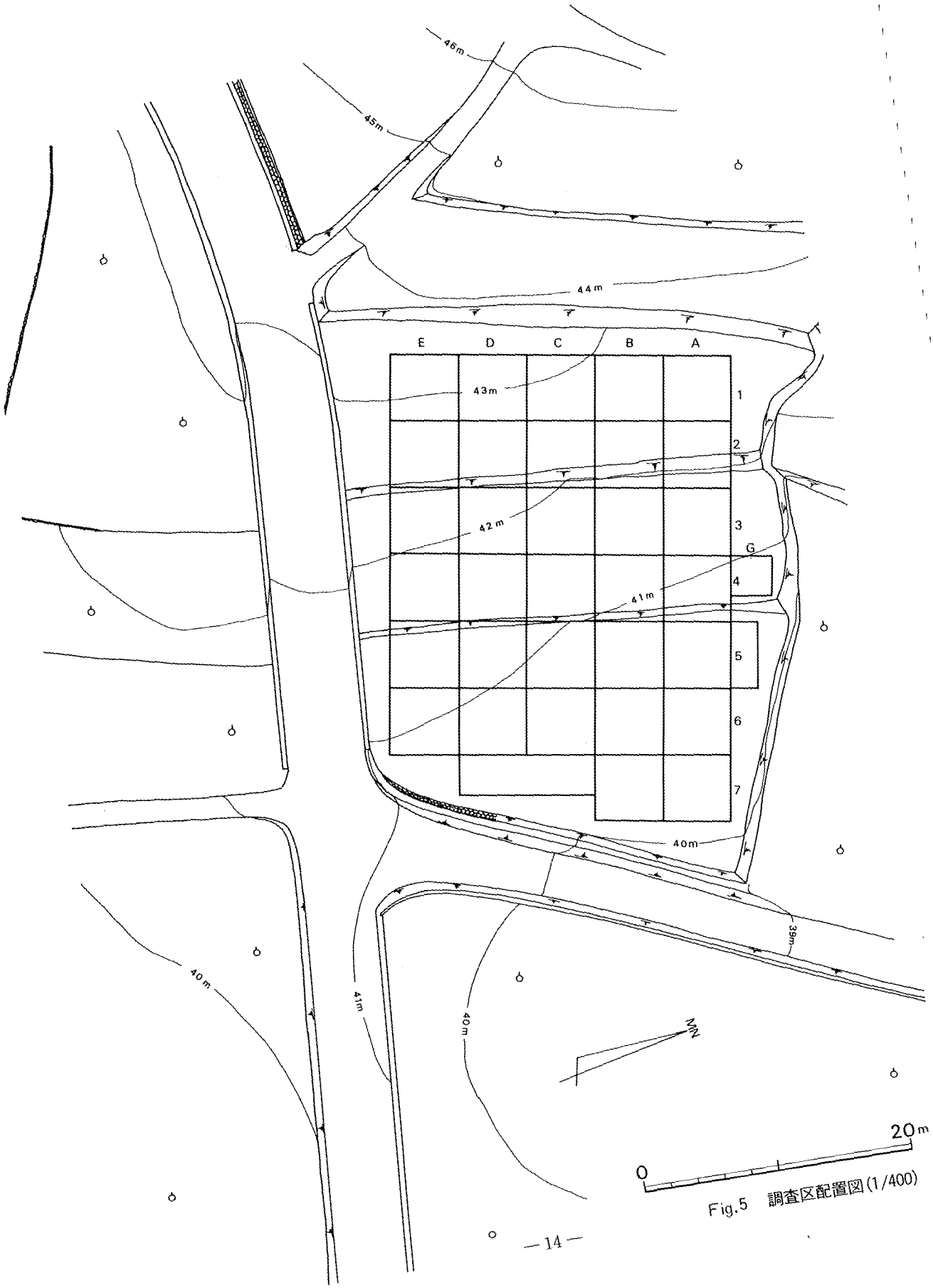


Fig.5　調査区配置図(1/400)

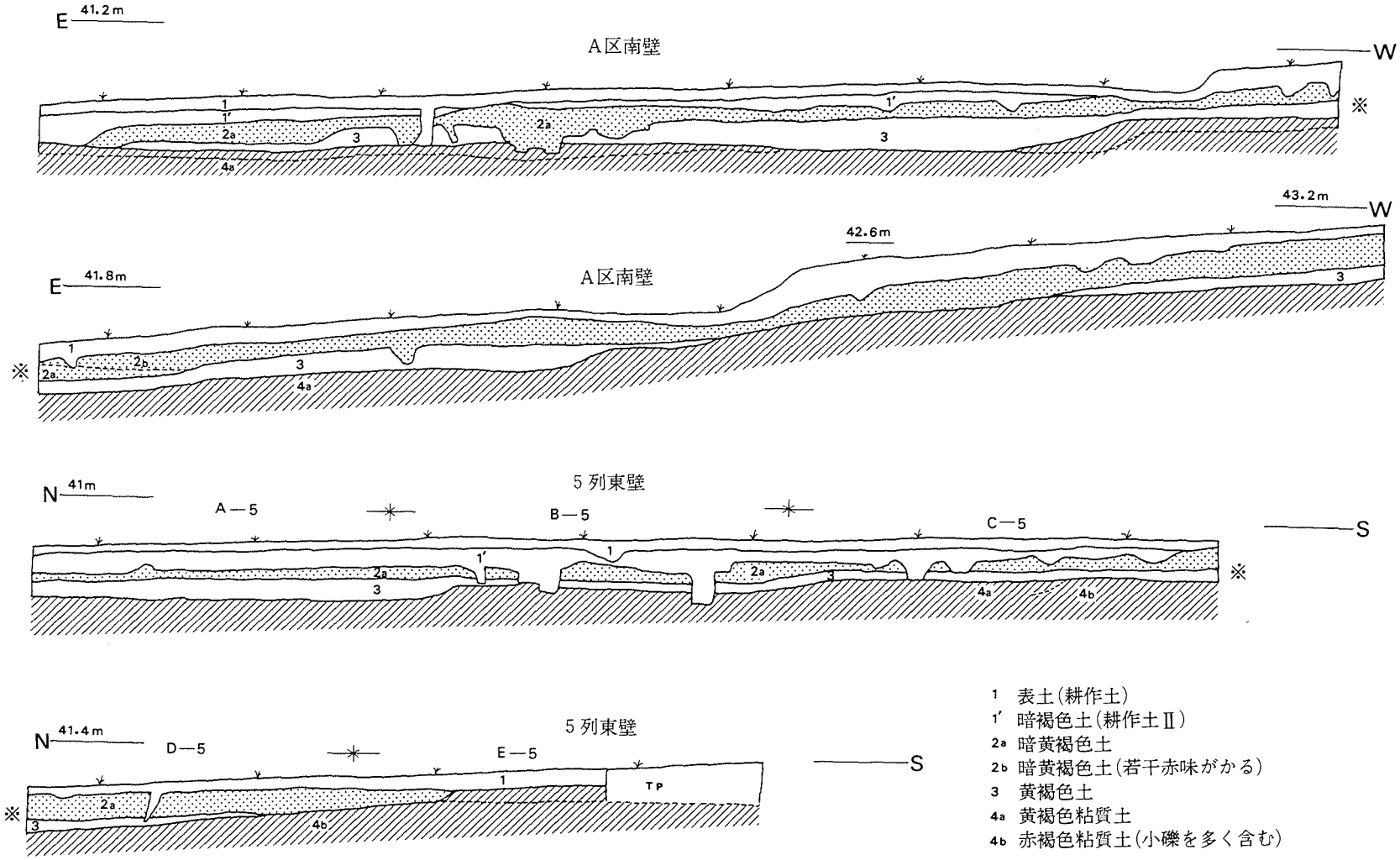

E 41.2m
A区南壁
W
1
1′
2a
3
4a
※
E 41.8m
A区南壁
42.6m
43.2m
W
2b
5列東壁
N 41m
A—5
B—5
C—5
S
4b
N 41.4m
D—5
E—5
TP
1 表土(耕作土)
1′ 暗褐色土(耕作土Ⅱ)
2a 暗黄褐色土
2b 暗黄褐色土(若干赤味がかる)
3 黄褐色土
4a 黄褐色粘質土
4b 赤褐色粘質土(小礫を多く含む)
0
4m

Fig.6 土 層 図(1/80)

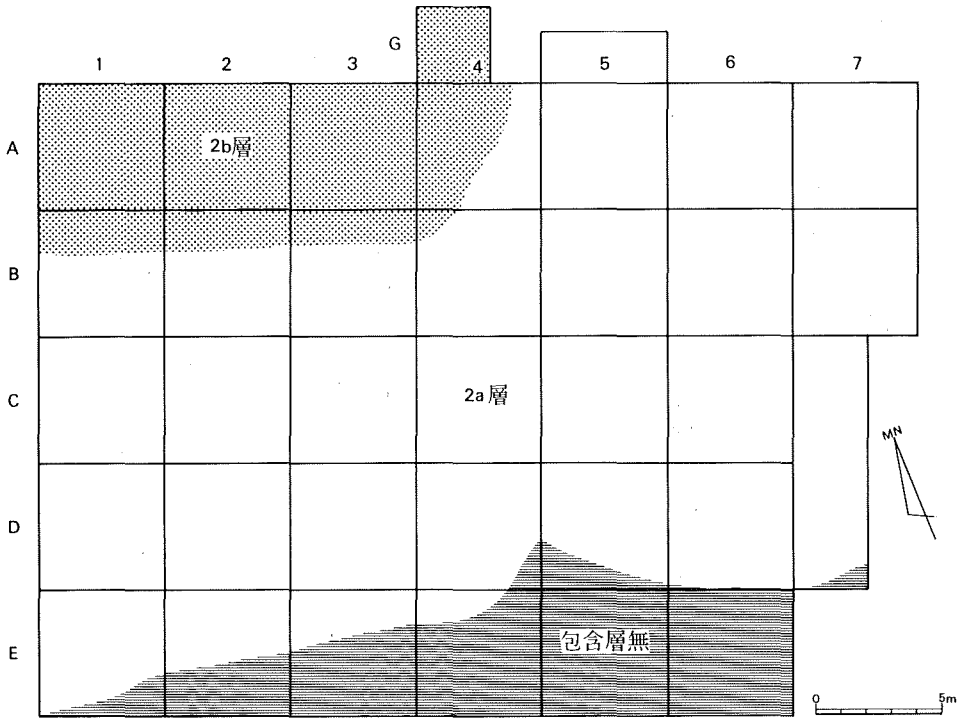


Fig. 7　2層堆積状況(1/100)

みられる訳ではなく，その中心はやはり北東部にある。

4層は3層に比して粘性が強くなるが，色調においてはあまりその差は明瞭ではない。

5層はレベル的にはC—5区で4層と並ぶが，色調は自然の小礫を含む赤褐色の粘質土で全体的には4層の下に堆積するものと思われる。

以上の内，遺物が集中するのは2，3層である。

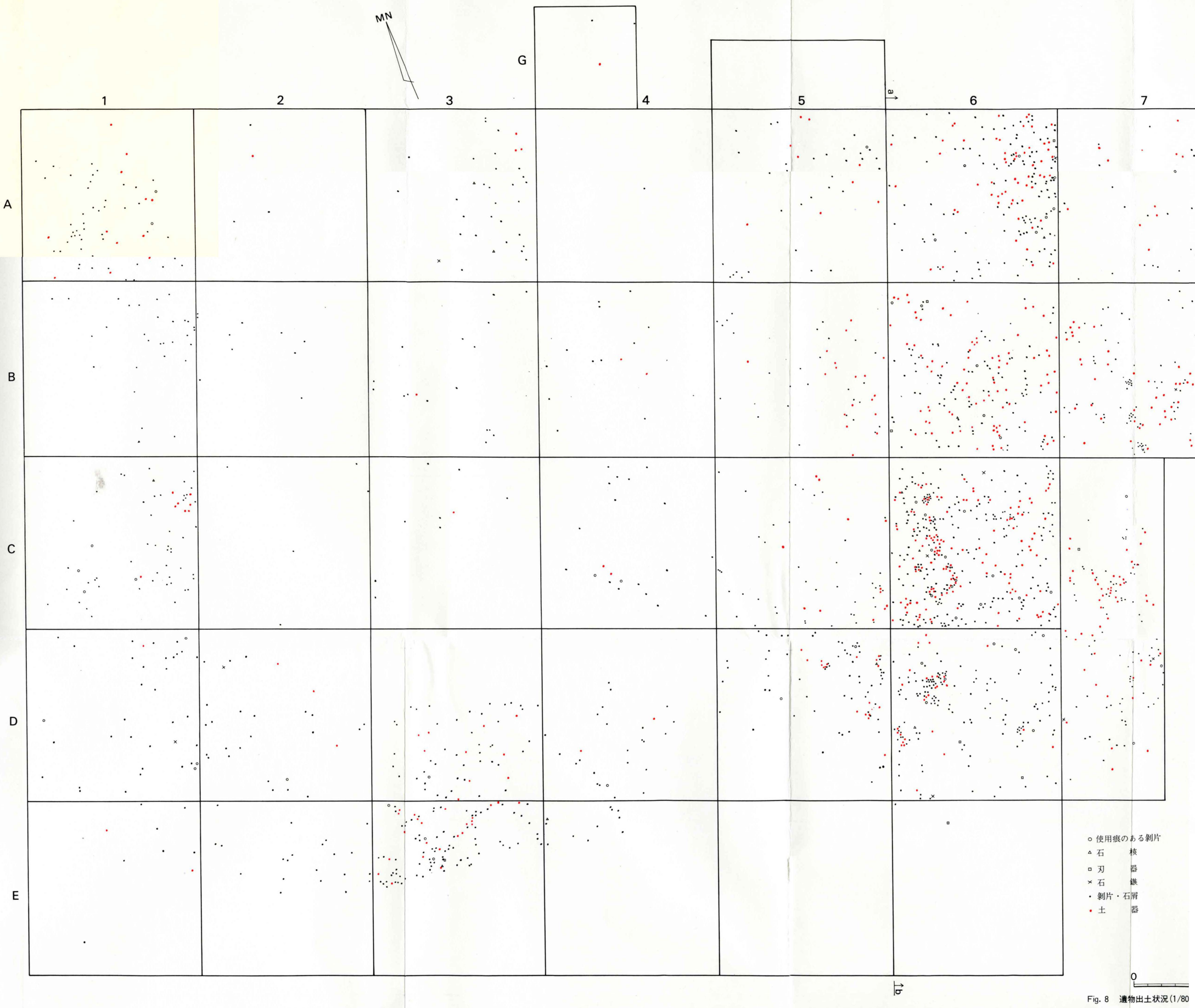
只，上述した如く，3層と4層の差はあまり明瞭でない為，一部遺物が4層中に含まれる感があるが，基本的に4層である粘質の黄褐色土は無遺物層として理解した。　(高野)

(2) 遺物とその出土状況

(Fig. 8)

調査の結果，出土した遺物は，表採及び表土中のものを含めると4118点であるが，この内，ドットマップで記録したものはTab. 3のとおり石器片1918点，土器片609点である。

しかし，石器片にしても典型的なtoolは非常に少なく，殆どがチップや剝片である。



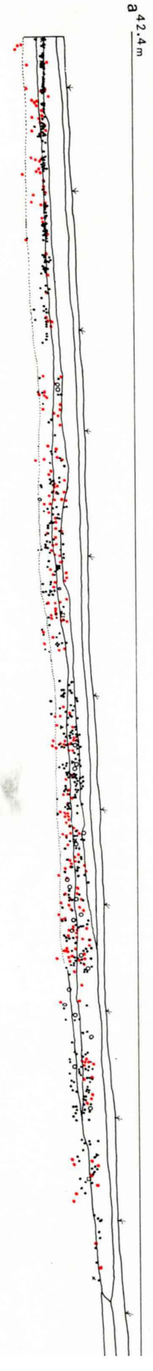


Fig. 8　遺物出土状況(1/80

又，土器にしても時期や器形を判定し得る資料はまことに少量であり，大部分は図示し得ない程の小破片である。

Tab. 3　グリッド別出土遺物数

区	石器片	土器片	計	区	石器片	土器片	計	区	石器片	土器片	計
A—1	60	13	73	C—1	56	8	64	E—1	25	12	37
A—2	6	5	11	C—2	5	0	5	E—2	36	0	36
A—3	31	5	36	C—3	8	1	9	E—3	133	30	163
A—4	2	0	2	C—4	18	3	21	E—4	26	1	27
A—5	45	9	54	C—5	45	12	57	E—5	20	2	22
A—6	134	62	196	C—6	321	139	460	E—6	92	24	116
A—7	27	15	42	小　計	453	163	616	小　計	332	69	401
小　計	305	109	414	D—1	38	0	38	G—4	3	0	3
B—1	41	0	41	D—2	28	3	31	小　計	3	0	3
B—2	7	0	7	D—3	56	9	65	総　計	1918	609	2527
B—3	19	2	21	D—4	23	2	25				
B—4	14	2	16	D—5	80	12	92				
B—5	33	18	51	D—6	172	30	202				
B—6	108	91	199	小　計	504	110	614				
B—7	99	45	144								
小　計	321	158	479								

遺物の散布は，より低い部分，南北列が5，6，7区に集中する傾向をみせるが，これは同時に傾斜した地形の故に一部遺物が下方へ流れ込んだ可能性も考慮に入れておく必要があろう。

これとは別にA—1，C—1区を中心とする地点にも小さな集中箇所がみられる。しかし，これも南北列2，4に築かれた段が一部包含層を露呈させた為にその部分の遺物が散逸してしまったことが，一見地点的な集中部分を強調する結果になったものと思われる。

しかし，包含層が残存する区域に，ある程度遺物がまんべんなく分布しているにしても，先の5，6，7列の集中化は単なる地形的な自然要因だけでなく，pit群の存在と合わせて，遺物の中心がより北東側にあった事を如実に示していよう。

なお，出土遺物の中には，ナイフ形石器，台形様石器，細石刃，更に先土器時代のものと思われる剝片，石核が含まれるなど，この区域が先土器時代にも生活の場として利用されていた事が明白となった。

以下各出土遺物の説明にはいりたい。　　（高野）

① **土器**
(Fig. 9・10, PL.14・15)

1　A－6区で出土した埋甕である。復原口径は33.1cm，復原高は31.9cmを計る。平底をなし，胴部から口縁部にかけて心もち内弯して立ち上がり，口唇部はまるくおさめられている。外面には，口縁部付近は横位に，胴部は斜めに条痕文が施してあり，内面にはハケ目調整を行っている。内面はところどころ黒色になっているが，全体的には暗褐色を呈する。胎土は緻密であるが焼成がもろいためバインダー処理を行った。縄文晩期の粗製土器である。

2～5，縄文晩期の甕の底部片である。2は雲母片を多く含み，暗褐色を呈する。CD－7区表土より出土。3は円盤貼り付けの底部であるが，摩耗している。1mm大の雲母・小石粒を多く含み，外面は明褐色，内面は暗灰褐色を呈する。CD－7区pit内より出土。4は胎土緻密であるが焼成はもろい。外面は褐色，内面は茶褐色を呈する。B－6区2層より出土。5は1～5mm大の雲母片を多く含み，外面は明褐色，内面は暗灰褐色を呈する。A－7区2層より出土。

6，精製土器の浅鉢である。上半部の4分の1を残す。復原口径は27.0cmになる。胴部が張り，内傾した頸部から口縁が短く立ち上がり，二重口縁を呈して口唇部が玉縁状におわる。胎土は精製されており，灰褐色を呈する。C－6区pit内より出土。

7，6と同形態であるが，胎土は粗く1mm大の砂粒を多く含み器面はざらつく。暗褐色を呈する。B－6区2層より出土。

8・9，精製土器の浅鉢の口縁部である。胴部を欠くが，外反して広がった口辺部先端にタガ状の立ち上がりをみる。薄手，硬緻で，8が黒褐色，9が暗黄褐色を呈する。8はC－6区pit内，9はCD－7区2層より出土した。

10，粗製土器の鉢の口縁部である。薄手で，胎土に雲母と滑石を含む。暗褐色で器面はざらついている。第1次調査の際，A地点17トレンチ2層より出土した。

11，粗製土器の鉢で，口縁端を欠くが，胴部からの立ち上がりが屈曲して外反し，また立ち上がりをみせる。薄手であるが1mm大の小石粒を含み，焼成はややもろい。C－6区2層より出土した。

12・13，精製土器の浅鉢の口縁端である。いずれもタガ状の立ち上がりをみる。薄手，硬緻で，12は暗褐色，13は黒色を呈する。12がD－5区表土，13がD－6区2層より出土した。

14，浅鉢の口縁部であり，肩部で屈曲して内弯しながら胴部にいたると

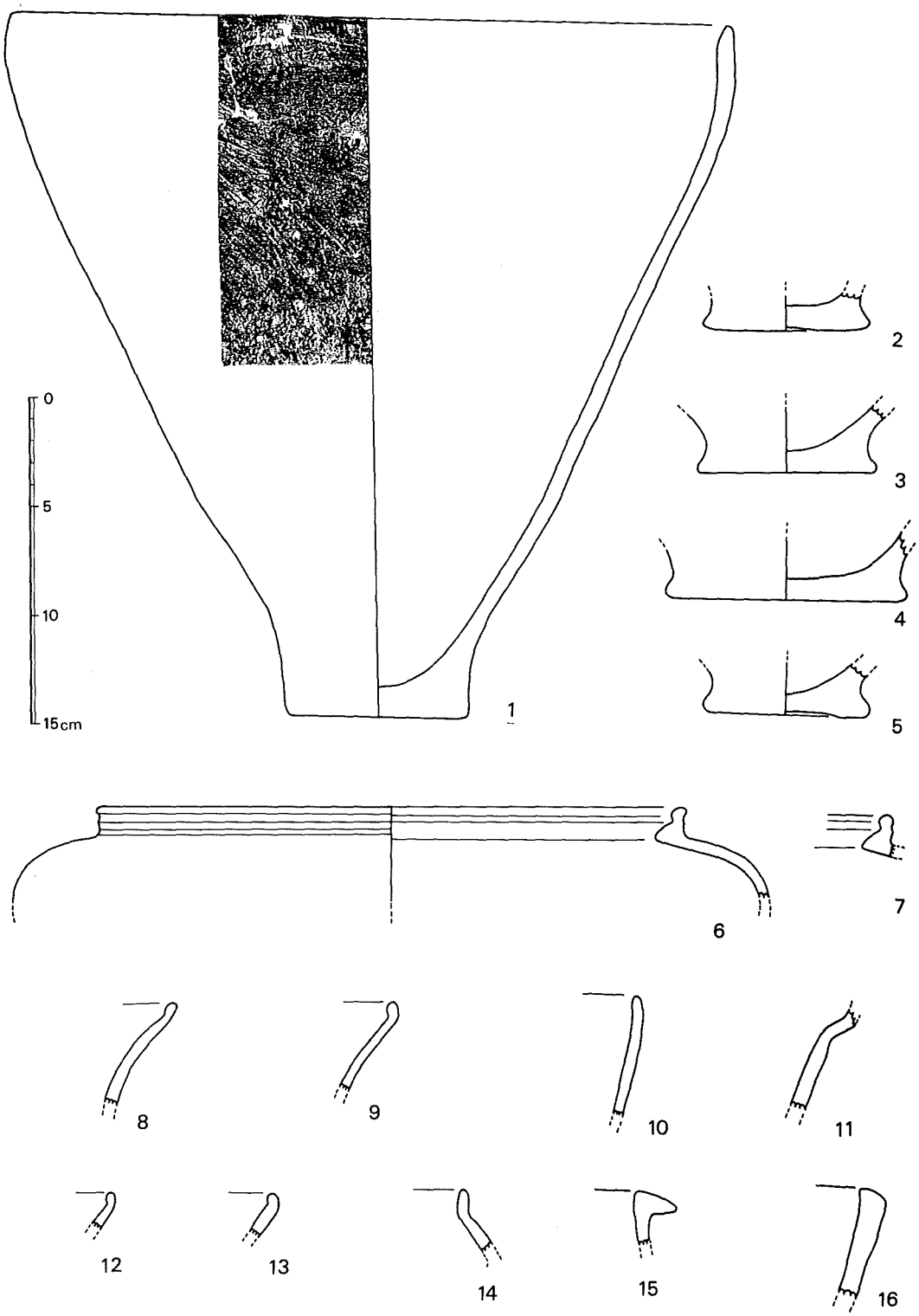


Fig.9　ケイマンゴー遺跡出土土器（その１）(1/3)

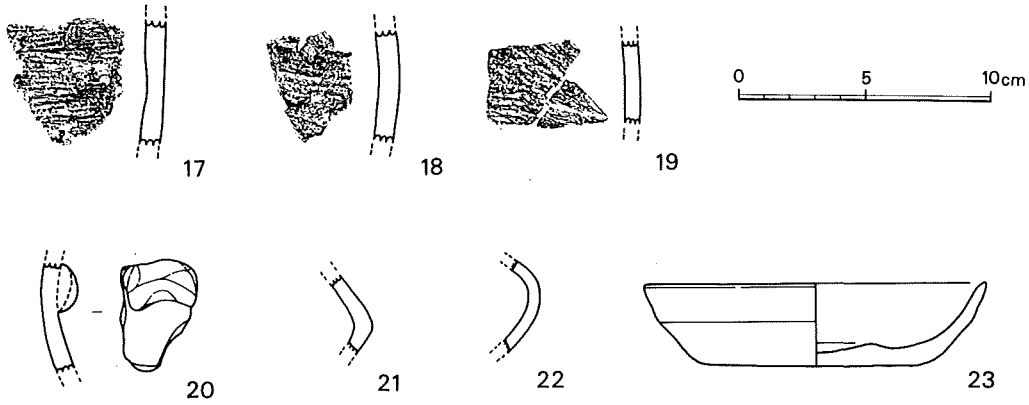


Fig.10　ケイマンゴー遺跡出土土器(その2)(1/3)

思われる。砂粒を多く含み，器面はざらつく。C－4区表土より出土。

15，弥生中期の甕の口縁部である。胎土緻密であるが焼成はもろく，暗褐色を呈する。C－6区pit内より出土。

16，口縁部片のみで完形を復原できないが，土師質の鐺鉢と思われる。石英粒をところどころに含み，内外面とも表面は乳白色，中は黒色を呈する。C－6区表土より出土。中世のものであろう。

17～19，縄文晩期の条痕文を有する土器の胴部片である。いずれも雲母片を含み，暗褐色を呈する。17はB－6区2層，18はD－5区表土，19はC－3区表土より出土。

20，リボン状貼り付けの装飾をもつ甕の胴部である。このような装飾は，本県の礫石原遺跡[註1]や深堀遺跡[註2]に類例がみられる。この土器片はC－4区表土より出土した。胎土には滑石や砂粒を含み，焼成はもろい。暗褐色を呈する。

21，浅鉢の胴部である。「く」の字形に屈曲する。胎土は緻密だが，焼成はややもろく，黒褐色を呈する。C－4区2層より出土した。

22，精製土器の浅鉢の胴部であり，内弯している。薄手で胎土緻密であり，黄褐色を呈する。D－5区表土より出土。

23，C－6区表土より出土した土師器の杯である。口径13.6cm，底径9.4cm，器高3.3cmを計る。ヘラ切り底で，外面には横ナデが，内面には不定方向のナデが施されている。内面底部には突起がみられるが，平底で，体部には稜をもち，口縁端は尖りぎみにおさめる。灰黄橙色を呈し，胎土に砂粒を含んでいる。Ⅰ－3Bに分類された[註3]杯に類例が求められ，時

期的には11世紀に位置づけられよう。

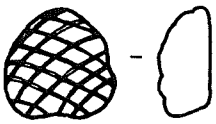
ケイマンゴー遺跡出土の土器は，摩耗した細片の土器が多く，完形を復原しうる土器片が限られていたが，表土やpit内出土のものを除いて，縄文晩期Ⅱ～Ⅲ式に該当すると思われる。（横山）

註1　古田正隆　1977「礫石原遺跡」百人委員会埋蔵文化財報告第7集

註2　長崎大学医学部解剖学第二教室　1967「深堀遺跡」人類学考古学研究報告第1号

註3　福岡県教育委員会　1978「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第8集（下）」

なお，土器に関して宮崎貴夫氏の御教示を得た。



24

Fig.11　A—1区表土出土不明土製品(1/1)

② **石器**

表採資料・表土出土のものを除いて，とり上げた石器の総数は1918点を数える。黒曜石を中心にした剥片が多い。以下，先土器時代の石器と縄文時代の石器とを分けて述べることにする。ただし，黒曜石を石材にした石器は，ケイマンゴー遺跡出土のものと中屋敷遺跡出土のものをまとめて記述した。

1．先土器時代の石器

ナイフ形石器
(PL.16・17)

ナイフ形石器は機能的な面より刺突，切載を主とするⅠ類と切載を主とするⅡ類の大きく2つに形態分類が可能である。またⅠ類は形状，機能，石器製作技術により1～4に細分される。

Ⅰ類

Ⅰ類は三角形状を呈し，斜行する刃部と鋭く尖がる基部に特徴を呈す。基軸[註1]と刃部のなす角度は約25度を大きく越えることがない。

Ⅰ類—1
(Fig.12—1～6，8)

Ⅰ類の中でも特徴的な形状を呈す。素材は縦長剥片を利用し，直線的な刃部と基軸のなす角度は鋭角を呈し，基部の作出は鋭く尖るように刃遺し加工を施こし，その為に形状は三角形を呈す。刃部を残し刃遺し加工を施こし整える。ほとんどの石器の刃部に刃こぼれが顕著にみられるか，あるいは先端部欠損の状況が窺われる。このことは刺突具としての

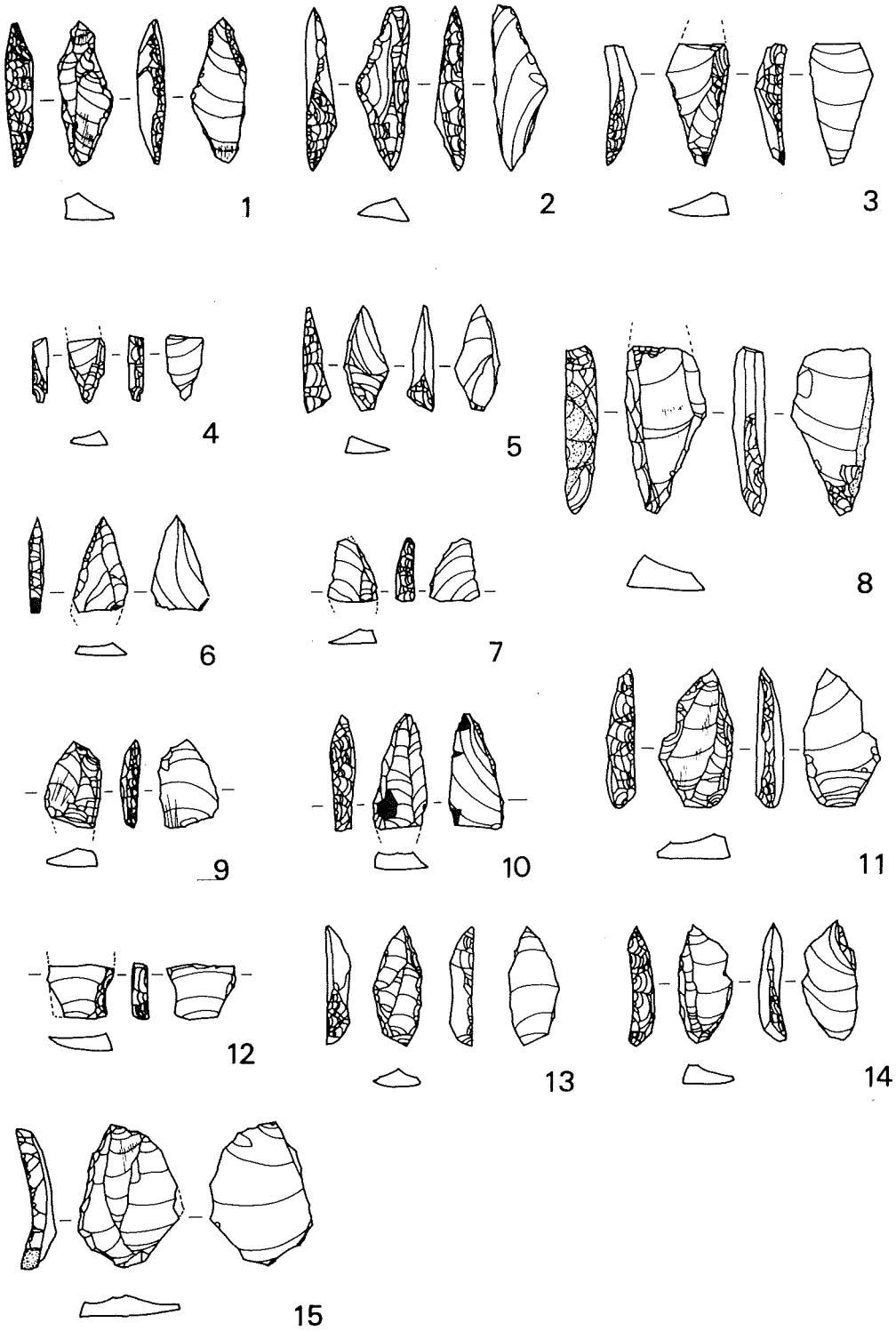
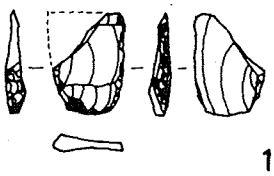
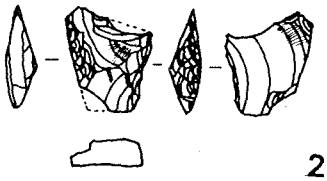


Fig.12　先土器時代の石器（1）(3/5)

台形・台形様石器分類
Ⅰ類(1)

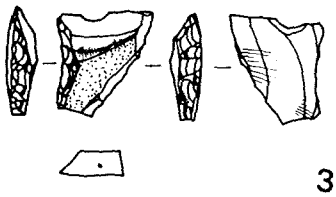


1

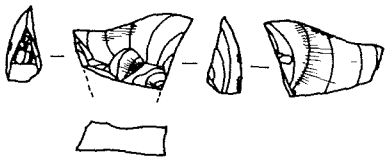


2

Ⅱ類(2,3,4)

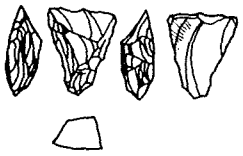


3

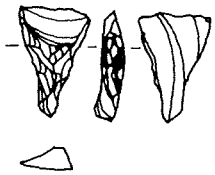


4

Ⅲ類
Ⅲ—1(5,6,7)

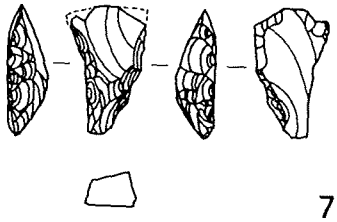


5

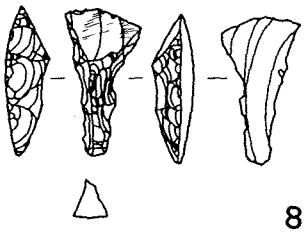


6

Ⅲ—2(8)

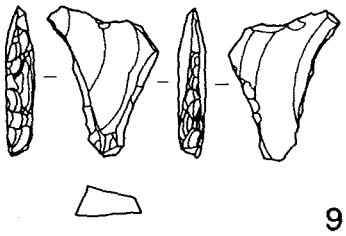


7

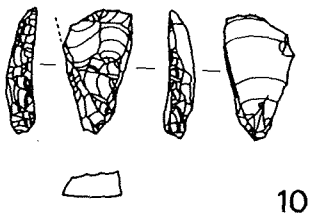


8

Ⅲ—3(9,11)

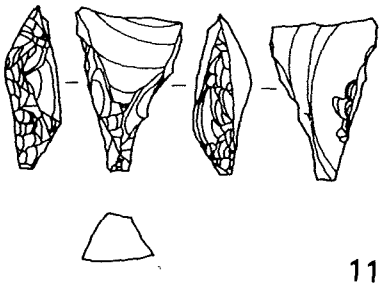


9



10

Ⅳ類(10)



11

Fig.13 先土器時代の石器(2)(3/5)

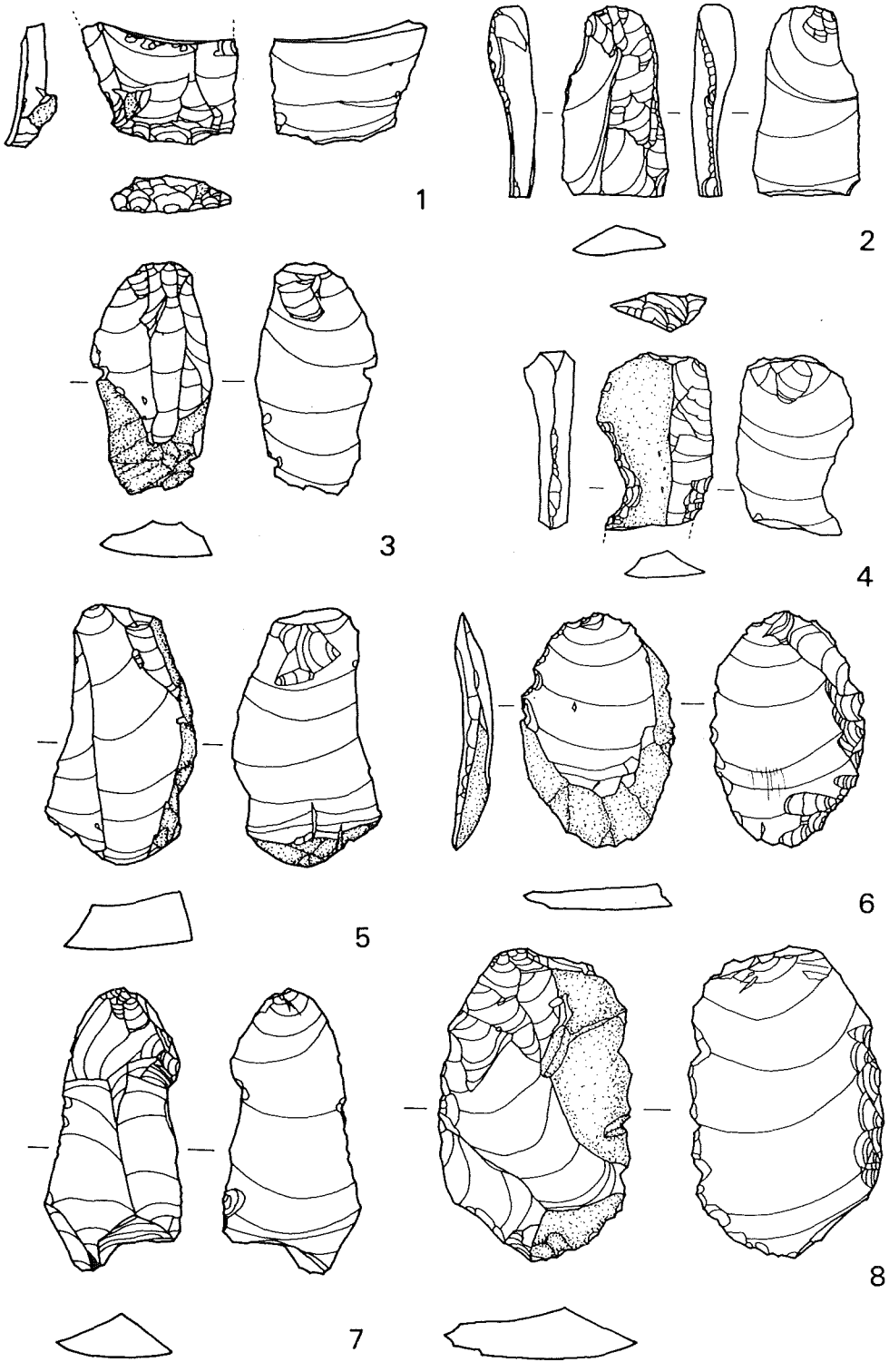
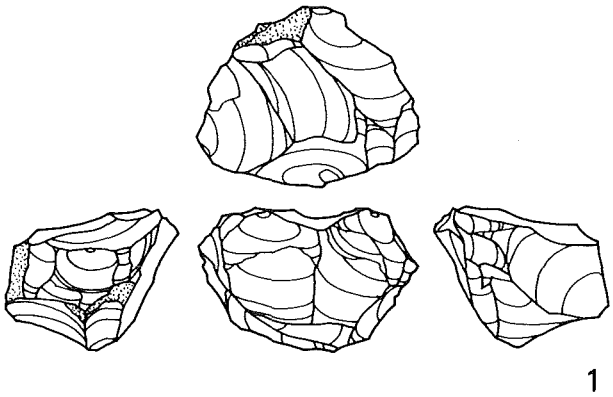
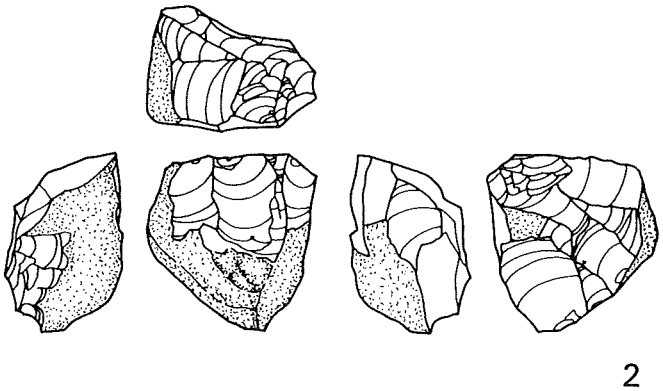


Fig.14　先土器時代の石器(3)(3/5)

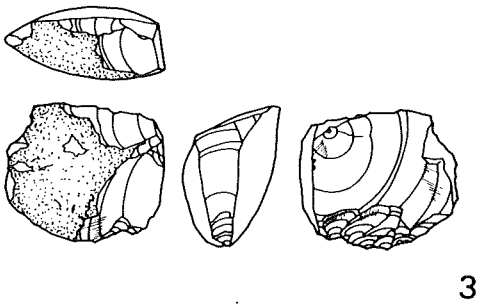
1．石　核



2．石　核



3．細石核(母核)



4．細石刃

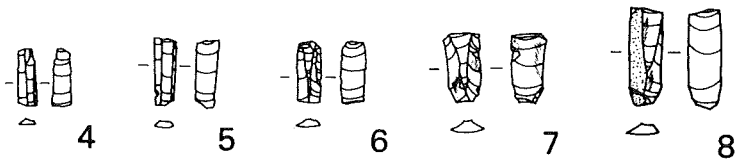


Fig.15　先土器時代の石器(4)(3/5)

Tab. 4　先土器時代石器一覧表

挿図番号	地区	層位	器種	石材	状況	備考	(重量)
12-10		表採	ナイフ形石器	ハリ質安山岩	先端部	全面パテナー，バルブ除去し刃遺し加工。基部欠損。	
12	A	第2層	〃	〃	基部	全面パテナー，一側縁部に抉入状の刃遺し加工。	
5	B	表土	〃	〃	ほぼ完形	全面パテナー，主剥離面の基部に平坦剥離，刃部に刃こぼれ。	
11	〃	〃	〃	黒曜石	完形	両側縁部のみ刃遺し加工。縦長剥片利用。	
15	〃	〃	〃	〃	〃	一側縁部のみ刃遺し加工。	
2	〃	第2層	〃	〃	〃	パテナー全面。基部は尖り，細身で，刃部に刃こぼれ顕著。	
14	〃	〃	〃	〃	〃	刃部一部欠損。バルブを除去し刃遺し加工。	
7	〃	〃	〃	ハリ質安山岩	先端部	パテナー全面。刃こぼれ，先端部に新しいリタッチ。	
13	〃	〃	〃	〃	完形	両側縁部の一部を刃遺し加工。	
9	C	〃	〃	〃	先端部	不定形剥片利用。基部欠損。	
1	CD	表土	〃	黒曜石	完形	刃部に刃こぼれ顕著。先端部の刃遺し加工に特徴。	
6	D	〃	〃	ハリ質安山岩	先端部	全面パテナー基部欠損。	
4	E	第2層	〃	〃	基部	全面パテナー，先端部欠損。	
3	〃	表土	〃	〃	〃	全面パテナー，先端部欠損。入念な刃遺し加工。	
8	G	〃	〃	黒曜石	胴・基部	裏面の基部に平坦剥離を施こし調整。先端部欠損。	
13-9	A	〃	台形様石器	ハリ質安山岩	完形	三角形状を呈す。刃部の一部欠損。	
11	〃	〃	〃	黒曜石	〃	裏面の側縁部に調整剥離を施こす。パテナー有り。	
3	〃	第2層	〃	〃	〃	パテナー有り。刃部に新しいリタッチ。主剥離面に自然面残す。	
10	B	表土	〃	〃	〃	縦長剥片利用。裏面にバルブを残す。	
5	〃	第2層	〃	ハリ質安山岩	〃	パテナー有り，刃部に新しいリタッチ，三角形状を呈す。	
1	〃	〃	台形石器	黒曜石	胴・基部	パテナー全面。刃部から胴部にかけ欠損。基部に加工痕有り。	
8	CD	表土	台形様石器	〃	完形	横長剥片利用。刃部は曲線的で刃こぼれ。平坦剥離を施こす。	
6	D	〃	〃	ハリ質安山岩	〃	全面にパテナー。一側縁部は鈍角な調整加工。	
4	〃	第2層	〃	黒曜石	先端部	胴・基部欠損。一側縁部は折(切)断面利用。平坦剥離で調整。	
2	E	表土	〃	〃	ほぼ完形	パテナー有り。基部の一部欠損。一側縁部は折断面利用。	
7	〃	第2層	〃	〃	完形	全面にパテナー。裏面に新しいリタッチ。	
14-1	B	〃	掻器	ハリ質安山岩	先端部	パテナー全面。胴部より欠損。	(9.99)
6	A	〃	削器	黒曜石	完形	一側縁部の裏面に調整加工	(16.6)
2	B	〃	〃	ハリ質安山岩	基部	先端部欠損。パテナー全面。	(9.92)
8	〃	〃	〃	〃	完形	一側縁部に調整加工。	(52.27)
4	E	〃	〃	〃	ほぼ完形	先端部折れ。パテナー有り。	(11.58)
5	A	表土	剥片	〃	完形	全面パテナー。一側面部と先端部に自然面を残す。打面は平坦。	(22.34)
7	C	〃	〃	〃	ほぼ完形	打面は平坦で自然面。側縁部に刃こぼれ。	(36.38)
3	D	第2層	〃	〃	完形	打面は平坦で自然面。パテナー全面。	(17.08)
15-1	B	第2層	石核	〃	残核	円錐状を呈す。	
2	E	〃	〃	〃	〃	新・旧3面の剥離痕を残す。	
3	C	表土	細石核・母核	〃	完形	小円礫を半割し，両面共に調整加工を施こす。	(15.05)
7	B	〃	細石刃	〃	先端部	一側縁部に刃こぼれ	
5	C	〃	〃	〃	胴部	両端共に折断，両側縁部に刃こぼれ。	
8	〃	第2層	〃	〃	先・胴部	主剥離面側に一部自然面を残す。	
4	E	表土	〃	〃	胴部	両端共に折断。	
6	〃	第2層	〃	〃	打面部	一側縁部に刃こぼれ。パテナー有り。	

機能が現形を示しているのではなかろうか。1は縦長剥片を利用，バルブを切除し，刃部を残し両側縁に刃遺し加工を施こして整え，基部も鋭く尖るように調整加工している。三角形状を呈す。刃部には先端部の一

部を残し刃こぼれが顕著である。特に側縁部先端の調整加工に特徴があり，石器の表裏より入念な刃遺し加工を施こしている。**2**は不定形剥片を利用したもので，１と同様にバルブを切除し両側縁，基部共に入念な刃遺し加工を施こしている。刃部には刃こぼれが顕著である。先端部欠損。**3**は先端部～胴部にかけ欠損している。縦長剥片利用で，１・２・８と同様で他に比して大きい。**4**は胴部より欠損しているが小形のナイフ形石器である。**5**は小形で基部が肥厚し，直線的な刃部を残し，両側縁に刃遺し加工を施こし整えている。裏面の基部に平坦剥離が１条みられる。**6**は先端部～胴部で欠損している。不定形剥片利用で扁平なナイフ形石器である。**8**は最大の大きさを呈すナイフ形石器で，先端部を欠損している。石器表面に欠損部より調整加工が２次的に施こされている。裏面の基部には平坦剥離がバルブの除去とは関係なく肥厚部の除去と基部調整のため一方向より数条施こされている。

Ⅰ類―２
(Fig.12―11)

縦長剥片を利用し，ほぼ直線的な刃部と基部を残して両側縁部に刃遺し加工を施こしている。他類に比して巾広で，意識的に基部を作出していることが大きな特徴であろう。**11**は黒曜石製で，縦長剥片を折(切)断し，側縁部に入念な刃遺し加工を施こしている。基部は石器表面より一撃で整え，その調整剥離痕が裏面までおよびあたかも基部の肥厚部を取り除いたかのような状況を呈す。刃部の抉入状，および先端部の一部は新しいリタッチによるものである。基軸と刃部のなす角度も約24～32度で，Ⅰ類の中では鈍角を示し，わりと巾広のナイフ形石器であろう。

Ⅰ類―３
(Fig.12―13, 14)

両側縁部の刃遺し加工は両端共に折(切)断面のみ調整加工を施こすという特徴を呈すものと，刃部以外の折(切)断面部に刃遺し加工を施こすものも含めるもので，刃部は曲線刃で斜行し，形状は柳葉形をなす約３cm程の小形のナイフ形石器である。**13**は曲線的な刃部と折(切)断面のみ刃遺し加工を施こすという特徴を有す。基部は石器表面より一撃で作出し，刃部よりも一側縁部に刃こぼれが顕著にみられる。**14**は折(切)断面に入念な刃遺し加工を施こし，特に基部は鋭く尖っている。刃部は曲線を呈す。

Ⅰ類―４
(Fig.12―７，９，10, 12)

基軸とほぼ平行するような直線的な刃部を呈すナイフ形石器である。**7**は先端部分の欠損したもので，入念な刃遺し加工を施こしている。先端は新しいリタッチがみられるが，もともと尖ってはいないようだ。**9**は７と同様で先端の尖りはなく，基軸に平行する曲線的な刃部を呈す。基部の部分は欠損しているので全容は不明であるが約２cm以下のナイフ

Tab. 5　ナイフ形石器計測表

挿図番号	器長 (cm)	刃長 (cm)	基部長 (cm)	側縁部長 (cm)	最大巾 (cm)	最大厚 (cm)	全周に対する割合			器長・最大巾・基部の割合			重量 (g)
							刃部の比率 (%)	側縁部の比率 (%)	基部の比率 (%)	器長の比率 (%)	最大巾の比率 (%)	基部の比率 (%)	
12-10	4.1	2.4		(3)	1.35	0.6				75	25		1.82
12	(1.4)		1.1	(1.2)	(1.6)	0.4							0.63
5	2.6	1.7	0	4.2	1.1	0.7	29	71	0	70	30		1.18
11	3.4	2.6	0.7	5	1.9	0.7	31	60	9	57	32	11	3.6
15	3.5	3.1	0.9	(4.9)	2.6	0.9	35	55	10	50	37	13	4.4
2	4.1	2.1	0	6.45	1.3	0.7	25	75	0	76	24		
14	2.95	1.5	0	5.5	1.4	0.6	21	79	0	68	32		1.65
7	(1.6)	(1.8)		(1.8)	1.7	0.5							0.6
13	2.95	1.7	0.6	4.2	1.2	0.6	26	65	9	62	25	13	1.32*
9	(2.1)	1.3		(3.2)	1.4	0.5							1.06
1	3.6	2.1	0	6	1.4	0.7	26	74	0	72	28		2.32
6	(1.4)	2		(2.5)	1.45	0.4							0.9
4	1.6			(3.45)	0.95	0.4				63	37		0.4
3	(3)	(0.8)		5.45	1.55	0.8							1.95
8	(4.2)	(1.5)		7.15	2	0.8							6.1

形石器であろう。**10**は７，９に比して器長が長い。柳葉形を呈し，バルブを折(切)断して刃遺し加工を施こしている。胴部より欠損。**12**は基部より欠損しているが，側縁部の加工は片側のみ行い，他方を刃部として利用したのであろう。側縁部から基部に至る部分を抉入状に刃遺し加工を施こすという特徴をなす。基部加工はなし。この石器は別に型式分類すべきなのかもしれないが，ここでは基軸と平行する刃部をなすという点と，全容不明でⅠ類―４の範疇に含めた。

Ⅱ類
(Fig. 12―15)

機能的に切載を主とする石器で，不定形剝片を利用し，刃部は曲線的な第１次剝離面をそのまま利用し，一側縁部に刃遺し加工を施こして整える。刃部と基軸のなす角度は鈍角である。**15**は黒曜石製の巾広の剝片利用で，刃部は曲線刃を呈し，側縁部は刃遺し加工を施こしているが，基部には明確な刃遺し加工は施こされていない。石器の基軸に刃部のなす角度は約35～66度程で，Ⅰ類に比して鈍角を示す。このことは機能的に切載具として，素材等選別されたのであろう。

以上のようにナイフ形石器は機能的な面，製作技術等よりⅠ，Ⅱ類の２形態に分け，更にⅠ類を４つに細分した。Ⅰ類の中でも約３cm以下の小形のナイフ形石器とそれ以上の大形のナイフ形石器があり，上記は幾何学的な形状を呈し組合せ道具の一種として利用され，他は単独に使用されたのではなかろうか。

註１　ここで使用した基軸とは石器の先端部と基部の中心を結んだ線。

Tab. 6　台形・台形様石器計測表

挿図番号	器長 (cm)	刃長 (cm)	基部長 (cm)	側縁部長(cm)	最大巾 (cm)	最大厚 (cm)	全周に対する 刃部の比率 (%)	側縁部の比率 (%)	基部の比率 (%)	器長・刃部・基部の割合 器長の比率 (%)	刃部の比率 (%)	基部の比率 (%)	重量 (g)
13-9	3.45	3	0.45	6.2	2.7	0.6	31	64	5	50	43	7	4.0
11	3.7	2.5	0.5	7.5	2.45	1.3	24	71	5	55	37	8	7.0
3	2.45	2.3	0.8	5.05	2.2	0.7	28	63	9	45	41	14	2.9
10	2.85	1.7		5.9	1.75	0.7	22	78		63	37		2.16
5	2	1.6	0.5	3.7	1.6	0.8	27	64	9	49	39	12	1.58
1	1.3	1.7	0.85	4.6	1.8	0.5	24	64	12	34	44	22	1.1
8	3.3	1.8	0.45	6.4	1.8	1	21	74	5	60	32	8	2.88
6	2.5	1.7	0.45	4.4	1.65	0.6	26	66	8	54	36	10	1.53
4	(1.7)	2.7		(0.8)	2.7	0.8							2.18
2	2.35	1.7	0.9	4	1.95	0.7	26	60	14	48	34	18	2.0
7	2.9	1.9	0.4	5.35	1.7	0.9	25	70	5	56	36	8	2.83

台形・台形様石器
(PL. 16・17)

台形・台形様石器は利用素材，製作技術，形状等よりⅠ～Ⅳ類に分けられ，更にⅢ類は3つに細分される。

Ⅰ類
(Fig. 13—1)

Ⅰ類は百花台型の台形石器で，素材は縦長剥片を利用し，側縁部の両端は折(切)断し調整加工を施こしている。刃部と基部が平行を呈す石器である。素材の剥片からして安定した剥片剥離技術が認められる。**1**は身の⅓は欠損しているが典型的な台形を呈す石器である。整った縦長剥片を利用し，両側縁部は折(切)断し調整加工を施こしているが，基部の調整はない。

Ⅱ類
(Fig. 13—2～4)

Ⅱ類は台形石器の範疇に含まれ報告されている石器で，概して斜行する刃部を有する為に刃部と基部は平行でない。側縁部の調整加工は両端共に刃遺し加工を施こすものと，一端は刃遺し加工，他は折(切)断面をそのまま利用する場合もある。形状的には刃部に最大巾を有し，台形状を呈す。ここでは台形様石器として分類を行った。**2**は斜行する刃部の大部分は使用時に欠損したと考えられ，刃部に刃こぼれが顕著である。一側縁部は折(切)断面をそのまま利用し，表面には平坦剥離を施こし整え，他側縁部は調整加工を施こしている。縦長剥片利用。**3**は折(切)断面に調整加工を施こし側縁部を整え，基部は折(切)断面をそのまま利用して作出している。形状は台形状を呈す。不定形剥片利用。**4**は基部を欠損している。曲線的な刃部で，一側縁部は折(切)断面を利用，他側縁部は調整加工を施こしている。石器の表面に平坦剥離を行い肥厚部を調整している。

Ⅲ類

Ⅲ類は三角形状を呈す台形様石器で，刃部に最大巾を有し，刃部と基部はほぼ平行である。刃部は直線，あるいは曲線刃を呈し，胴部がかな

り肥厚する。また側縁部の調整加工は折(切)断面に刃遺し加工を直角に近い角度で施こすか，あるいわ鈍角に近い角度で調整加工を施こし整えている。刃部の両端の欠損が多くみられる。

Ⅲ－1類
(Fig.13－5～7)

Ⅲ－1類はⅢ－3類に比して小形で，約3cm以下の台形様石器である。刃部はほぼ直線刃で基部と平行し，両側縁，基部に粗い刃遺し加工を施こし整える。形状は三角形を呈す。**5**は不定形剥片を利用し，小形で器長に対して部厚い胴部で，三角形状を呈している。**6**の一側縁部は鋭角な調整加工で，他側縁部は鈍角的な調整加工を施こしている。形状は三角形を呈す。**7**も不定形剥片を利用し，両側縁部に入念な調整加工を施こしている。基部の調整はそれに比して貧弱である。刃部の両端共に新しいリタッチで欠損している。5，6と同様に三角形状を呈す。

Ⅲ－2類
(Fig.13－8)

Ⅲ－2類は曲線的な刃部を呈すが，基部とほぼ平行し，側縁部の刃遺し加工は鋭角か，直角に近い角度で調整加工を施こし，最大肥厚部は平坦剥離で調整を施こす。刃部は器長の約半分程度で最大巾を呈す。素材は縦長剥片利用が多いが不定形剥片利用もみられる。他に壱岐島・原ノ辻遺跡で類例が検出されている。**8**は先述したように器長に対し刃部が約半分程で特徴を呈している。両側縁共に調整加工を施こし，一側縁部は直角に近い角度で整え，肥厚部は平坦剥離で調整を施こしている。細身で台形状を呈す。

Ⅲ－3類
(Fig.13－9，11)

Ⅲ－3類は所謂枝去木型とされる石器で，形状は台形，および三角形状を呈す。刃部に最大巾を有し，側縁部調整は鈍角で粗い刃遺し加工を施こしている。基部は刃部に比して極単に狭巾である。素材は不定形剥片を利用している。**9**は横長の不定形剥片を利用し，刃部の肩部を欠損しているが三角形状に近い台形を呈す。両側縁共に直角に近い角度で調整加工を施こしている。石器の表面には平坦剥離を施こし整える。**11**は横長の不定形剥片を利用している。刃部は直線刃で，両肩共に新しいリタッチで欠損している。側縁部調整は粗い調整加工で整え，石器裏面は平坦剥離で一部調整を行っている。部厚く三角形状を呈す。

Ⅳ類
(Fig.13－10)

Ⅳ類は縦長の不定形剥片を縦位置に利用し，切出状のナイフ形石器を想起させる石器であるが，石器表面の平坦剥離等の調整加工等を考慮し台形様石器の範疇と考え分類した。石器におけるこのような素材の利用は他にも類例[註1]が報告されている。**10**は縦長剥片を縦位置に用い，素材のバルブの位置が石器の基部にあたる。刃部は曲線的で，両側縁部は入念な刃遺し加工を施こしている。石器の表面に平坦剥離で調整を施こして

いる。三角形状を呈す。

以上Ⅰ—Ⅳ類に分類を行ったが，石器の素材，製作技術，形状的な面から機能面を考えると，Ⅰ類は薄く扁平で，基部も巾広に作出されている。Ⅱ類もⅠ類に比して胴部が肥厚するが基部は巾広で刃部と基部とほぼ平行している。Ⅰ，Ⅱ類共に台形状を呈し，組合せ道具の一種として使用されたと考えられる。Ⅲ類は刃部と基部がほぼ平行であるが，基部の作出がⅠ，Ⅱ類に比して巾狭で尖っており，形状的にもほぼ三角形を呈す。このことは機能的に単一的に利用された可能性が強い。また刃部の肩部分の欠損が多いことも，そのことを裏付けしているのではなかろうか。Ⅳ類は他類とは逆の素材の利用，および刃部の肩が外側に張ることなく，ナイフ形石器の特徴を有することなど，削・切裁具としての機能が考えられる。

註1　諫早市所在・源貞遺跡で台形石器をa類百花台型，b類源貞型として分類したが，このb類は素材を縦位置に利用している。長崎県文化財調査集報Ⅱ　長崎県文化財調査報告書第45集　長崎県教委　1979「Ⅰ源貞遺跡」。小田静夫「台形石器について」物質文化　18（1971）の中でも類例が報告されている。

掻器（PL.18）（Fig.14—1）

黒曜石製でパテナーが全面を覆っている。胴部を欠損しているが，基部には入念な調整加工を施こしている。両側縁部共に刃こぼれが顕著である。大形の縦長剥片を利用している。

削器（Fig.14—2，4，6，8）

2の先端部は欠損しているが，縦長剥片を利用し，一側縁は裏面よりあたかもナイフ形石器の刃遺し加工のような調整加工を施こし，他側縁は刃こぼれが著しく抉入状に刃こぼれがある。**4**も2と同様で先端部は折れ欠損している。打面は調整打面で90度に近い剥離面を有する。石器表面の片側半分は自然面で，一側縁部に抉入状に使用痕が残り，他側縁の一部に調整加工が施こされている。2，4共に全面パテナーで覆われている。**6**は黒曜石の円礫から剥離された2次剥片で，一側縁，先端部に自然面を残す。一側縁の表面より調整加工を施こし削器として利用され，裏面には刃こぼれが顕著である。**8**も円礫から剥離された大形の剥片を利用している。打面は調整され，表面に自然面を残している。打面部を残し全面に刃こぼれが著しいが，特に一側縁は表面，および裏面より数次の打撃にて調整加工を施こし削器として利用。

使用痕のある剝片
(Fig.14—3)

打面部は自然面で平坦，表面の尾瘤部に自然面を残す。大形の縦長剝片で，両側縁に小さい刃こぼれが顕著にみられる。全面パテナーに覆われている。

剝片
(Fig.14—5，7)

5，7共に大形の縦長剝片で，5の打面は平坦で側面部，尾瘤部に自然面を残す。部厚く，表面に3条の剝離痕を残し，裏面にはバルブ等顕著に残っている。全面パテナーに覆われ灰茶色を呈す。7は先端部を欠損している。打面は自然面で調整打面である。打面部に剝離具の使用痕が若干凹状の痕跡を残す。表面と裏面の剝離痕が逆方向を呈す。全面パテナーで灰色を呈す。

石核
(Fig.15—1，2
PL.19)

2は小円礫を利用し打面調整を行い打面を作出して剝片剝離作業を行っている。この石核は背面にも打面調整を施こし剝片剝離作業を行っている。また表面の打面調整面に3条の剝離痕が残され，3回に渡り3面に剝離作業を行い，表面の打面調整面→背面部→表面部との変移が明らかである。最終剝離面は数回で放棄されたのか，3面の剝離痕が残されている。またこれより作出された剝片は約1.5cm～4cm程度の小剝片であろう。1は円錐状を呈す黒曜石製の残核である。小円礫を利用し，打面部は左回りに調整剝離を施こし整えており，剝片剝離痕からしても順次左回りに剝離されたことが明らかである。2と同様，小剝片を剝離している。

細石核
(Fig.15—3)

細石核の母核

黒曜石の小円礫を利用し，まず円礫に加撃を加え打面部を作出して半割している。半割された礫に母核の底面より打面部に一条の樋状剝離を行い，更に数回調整剝離を施こし整えて細石刃剝離面を作出している。側面は半割面側の底面から数回の調整剝離を施こし整え，他側面は一撃の剝離で整えている。打面は平坦で，一方向に傾斜を呈している。

細石刃
(Fig.15—4，5，
6，7，8)

4，5は胴部で両端共に折断され，6は打面側で折断され，4～6共に側縁部に刃こぼれが顕著にみられる。又，細身の比較的整った細石刃である。7，8は先端部で，上記のものに比して巾広である。このことは細石核から剝離する技術，および細石核の形態差であろう。

Tab. 7　細石刃計測表

挿図番号	器長(cm)	最小巾(cm)	最大巾(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
15-7	1.5	0.8	0.65	0.2	0.21
5	1.5	0.5	0.4	0.1	0.09
8	2.2	0.75	0.7	0.25	0.38
4	1.3	0.45	0.3	0.15	0.07
6	1.4	0.55	0.5	0.2	0.15

石器の検出状況

先土器時代の石器類は表土層，および第２層，暗褐黄色土層中より出土した。

この第２層は縄文時代の晩期の炉址等の遺構，遺物を多数検出しており，縄文晩期の生活面として把握されている。調査地点の第３層・黄褐色土層中で若干遺物が含まれ，第４層黄褐色粘質土層中には遺物の包含はない。この第３層中の遺物も地域的に瘤りの部分に当り，先土器時代の遺物は検出されていない。このことは石器の流入という状況が窺われる。またこの遺跡の近接地に先土器時代の生活の場があったことは出土遺物からしても明らかであろう。それにこの地域は中規模なミカン畑の造成の折，縄文～先土器時代の遺物包含層が機械力で削平され，破壊されたことが試掘の段階でも確認されている。

黒曜石の原産地と出土石器

周辺地域において黒曜石の原産地は数多く確認されている。この西海町の北側対岸の針尾島[註1]にも良質の黒曜石の原産地（漆黒色，ガラス光沢）が知られている。この原石はかなり広範囲に分布していることが確認されている。また西彼杵郡西彼町の亀岳[註2]にも黒曜石の原産地（暗緑色を呈し，ガラス光沢が弱く，不透明）があり，佐世保市の東浜淀姫[註3]（灰黒色で半透明），松浦市星鹿半島[註4]，川棚町の大崎半島[註5]，更に佐賀県伊万里市・腰岳[註6]（漆黒色，ガラス光沢，透明）にも良質の黒曜石が知られている。また近年，壱岐島[註7]，宇久島[註8]の離島にも数カ所の小規模な原産地が発見されている。

昭和52年に針尾島の黒曜石・原産地の中の針尾人崎遺跡の緊急発掘調査を実施した（県教委）折に，針尾産の原石にも割口の表面観察上数種類の原石があることが明らかになった（現在，詳細な科学分析を行っている）。この調査地点とは直線距離にして約２kmの隔たりの範囲内に慶満郷（ケイマンゴー）遺跡が位置し，原石が利用されたことは出土遺物の上からも明らかである。

検出された石器類について

先土器時代の遺物の半数は調査区の表土層よりの採集で，また先述のごとく第２層も縄文晩期の生活面として確認されており，明確な意味での石器群は調査において検出されていない。このことは石器群の組成，組合せ，共伴石器等の問題についても不確実であるし，時間的経緯も定かでない。しかし，個々の石器の器種を検討してみると，時間的な巾は余り隔たりはないと考えられる。

慶満郷（ケイマンゴー）遺跡より出土した石器はナイフ形石器15点，台形･台形様石器11点，掻器・削器４点，使用痕のある石器１点，石核２点，細石核（母核）

1点，細石刃5点，剥片等が出土している。

ナイフ形石器は機能的な面よりⅠ，Ⅱ類に分類され，Ⅰ類は刺突・切載用具，Ⅱ類は切載用具と考えられる。これらのナイフ形石器は，小形は組合せ道具の一種，大形は単一的使用法が想起される。Ⅰ，Ⅱ類のナイフ形石器に類似する石器群が唐津市・切立遺跡で検出されている。時期的にも同遺跡と同様な段階での一時期が考えられよう。また台形・台形様石器も素材の利用，機能的な面よりⅠ～Ⅳ類に分けられる。

田平町所在・日ノ岳遺跡[註9]でⅡ層に大形の台形様石器（枝去木型），Ⅲ層に日ノ岳型の台形様石器と層位的に検出され，遺物の上からも形態，技術的に遷移過程が明らかにされている。ところで慶満郷（ケイマンゴー）遺跡の台形・台形様石器も形状的に台形を呈すものと，三角形を呈すものに分かれ，それぞれ機能的にもほぼ同様な差異を示しているようだ。これらの石器類は，日ノ岳Ⅱ，切立遺跡に並行するような時期の所産と考えられる。

また，削器，掻器，石核等の石器類もほぼ上記に並行する時期の所産と考えられるが，大形の剥片類は上記のナイフ形石器，台形・台形様石器類とは若干時間的な隔たりが考えられる。更に細石核の母核，細石刃等については，明らかにこれらの石器類と比べ後出性が考えられる。

以上のように，慶満郷（ケイマンゴー）遺跡のナイフ形石器，台形・台形様石器，削器，掻器，石核等の石器については同一時期の所産で，一つの石器群を構成していたであろうと考えられ，ナイフ形石器を主体とする石器群の終末期的様相を示していよう。

将来，周辺でナイフ形石器を主体とする石器群が，明確な層位で検出された段階で，より一層慶満郷（ケイマンゴー）遺跡の性格も明らかになるものと思われる。（最後に，Tab. 5～7は県文化課の中田敦之調査員の作成によるが，資料を使っての考察は時間的な制約の中で十分展開出来なかったが，今後の課題としたい。）　（副島）

註1　下川達弥「岩下をめぐる佐世保市の遺跡」岩下洞穴の発掘記録　中央公論美術出版（1968）

註2　清水宗昭(1975)「西彼杵半島西彼町白似田出土の石器について」考古学論叢1

註3　下川達弥「佐世保市東浜淀姫発見の黒曜石原産地」若木考古74（1965）

註4　牟田を中心に広範囲にみられる。

註5　道路断面に露頭している。

註6　杉原荘介・戸沢充則「佐賀県伊万里市平沢良の石器文化」駿台史学9-3(1962)

註7　長崎県教委「原ノ辻遺跡」長崎県文化財調査報告　第26，31，37集，

(1976～1978)

註8　城ケ岳採集の黒曜石

註9　下川達弥（1977）「西九州ナイフ形石器文化の概要―最近の調査から―」長崎県立美術博物館紀要3

参考文献　杉原荘介・戸沢充則（1971）「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」考考学集刊4―4

森　醇一郎（1971）「切立遺跡―馬渡発見の細石器」新郷土

下川達弥（1975）「長崎県日ノ岳遺跡の石器文化」物質文化　25

麻生　優・白石浩之（1976）「百花台遺跡」日本の旧石器文化　3　遺跡と遺物（下）

副島邦弘・山口譲治（1976）「諸岡遺跡」日本の旧石器文化　3　遺跡と遺物

下川達弥（1977）「西九州ナイフ形石器文化の概要―最近の調査から―」長崎県立美術博物館紀要3

白石浩之（1978）「西南日本におけるナイフ形石器終末期の予察」神奈川考古　3

2．縄文時代の石器

石鏃

(PL.20)

当遺跡において石鏃は欠損品をも含めて82点出土しており，黒曜石製品の中での割合は全体の75%を占めている。石材別では，漆黒色黒曜石製51点，灰青色黒曜石27点，灰白色黒曜石1点，安山岩3点の割合で，分類においては主に石鏃の脚部から大まかに5つに分類してみた。A類→脚の抉りが深く先端が尖鋭なもの，B類→A類に比べ脚の抉りが浅いもの，C類→三角鏃，D類→正三角形状を呈し，厚み・形においてC類より大形のもの，E類→底部が丸みをもつもの，以上の5分類で扱った。

A類

(Fig.16・17―1～36)

1・2は所謂鍬型鏃で，脚部の大きさ，抉りの深さなどから他の石鏃とは明らかに相異するもので，試みに石鏃の脚の内長と抉りの深さとの関係を出してみた結果，2点とも1.3以上の値を示した。[註1] **3～5**は石鏃中央部で肩が張る駒型鏃である。脚部の抉りは浅く，胴部が途中まで平行する。1～5までは灰青色黒曜石製(淀姫系)。

6～19は脚を持ちながらも1・2などのように脚部が大形にならず，しかも脚が左右に広がりをもつものをあげてみた。6～8は石鏃中央部より欠損し，3点とも上方からの力による折れを持つもので，同時に脚

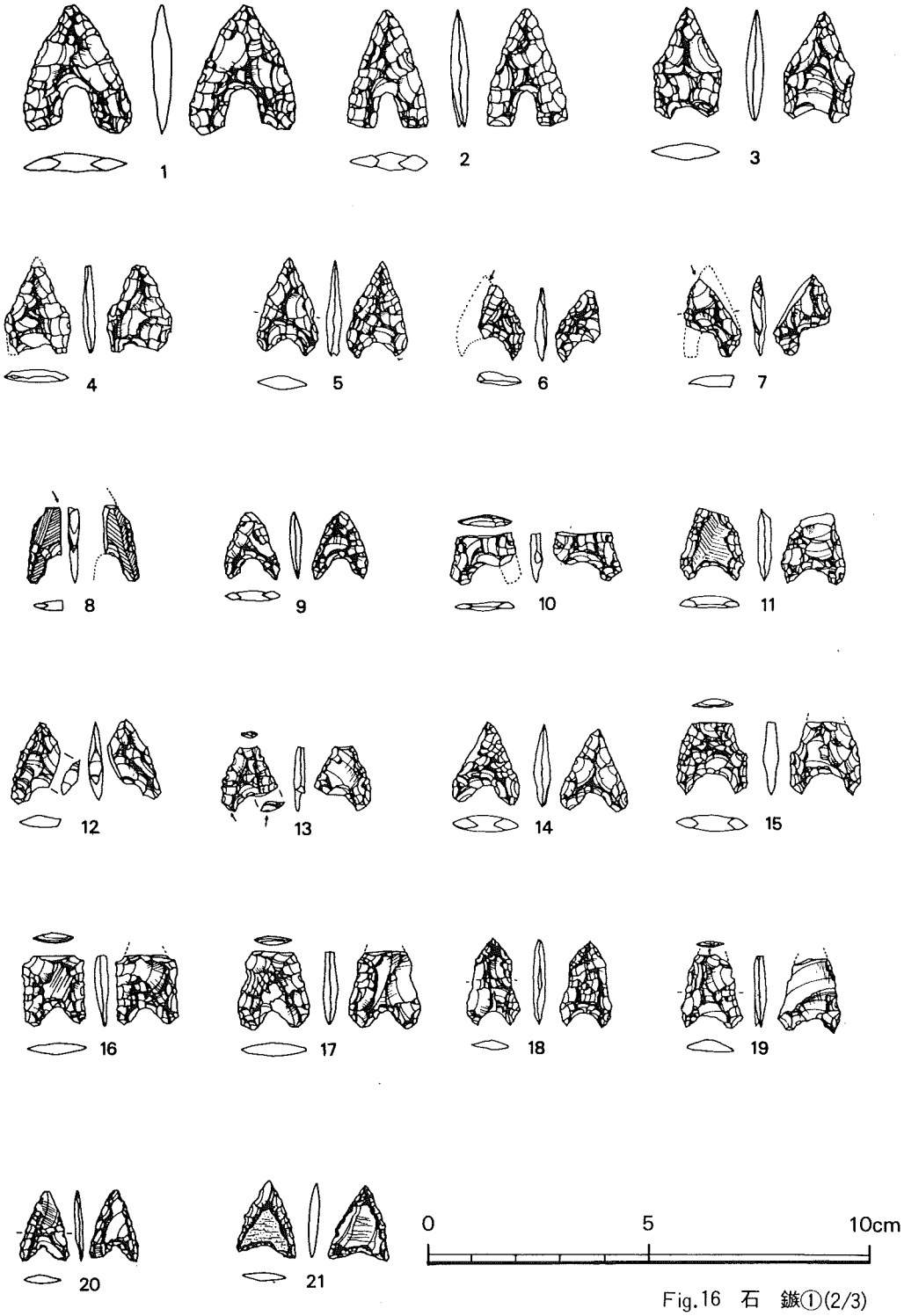


Fig.16 石 鏃①(2/3)

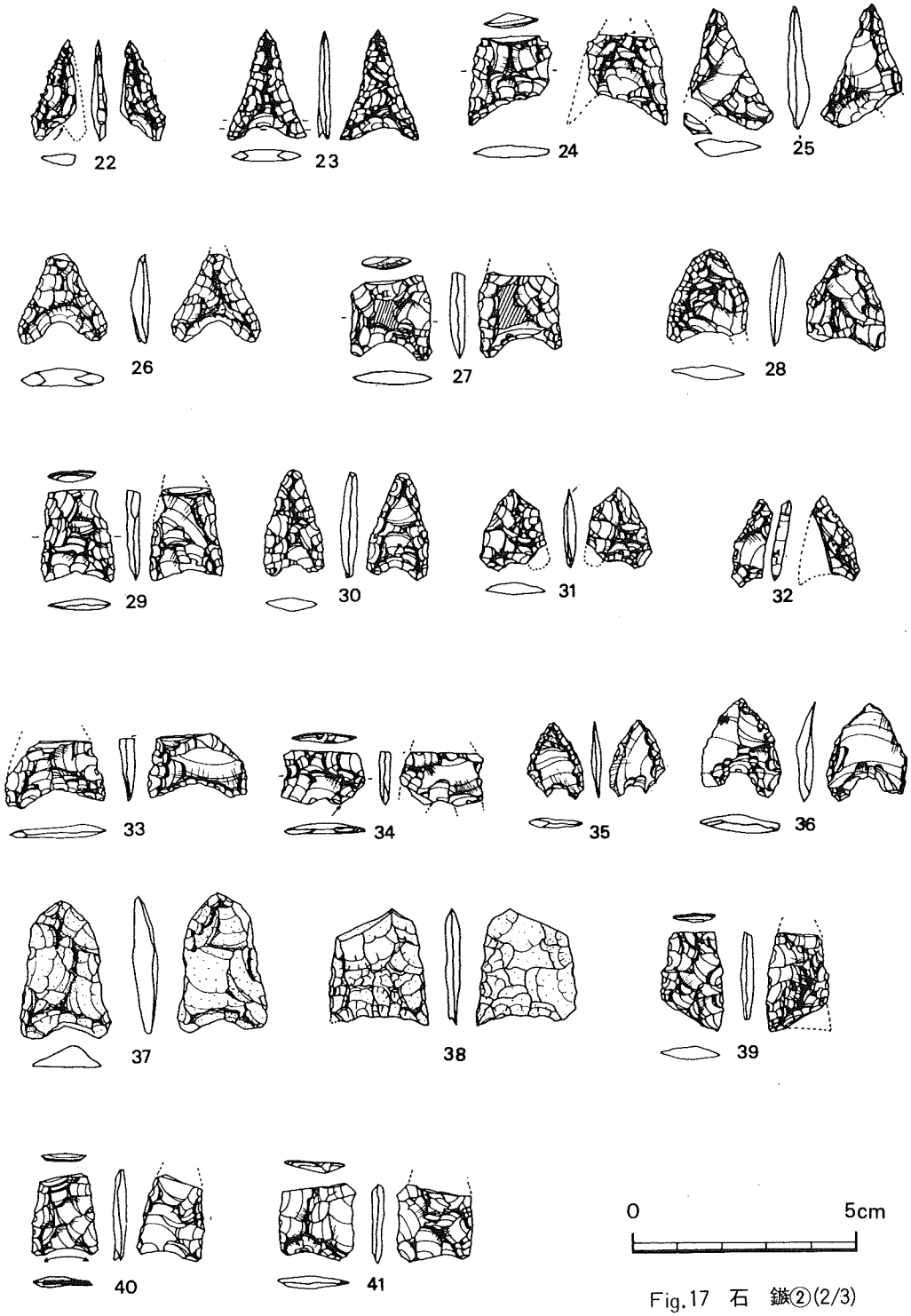


Fig.17 石 鏃②(2/3)

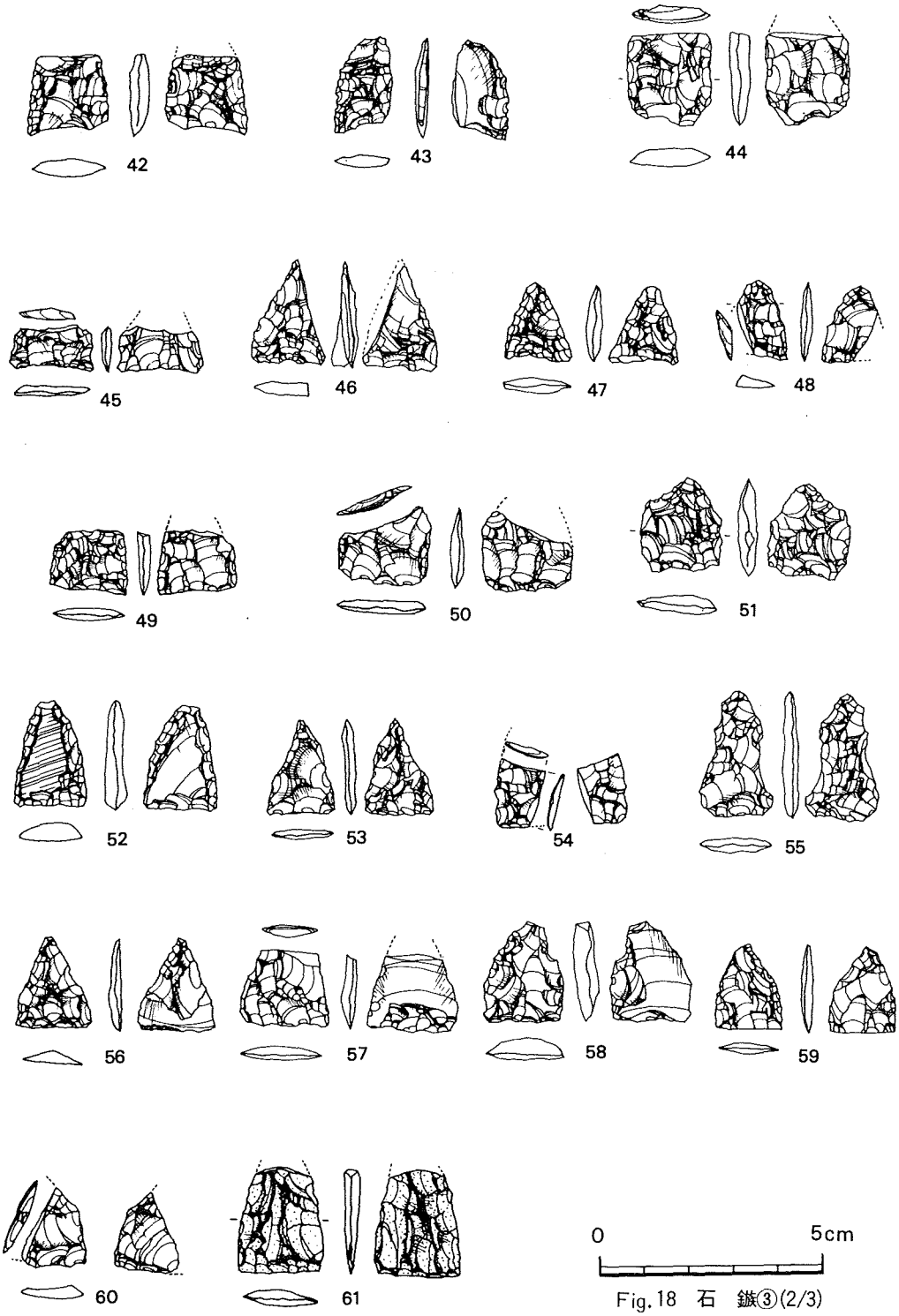


Fig.18 石 鏃③(2/3)

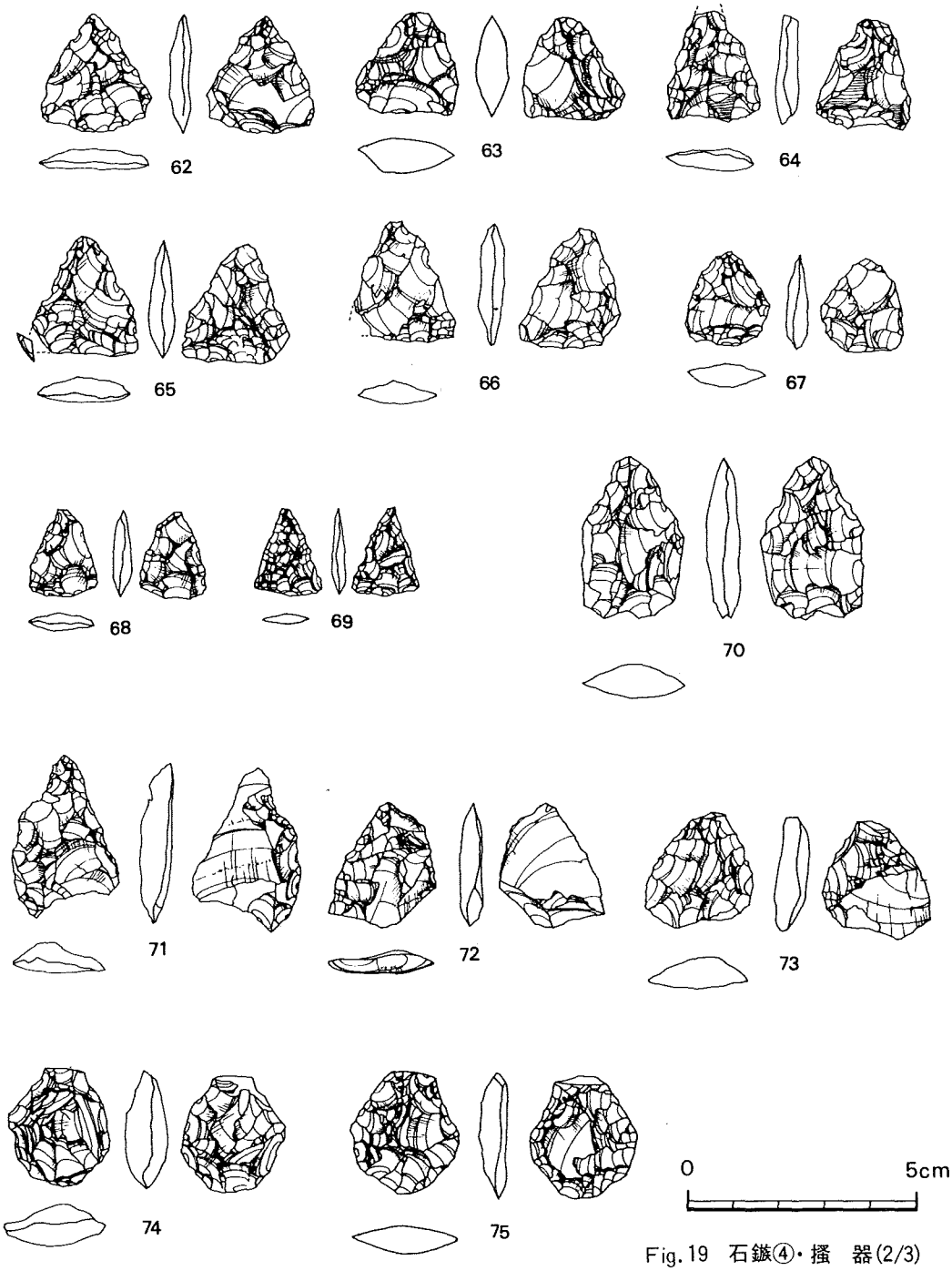


Fig. 19　石鏃④・掻　器(2/3)

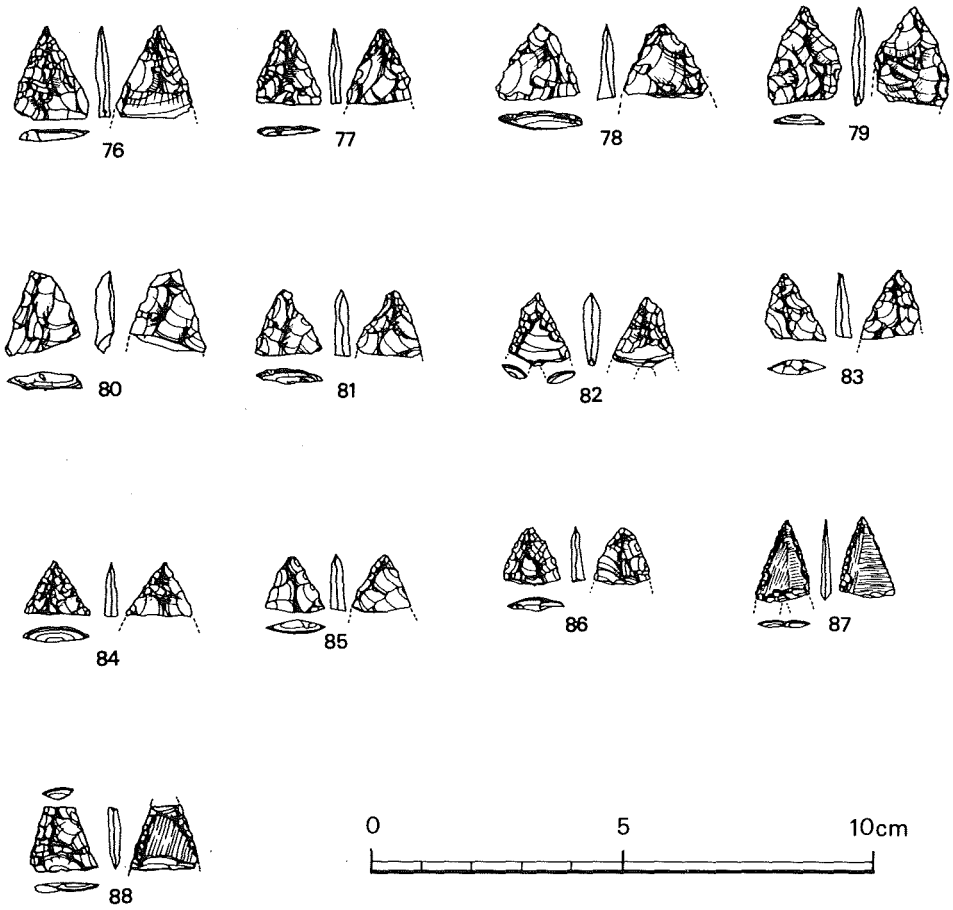


Fig.20　石　鏃⑤(2/3)

も破損している。8は全体を磨き終った後に周囲から調整し仕上げたもので，脚の形態は異なるが，16もまた同様の調整を行っているものである。6～14は脚部において同様な形態を持ち，大きさにおいても同様なもので，これをA_1類とする。A_1類は脚部における欠損が目立つ傾向にあり，その折れ方もバラエティーを持つ。

15～19は胴部が左右平行しながら先端部において急に尖鋭になるもので，脚自体も左右平行に延びる。3・4の駒型鏃に似かよるが，その肩部がより先端部に近くなり，その結果，使用の際先端部における損失が多くなるものと思われる。これら15～19をA_2類とする。27も又，同様の

形態をし，先端部が欠損するものである。

20・21は先端から脚部にかけて直線的で，抉り部と脚，抉り自体の角度が鋭角になるもので，これをA_3類とする。20・21とも主要剥離面を残し，21は正面において自然面を残す。

22～36まではさまざまな形態を持ち，分類的に統一性をもたないものであるが，脚を持つということでA類の中で取り上げた。22・23は先端部および脚において先鋭であり，長身のもので入念な調整加工が行われている。22の欠損状況は抉り部頂点からの力により欠損している。又，側辺において鋸歯加工を施しており，当遺跡における唯一の鋸歯加工を施した資料である。25～37までは脚を持つが抉りが浅く，脚部の抉りが円形状を呈するもので，脚部先端自体は尖鋭になる。37は所謂剥片鏃で，中屋敷遺跡表採のもので，当遺跡においては剥片鏃の出土は見られない。A類における石質は，1～5・10・12・14・16・21・22・27・29・32が灰青色黒曜石で，あとはすべて漆黒色黒曜石製。

B類
(Fig. 17・18—37～44)

左右胴部が平行して延び，底辺における抉りが浅いものを挙げたが，A類24～33との相違は，脚部における加工に固執することがなく，底辺がゆるいカーブを描くものを取り上げた。その総数は8点で量的に少なく，8点中7点が欠損品で，しかも先端の折れが目立つ。**40**は抉り部において磨滅しており，使用における一端を示すものと思われる。灰青色黒曜石製→**40・41・44**，安山岩製→**37・38**，漆黒色黒曜石製→**39・42・43**

C類
(Fig. 18—45～61)

底部が直線状に加工された三角鏃をC類とし，**45～61**までを取り上げた。表裏共に入念な平坦剥離を加えたものを基本とするが，主要剥離面を残すものも存在し（図—52・57・58），それらは素材となる剥片の打面側を基部とするもの，先端部側を打面とするもの，脚部側を打面とするものなどバラエティーに富み，一定の素材の使用は考えられない。C類すべてについて言えることは，先端部が尖鋭で，薄く仕上げており，基部調整を入念に施し，基部が直線的に作り出されていることである。

D類
(Fig. 19—62～66)

D類は正三角形を呈し，A・B・C類などの調整剥離に比べ，剥離自体が大きく，素材もぶ厚いものを使用しているものを取り上げてみた。**62**は正面を平坦剥離で覆われ，裏面において主要剥離面を残すもので，底部においては張り出しが見られる。基部が張り出すことについては，次に挙げるE類的要素を持つが，形・厚みなどからD類として分類した。**63～66**もすべて大形で厚みがあり，重量的にも他の石鏃の数倍にはなる。

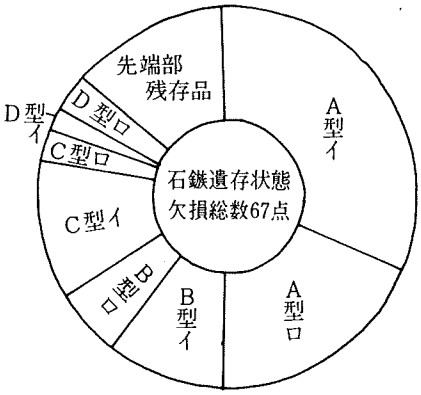
64については表裏共に一部磨きを入れている。D類の石鏃については，A・B・Cの石鏃と対象物の上で，異なる可能性もあると思われる。

E類
(Fig.19—67～69)

基部において丸みを持つ例は当遺跡においては3例を見るだけで，C類の範中で取り扱うことも可能かと思われる。剥離自体は全周において同じような剥離で亀甲状に仕上げ，全形を楕円，あるいは69のように舌状のように加工を施したものを挙げた。

(Fig.20)

76～88は欠損状況において基部欠損品を挙げた。すべて石鏃中央部における欠損と思われ，同様な性格を持つものと思われるが，A～E類において接合する例は皆無である。82・88・87はA類として分類できるものと思われ，脚が尖鋭に延びると推定される。残りのものは，先端部から胴部にかけての角度が同様であり，加工技術，厚みにおいても類似しているためB類，及びC類につながるものと推定される。



イ．先端欠損品
ロ．基部欠損品

Fig.21　石鏃遺存率

76～88において基部欠損品を集めてみたが，A～E類においても多くの欠損品が見られる。石鏃82点中50点が欠損品で，全体の61%にものぼり，石鏃の使用度が高かったことを示すものであろう。それらを欠損部位により区別するとFig.21のようになり，欠損部位総数67ケ所を数え，その内訳は，先端部欠損32ケ所，脚部欠損35ケ所であり，形式別にみるとA類の先端部欠損16点，脚部欠損13点，B類の先端部欠損7点，脚部欠損4点，C類の先端部欠損8点，脚部欠損3点，D類の先端部欠損1点，脚部欠損2点，E類の欠損品なし，先端部だけが残存するもの13点である。

註1　石鏃の脚の内長と脚の抉りを$\frac{\text{脚の抉り}}{\text{脚の内長}}$で計測した場合，1以上の値を持つものは1：2のみであった。

サイドブレイド
(Fig.22, PL.21)

ここに挙げるサイドブレイドは，形態的に方形を基調とし，素材となる剥片の縁辺，あるいはその全体において押圧剥離を加えて，上下あるいは一方にのみ刃部を作出したものを取り上げてみた。なお，長幅については，刃部面と思われる部分を長さとし，それに対して直角な面を幅とした。

1は，長さ1.1cm幅0.8cmでかなり小形の縦長剥片を使用したもので，素材自体をあまり変形することなく，三辺のエッヂに軽い調整加工を加

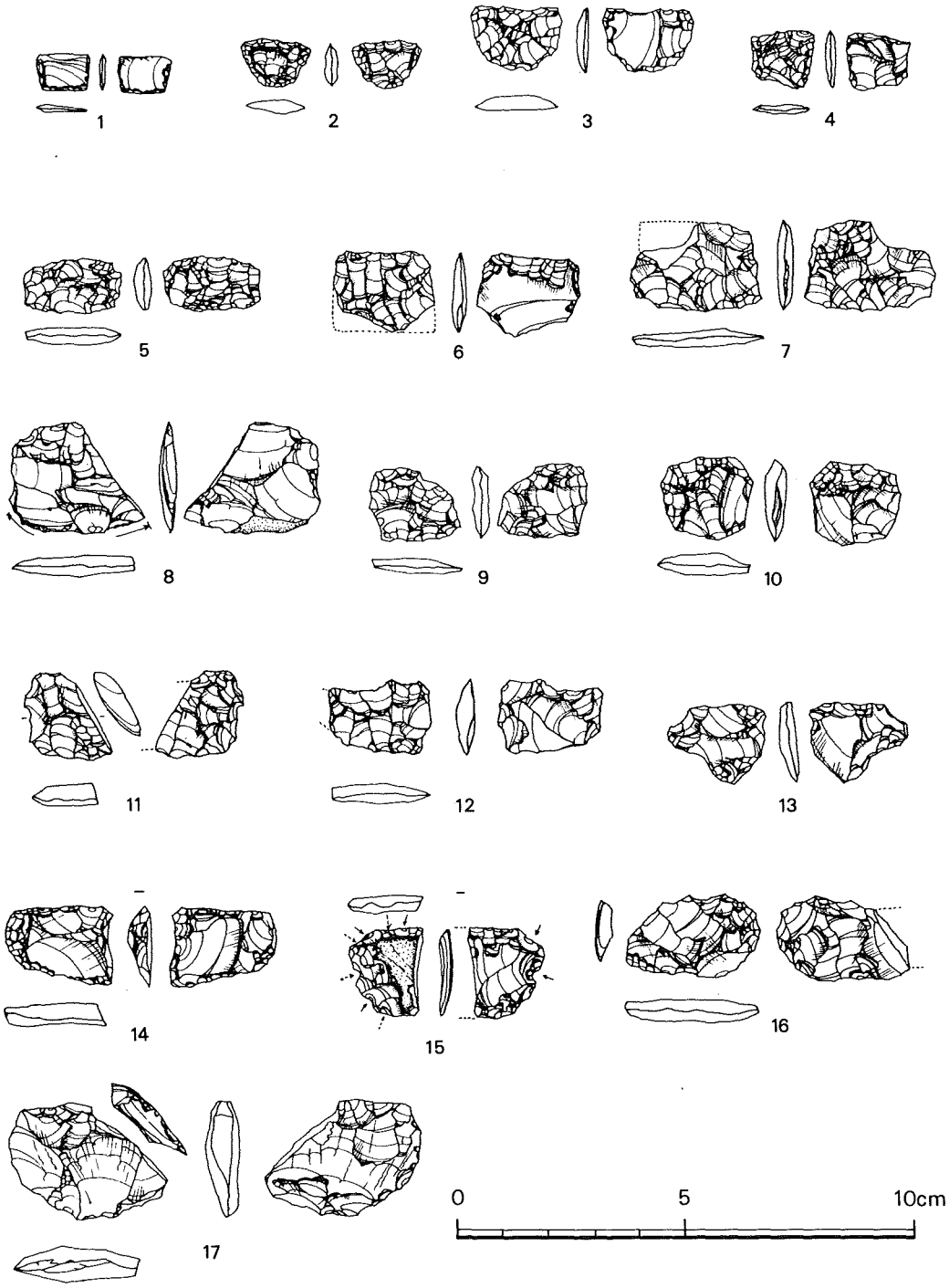


Fig.22　サイドブレイド(2/3)

えて，長方形に仕上げている。残りの一側辺は剝片自体のエッヂを残しながら，そこを刃部としており，使用痕が観察できる。図の正面左側面を打面としており，打面部位において打面除去作業を行ない，石器自体の均一性（厚みにおいて）を計るための作業と思われる。当資料は今まで知られる資料の中でも最小のものと思われ，素材となる剝片の形態自体もかなり整った資料であり，刃部は素材自体のエッヂを残すという点から，他の資料とは幾分異なる要素を持つ。(灰青色黒曜石)

2，表裏細かな剝離に覆われ，半月形状に仕上げられており，刃部は図上の裏面側に対する剝離が優位にたつ。加工自体は石鏃の加工と同様な技術をもつものと思われ，形態的にも下面が尖鋭であれば，石鏃としての機能を持ちうると思われる。

3，2と同様に直線状に延びる刃部に対し，他の面が弧状を呈し，半月形状になるもので，正面は剝離面に覆われるが，裏面は主要剝離面を残しながら周囲のみに加工を施している。漆黒色黒曜石製。

4，石鏃先端部欠損品を二次加工した感がするもので，図上左側辺の加工が最終的に行われた加工である。加工自体も石鏃と同様，緻密になされているが，正面における加工が裏面よりも緻密に行われている。

5，漆黒色黒曜石製で，最大長2.15cm・幅1.2cmを計る。上下からの剝離により全体の形状が整えられ，主要剝離面を残さないもので，断面が楕円形を呈し，刃部附近でその角度が急になる。石鋸と同様な形態をもつものである。

6，他のサイドブレイドが剝片を横位に使用するのに対し，6は剝片を縦位に使用し，刃部を打面と反対側に設け，刃部の加工は主要剝離面のリングと直交する形で施されている。正面における剝離面は上部からの剝離が優勢で，細石刃に見られるような樋状剝離を裏面における刃部加工の後に最終的に行い，その剝離は中央部にまで達している。下端における折れは，正面右下端が正面からの，左下端が裏面側からの折れである。

7，全体の剝離は入念であり，厚さも0.4cmと大きさに比して薄く，全形状を長方形に仕上げているもので，正面中央部にフィッシャーをもつ面が主要剝離面の残存と考えられる。そのように考えた場合6と同様に剝片を縦位に使用したものと考えられ，従って下端方向に打面があったものと思われる。

8，当遺跡のサイドブレイド中最大のもので，現存長2.9cm，幅2.4cm，

表裏共に剝離面に覆われるが，正面における加工がより入念であり，裏面下端部においては自然面が見られる。正面下刃部において細かな剝離が見られるが，すべての剝離は正面側に施されている。灰黒色黒曜石製。

9，表裏共に同様な剝離面を構成するが，刃部における加工が正面側において優位にたつ。灰黒色黒曜石使用。

10，正面観がゆるい楕円形を呈し，周囲からの剝離により亀甲状を呈すもので，裏面に一部主要剝離面を残す。右側辺の折れは正面からの力を受けての折れで，刃部は細かな交互剝離の加工により，ジグザグ状を呈すが，図正面側における刃部加工が著しい。（漆黒色黒曜石）

11，当遺跡のサイドブレイド中では厚みのあるもので，図上部抉り部よりの折れによって半欠しているが，上下左右が平行するものと思われる。上下ともに刃部において，交互剝離状の加工を行い，表裏ともに入念な剝離面に覆われる。（漆黒色黒曜石）

12，左側辺を正面からの力で欠損するもので，先細りになっていくものと推定される。表裏面を構成する一つ一つの剝離は２・４・５などの細かな剝離ではなく，それよりもやや大きな剝離によって加工されている。このような大きな剝離は，裏面の主要剝離面に対し，正面に厚みのある場合において行われるようであり，その結果石器自体の断面は凸レンズ状を呈する。（漆黒色黒曜石）

13，正面剝離面に覆われ，裏面において主要剝裏面を残す。図上部，刃部と思われる面では主要剝離面側に対しての調整が目立つ。

14，正面に稜をもつ縦長剝片を使用しており，稜による厚みを除去するための作業のためか，主要剝離面側においてリングと逆方向の剝離が裏面の中央部まで延びている。エッヂにおいてのみ加工が施され，特に裏面上端において加工が入念である。（漆黒色黒曜石）

15，図裏面右側辺上に打面を持つ縦長剝片を使用しており，周囲の加工は交互剝離により，刃部は浅い鋸歯状を呈する。（図上実線の矢印は主要剝離面側からの剝離・破線は正面側からの剝離）折れは正面側からの力により折れている。（漆黒色黒曜石）

16・17は他の物に比べ作りが雑で，厚みのある剝片を使用しており，１～15のものとは相異するが，剝片を横位においた時の上下の剝離が目立った点で取り上げてみた。

以上，所謂サイドブレイドについて，当遺跡では15例を挙げたが，それらは厚み・大きさ・形状においてバラエティーを持ち，それらについ

ての分類を行ったが，ここではその加工技術，形態などの点から考えてみた。

Ⅰ型
(Fig.22—1・14)

表裏共に素材の中央部にまで調整剥離が達することなく，剥片エッヂにのみ調整を加えるもの，但し，1と14は刃部の残し方において相異がある。1のように一辺をそのまま素材のエッヂを残すものをⅠa型とし，14のように全周に調整剥離が及ぶものをⅠb型とする。

Ⅱ型
(Fig.22—6・7・10・12・13)

正面は調整剥離に覆われるが，裏面において主要剥離面を残すもの。そのうち剥片を刃部に対して横位に使用するものをⅡa型(10・12・13)，剥片を縦位に使用するものをⅡb型とした。

Ⅲ型 (Fig.22—5・8・9・10・11) 表裏共に剥離面に覆われ，主要離面を残さないもの。

Ⅳ型
(Fig.22—2・3)

形態的に他のものと異なり半月形状を呈するもので，表裏調整剥離に覆われたものをⅣa型，主要剥離面を残すものをⅣb型として分類した。

サイドブレイドについて

サイドブレイドは西北九州の後晩期の遺跡において，石鏃とともにコンポジットツゥールとして古くから注目されている石器で，特に後期の遺跡において，鈴桶型石核から剥取される縦長剥片との素材関係から，剥片鏃・石鋸とともに後期の代表的石器として捉えられており，石鋸との形態的・技術的類似性から石鋸と同様の機能をもつことが定着しつつある。[註2] しかし，今までのサイドブレイドに関する出土例では，一遺跡においての数量がきわめて少なく，いわゆるコンポジットツゥールとしての使用を考える上での一つの問題点であったと思われ，当遺跡においては15例をみるに至り，その問題に関しては，一つ前進したものと思われる。時期的には後晩期遺跡に出土があるとされているが，[註3] 晩期におけるサイドブレイドの出土遺跡の詳細な報告例は数少ないもので，近年においては佐賀県の中野遺跡において夜臼相当の時期に出土例があり，[文献1] 現在のところサイドブレイドの下限として捉えられるものと思われる。当遺跡においては，土器の主体は晩期Ⅱ式に相当するもので，又石器においても石鏃82点中，後期において出土が顕著な剥片鏃が皆無であること，剥片・石核においても所謂縦長剥片といわれるものの出土資料もないため，当遺跡のサイドブレイドも晩期に位置づけが可能かと思われる。後期に盛行するサイドブレイドが晩期終末まで移行することは確実であると思われる。石鋸との共伴関係においては，当遺跡では紛失してはいるが，半月形状の石鋸が1点出土している。石鋸もサイドブレイド同様，集中して出土した例がないため，コンポジットツゥールとして考えるにおいて若干不備な点を残している。先に述べた佐賀県中野遺跡におい

ては，石鋸の出土がないなどの点からすると，晩期終末にかけてサイドブレイドは残存するが，石鋸が衰退する傾向にあるのではないかと思われ，この点については今後の成果が待たれるところである。

機能について

サイドブレイドの機能については，古くからその形態的類似性から石鋸と同様の機能を持つものとして考えられていることは先にも述べたが，特に萩原・久原，両氏によるサイドブレイドの考察は，その形態性・技術性に目を向けられ，類似資料を多数挙げたことにおいて注目すべきものである。[文献2] 新旧におけるサイドブレイドにおいての機能は，鎌としての使用か，漁撈用かに争点がおかれているが，一貫していえることはコンポジットツゥールとしての使用法で，共に刃としての機能を持つと考えられていることである。[註4] しかし，サイドブレイド自体形態的な捉え方において若干の相異がみられ，その点から機能において異なる見解が生じてきたと思われる。刃としての機能を考えた場合，剝片（使用痕あるもの，一部二次加工あるもの）・サイドブレイド・石鋸の三者を根本に考えなければならないと思うが，この三者に同様な作業，切るという作業を与えた場合（漁撈用のコンポジットツゥールとして使用したとしても，結局切る作用として捉えられる）この三者の果たす役割はその刃部構成から，多少異なってくるであろう。つまり剝片の場合，カミソリと同様な作用を果たすのに対し，石鋸においては引き裂くという作用を対象物に与えるものと思われる。これらに対し，サイドブレイドは，剝片のエッヂを再加工して刃とするが，石鋸のような鋸歯を作る段階までは至らない。ここに各々の対象物が限定されているのではないかと思われ，そこにおいては他のスクレイパーとの関係においても対象物が異なり，あらゆる切るという機能を持つ石器が多様化してくるものと思われる。つまり，機能という面では同様な面を持つが，対象物において異なってくるのではないかと考えられるのである。その中で当遺跡の石器組成をみた場合，石斧の出土量が多く，その中でも扁平打製石斧の出土が多いということ，また石錘の出土がないという石器組成を持ち，漁撈に関係する石器が出土していない点，他の遺跡と様相を異にする傾向にあるといえ，サイドブレイドの機能を考える上で，当遺跡では漁撈との関連性が現状では不完全であると言えよう。しかし，サイドブレイドの出土例は，海岸遺跡に集中する傾向にあり，現状では漁撈との関係を無視することはできないものと思われる。

掻器
(Fig. 19—71～75, PL. 21)

いずれもぶ厚い剝片を利用したもので，サイドスクレイパー（**71～73**）とラウンドスクレイパー（**74・75**）とに区別できる。**71～73**は尖頭状を呈し，主要剝離面を残すもので，正面における剝離が緻密であるのに対し，裏面は刃部になったと思われる部分にのみ加工を加え，主要剝離面を残存させている。**74・75**は71～73よりさらにぶ厚い剝片を使用し，表裏共に亀甲状の剝離を加え楕円形状に仕上げており，持に周辺エッヂには入念な加工を施し，刃部としている（71・72漆黒色黒曜石，73～75灰青色黒曜石）。

彫器
(PL. 22)
(Fig. 23—1～5)

当遺跡において彫器は5点出土しており，基本的に**1**・**2**のような縦長剝片を使用するものと**3**～**5**の小形の不定形剝片を使用するものとに分類される。その中でも2のように上下において調整を施すもの。3・5のように左右両面に彫刻刃面を持つものなどいくつかのバラエティーを持つ。**1**は上下に自然面を残し，剝片末端部に調整を施した後に彫刻刃面を形成しており，彫刻刃面は何回かの再生が行われている。**2**は上

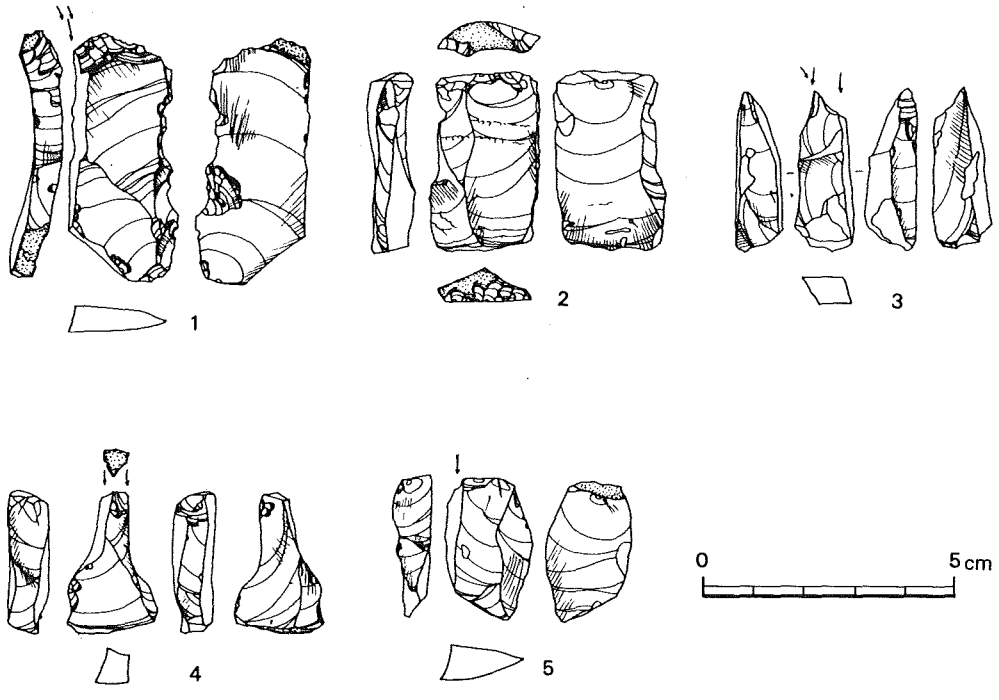


Fig. 23 彫 器(2/3)

下に自然面を残すが，共に調整を行ない，正面左側に交差する形で，彫刻刀面を形成している。剥片右側エッヂ部には細かな調整がみられる。**3**は正面に右側からの剥離面が残るぶ厚い不定形剥片で，剥片自体は横長のものを使用し，左右両面に彫刻刀面をもつ。**4**は小形の縦長剥片の一端に彫刻刀面をもつもので調整は見られない。**5**は上下に自然面をもつぶ厚い剥片を利用し，左右に彫刻刀面をもつ。これら5つの彫器は剥片自体の厚みが，ほぼ同様の値を示し，従って彫刻刀面もほぼ同様な幅を呈している。彫器はサイドブレイドとの共伴関係において注目される石器であるが，彫刻刀面の幅における共通性は，溝の幅との何らかの関連を持つのかもしれない。これら5点を見てもわかるように，素材となる剥片に共通性は見られない。

石核
(Fig.24・25・26, PL.23)

石核は16点出土している。すべて小形で残核であると思われるが，中には原礫に対し，2～3回の剥離を加えただけのものや，石核の剥離面から剥片に礫面付着が考えられるものが多数ある。大きさの上で，出土した剥片を剥離したような剥離面をもつ石核は検出できず，一つの問題点として捉えることができよう。ここに挙げた石核については，その剥離面構成，及び形態からA型・B型・C型に分類し，その中においても更に細分してみた。

A型
(Fig.24—2～3)

A型は，打面転位を行い，且つ礫面を留めるものを挙げた。**2**はa面に対し，左右及び下面に礫面を残すもので，打面転位をして剥片を剥取している。第1の段階として打面を形成し，a面において剥片剥離を行い，次段階としてC面に打面転位を行い，剥片剥離作業を行っている。C面の打面は礫面を利用しているもので，A・C面共に礫面付着の小形剥片が作出されたものと思われる。**3**は2が方柱状を呈すのに対し，舟底状を呈すもので，最初にd面を打面としてa面に剥離を加え，次にa面を打面としてb面において剥片を剥取したものである。2とは相対的に最初の調整打面に対し，横面における剥離が優位にたつ。

B型
(Fig.24・25)

B型は打面転位がなく，前面からの剥離が優位にたち，結果的に背部に自然面を残すものを取り上げた。平坦打面のものをBⅠ型，打面調整のあるものをBⅡ型とする。

BⅠ型
(Fig.24—4・5・7～9)

4は打面自体がポジティブを呈しており，大形のぶ厚い剥片を使用しての石核で，当遺跡において残存する石核の中では大形のものである。**8**も同様にポジティブ打面を有し，a面において1～2回の剥離作業を行っただけのもので，最初の段階においては，石核の調整剥片として剥

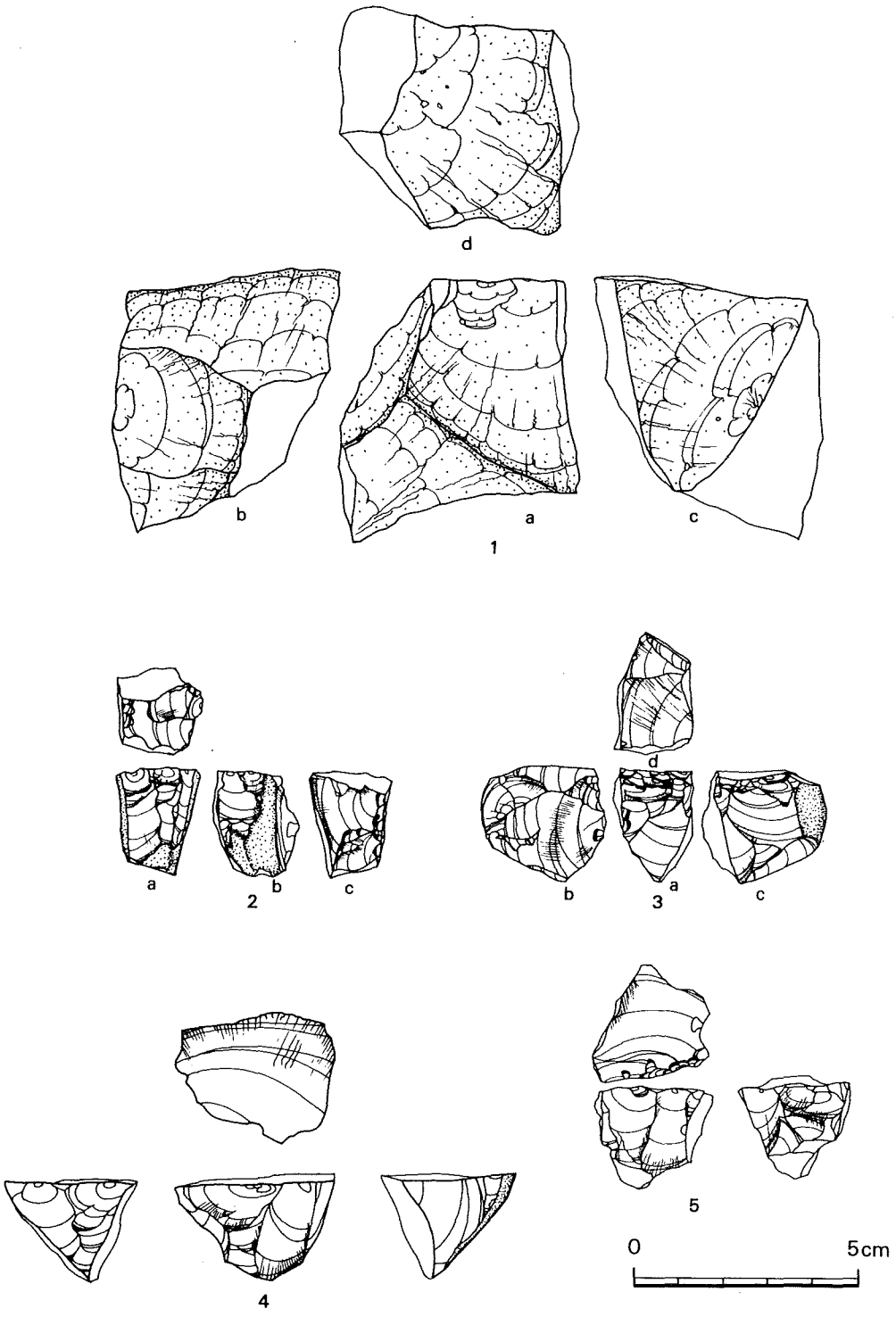


Fig. 24　石　核①(2/3)

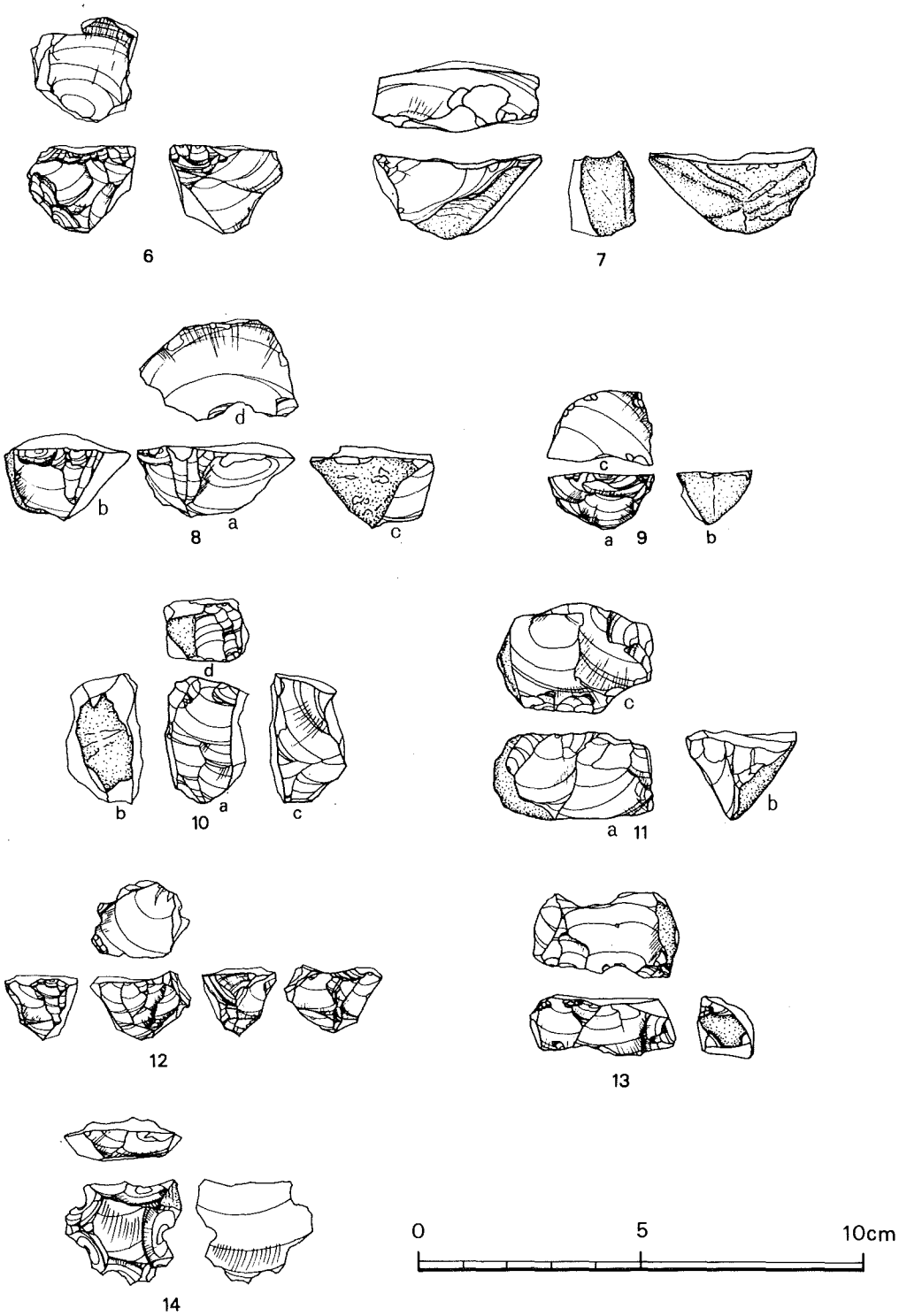


Fig.25 石 核②(2/3)

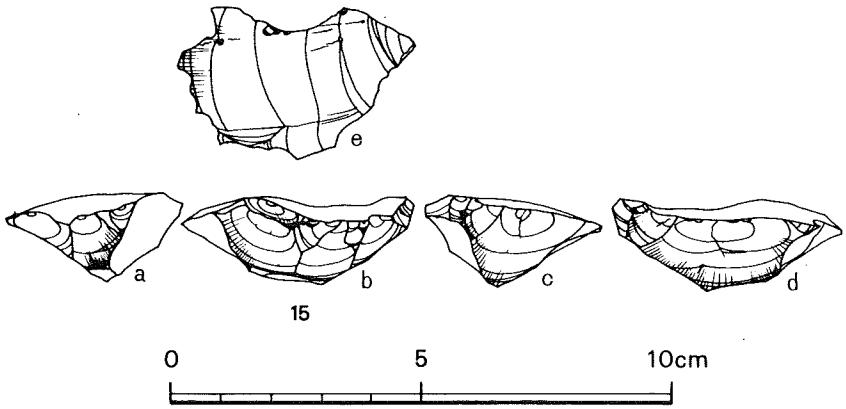


Fig. 26　石　核③(2/3)

離されたものと思われる。7・8は4と同様に背部に礫面を有し，特に7は一回の剥離だけに留まり，剥取された剥片は大幅に礫面を有するものと思われる。

B Ⅱ型
(Fig. 25—10・11)

10は細かな打面調整を行い，a面における剥離面構成を成しており，剥離面は単調で，一回に留まる。なお，c面における剥離面が最終的なものである。11は最初に礫面を打面としてc面における剥離をし，それを打面としてa面における剥離を行っている。

C型
(Fig. 25—12・14, 26—15)

C型は平坦打面に対し，全周に剥離が及ぶものを取り上げた。12は打面1.7 cm×1.7cm，高さ1.4cm，と石核としては極小のもので，剥片自体は打面のエッヂの摩滅から石核の打面エッヂを押圧の形で剥取したものであろう。15は打面が鋸歯状に張り出すもので，打面に対し打点を後退させた結果であると思われ，剥取された剥片は，打面が打点を頂点として三角形を呈したぶ厚いものになると思われる。また最終的にこの石核自体をtoolとして使用したものと思われ，d面中央の剥離面と打面とのエッヂ部縁辺に使用痕が目立つ。14もまた同様の形態を示し，15よりも小形であるが，同様に鋸歯状になるもので，石核としてよりも15と同様，これ自体をtoolとして考えた方がよいと思われ，スクレイパー的機能，あるいは錐としての機能が推定される。最後に1の石核は安山岩製で，打面転位を行う点でA型に属すが，全面すべて剥離面に覆われ，礫面を残さないものである。以上，石核15点をそれぞれに分類したが，これら

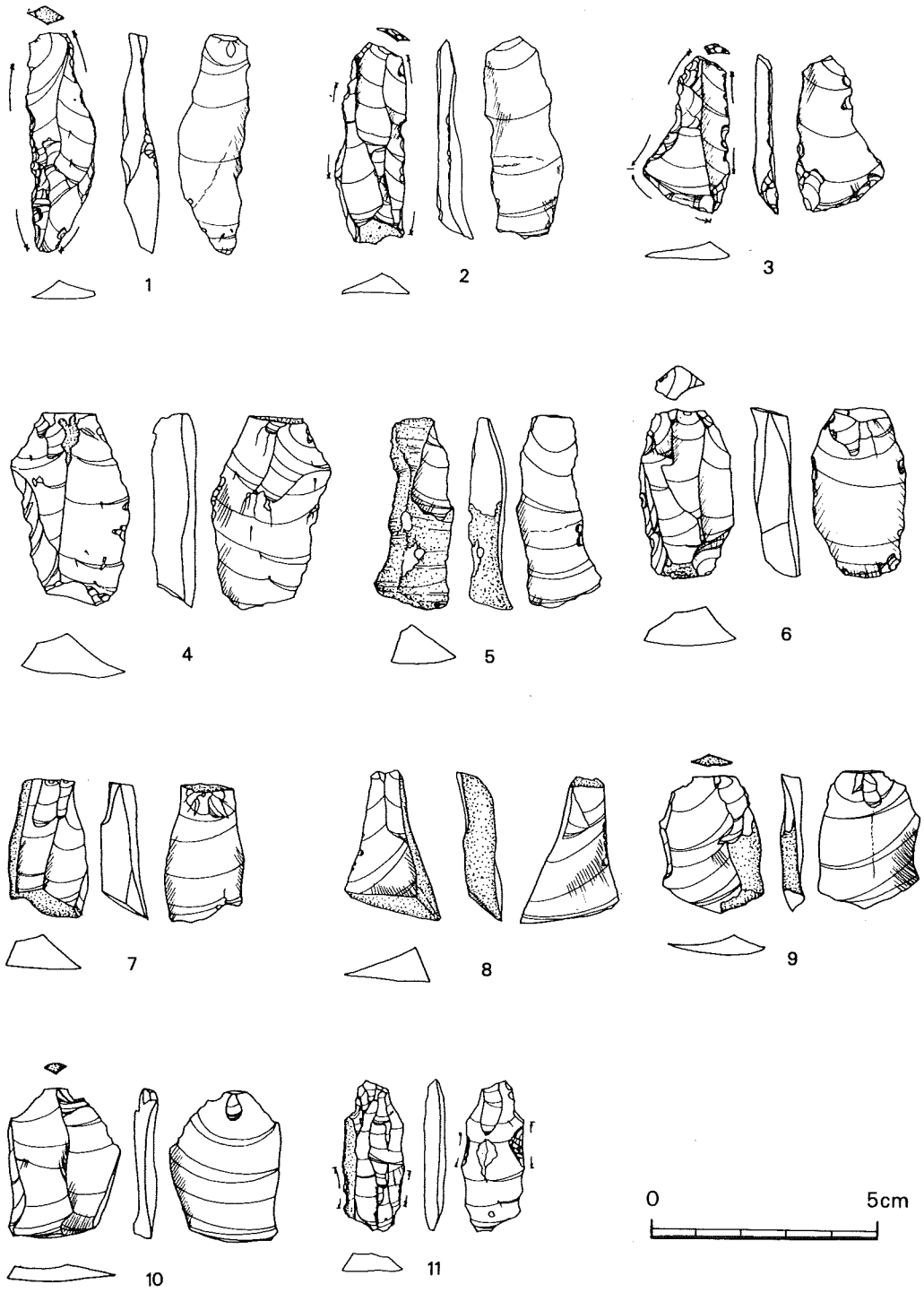


Fig.27 剝 片①(2/3)

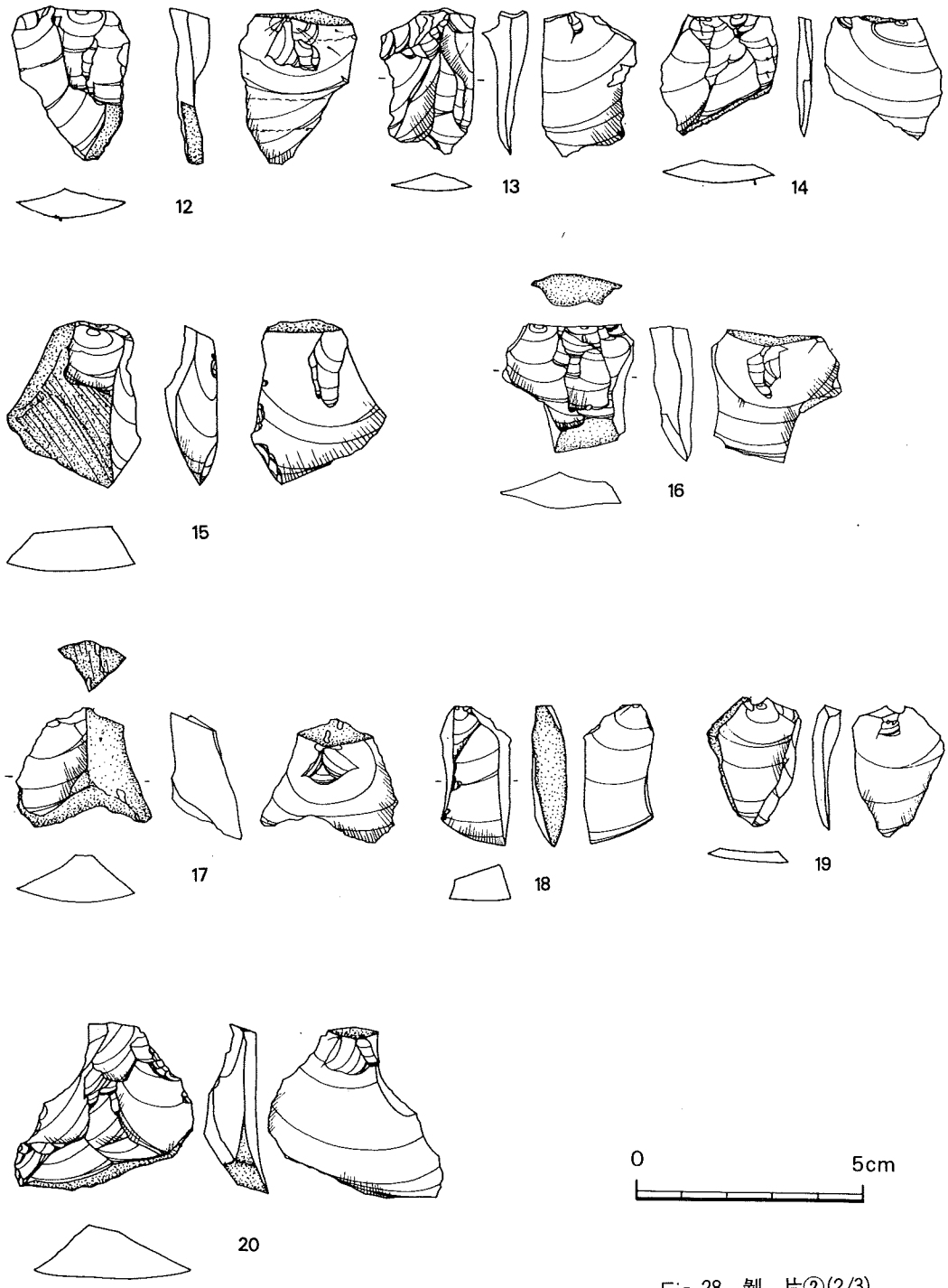
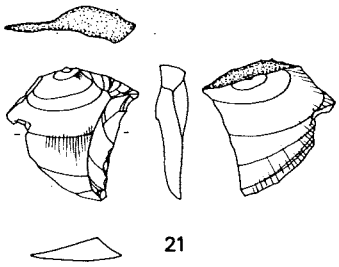
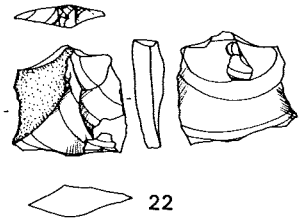
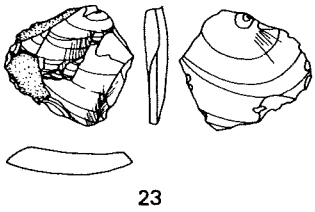
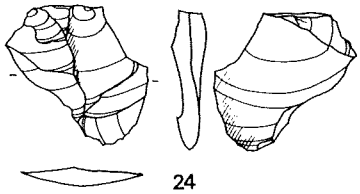


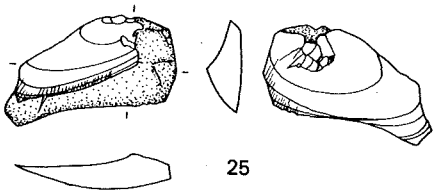
Fig.28 剝 片②(2/3)

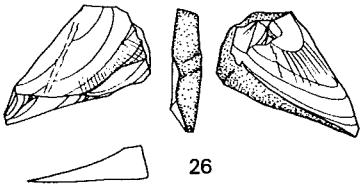


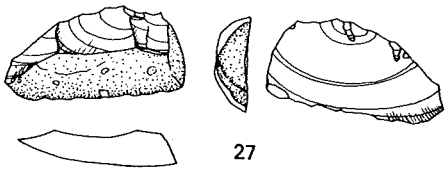


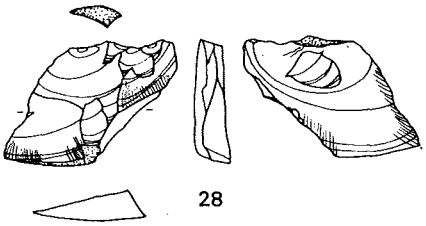


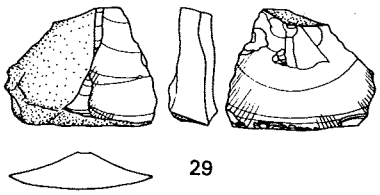












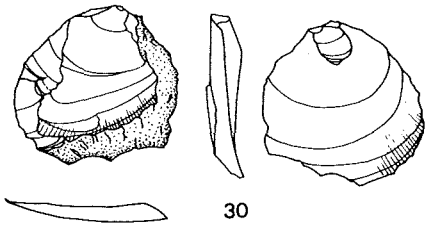


Fig.29 剝 片③(2/3)

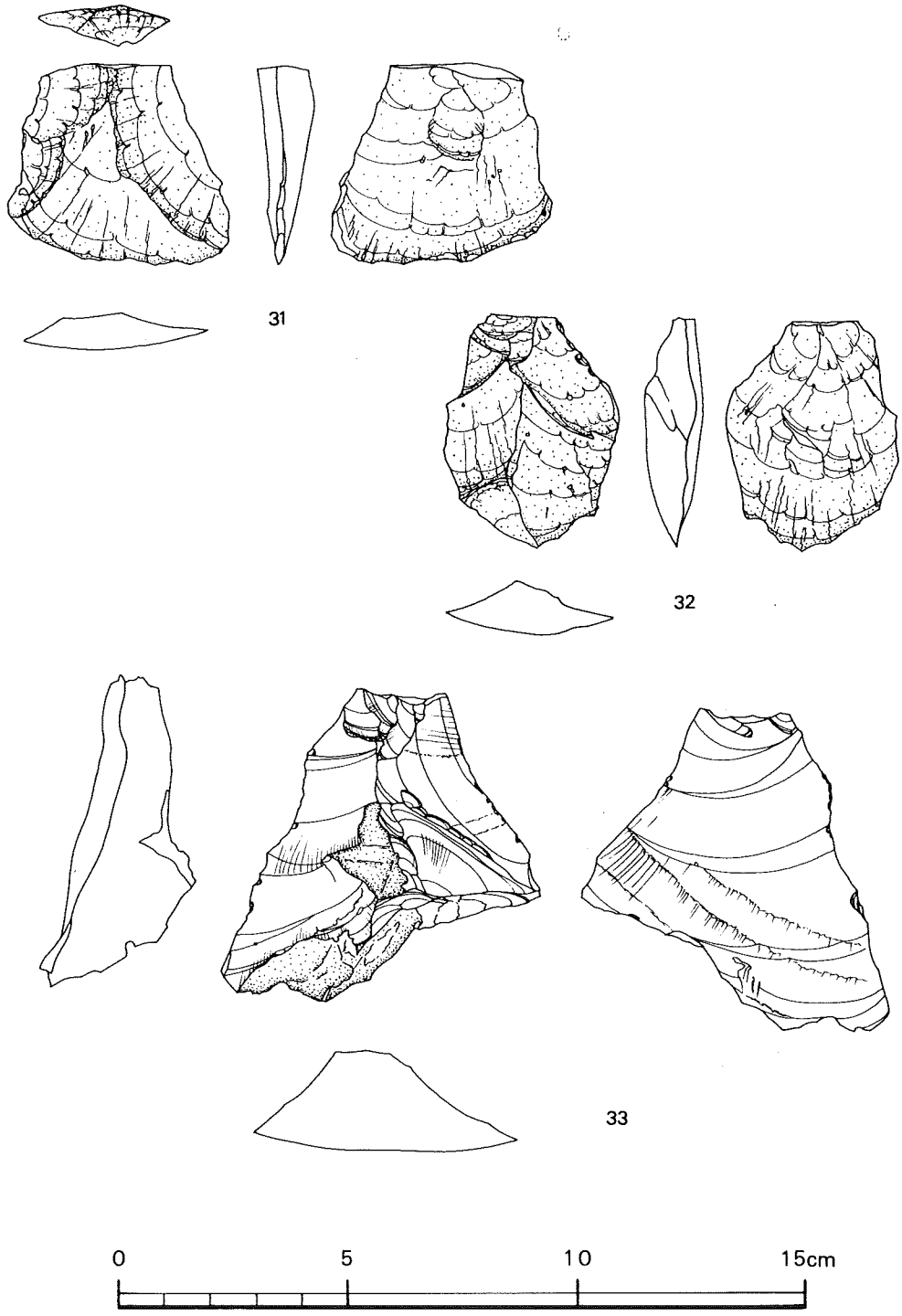


Fig.30 剝 片④(2/3)

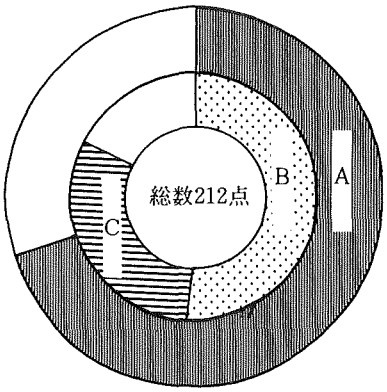
は剝取した剝片については大差ないものと思われる。個々の石核は，同様な剝片剝離課程の断辺を示しているもので，当遺跡における剝片剝離技術の一端を示すものと考えられる。しかし，石核の2や12，又他の石核についてもかなり小さな剝離面を残している点，晩期における石核の特徴を示しているもので，これは先に発掘調査された黒丸遺跡においても同様な石核が見られることから[文献3]も，晩期の一般的傾向として捉えられると思われる。当遺跡における石核は，礫面の残存から推定すれば，石核の素材となる原石自体もかなり小形のものを使用したものと推定され，当遺跡の周辺にある黒曜石の原産地でも供給は可能であり，腰岳に限らず，原産地におけるテリトリーが狭くなる傾向にあるのではないかと思われる。

剝片

(Fig.27～30)

(PL.22・23)

剝片については最大長，最大幅，打角及び自然面の有無について調べてみた。長幅比1.5cm[註5]以上のものを対象とし，また計測可能なものを挙げてみると，総数212点に絞られた。剝片**1**・**2**は長さが幅の2倍以上になり，当遺跡では数少ない剝片形態をもつもので，共に左右に細かな二次加工を施している。**3**・**4**も少し小形ながら同様なことが言えよう。当遺跡における剝片の一般的形態は**5**～**33**にみられるように礫面を残す場合が多く，さまざまな形態を持つが，剝片剝離課程における一端を示すいくつかのグループに分けることができる。たとえば，5・15のように礫面を正面に多く残す石核調整初段階のもの，7・8のように正面に数条の剝離痕を持ち，側辺から底辺に礫面を有するもの，25～28のように旧剝離面を一面持ち，横長になるものなどで，いずれも，打面及び底部に礫面をもち，石核の素材の大きさが限定される。これらの剝片から石核の素材となる礫が小形のものであり，自然打面を主体とすることが特徴といえよう。Fig.31は剝片における礫面付着状態を円グラフにしたもので，外側縦線が剝片上に礫面を有するものを挙げ，剝片総数212点中151点，約70％を示した。内側の円は自然打面と平坦打面との比を表わしたもので，自然打面が110点で全体の約51％，平坦打面が66点で約31％の値を示した。以上のように剝片の中で，自然面を有するものが圧倒的に多く，又打面におい



A．剝片上に礫面を有するもの
B．自然打面
C．平坦平面

Fig.31　剝片における礫面残存率

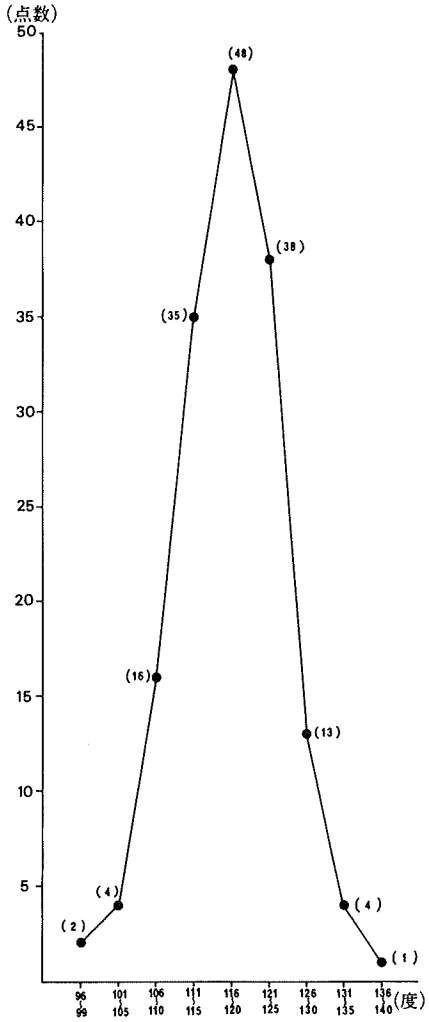


Fig.32　剥片打角表

ても自然打面を使用するなど礫面残存率が非常に高い。又，これらの剥片は使用した痕跡を残すものは少ないため，単に目的とする剥片を剥取する段階において，廃棄されたものと思われる。

打角については，161 点を対象とした（打角を計測する場合，打角が不明確になるものがあり，212 点のすべてを計測することができなかった)。当遺跡の剥片の打角は96°～140°内にすべて包含されるもので，横軸に 5 °ずつとって表を作成した。表から解されるように111°～125°の中に集中し，中でも116°～120°に頂点を見ることができるもので，当遺跡における剥片剥離技術の一端を見ることができよう。打角においては他の遺跡に比較すべき資料がないため，的確なことは言えないが，所謂縦長剥片を剥取する剥離角とは相異するのではないかと思われる。

剥片の長幅比表では，212点すべてを対象とした。先に述べたように長幅比が 2 ： 1 以上のものはごく僅かで，逆に 1 ： 2 となるものもほとんどない。集中するのは最大長 2 cm以上， 4 cm以内，幅 1 cm以上， 3 cm以内でかなり小形のものであり，多くの剥片が長幅比 2 ： 1 ～ 1 ： 2 の中に含まれ，その中において分散する傾向にあると言えよう。つまり，一定の剥片剥離技術は認めることはできず，無作為的な剥離の中から，石器の素材として適出していったことが考えられる。剥片の長幅・打角・剥片の礫面付着について調べたが，当遺跡の剥片の特徴として，小形で剥片に礫面を残し，打面自体は自然打面を用いる場合が多いということが言えよう。（福田）

註 2　萩原・久原両氏において「西九州のサイドブレイド」の文献があり，それによると両氏はサイドブレイドの素材作出のための一定の石刃剥離技法は存在しないと考えられている。

註 3　1968「九州西北部にみられるサイドブレイド」賀川光夫において数例が報告されている。

註 4　近年においてはその出土地域・及び石鋸との形態的技術的類似性から漁撈用

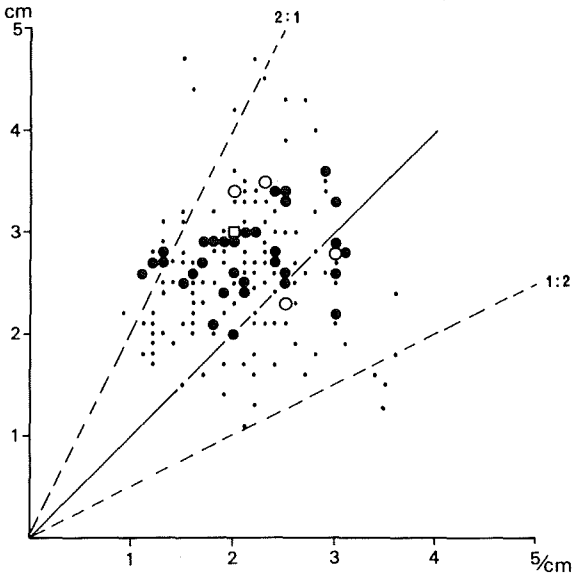


Fig.33　剝片長幅比

としての機能が定着しつつある。

註5　当遺跡における石器で1.5cm内外のものがみられるため，剝片計測も1.5cm以上のものを対象とした。

参考文献1　1979　佐賀県文化財調査報告書第45集「牟田辻・中野遺跡」佐賀県教育委員会

参考文献2　萩原博文・久原巻二　1975「九州西北部の石鋸・サイドブレイドについて」　古代文化第27巻第4号

参考文献3　1980「黒丸遺跡」大村市黒丸遺跡調査会

打製石斧
(Fig. 34～37, PL. 24～26)

表土出土のものがほとんどであるが，玄武岩の短冊形を呈した扁平打製石斧が多い。いずれも両面周囲から剝離により調整を施している。これらの石斧は大きく3つのグループに分けることができる。

1．長さが10cm，幅が6cm内外で，重さが100g を越すもの。
　9点（**1～9**）

2．長さが8cm，幅が4～5cm内外で，重さが100g 以下のもの。1よりひとまわり小型である。
　5点（**10～14**）

3．基部が半欠しているもの。
　12点（**15～26**）

これらの刃部は摩耗しているが，使用によるものと思われる。また半欠しているものが多いということは，それだけ打製石斧が消耗率の高いものであったことがうかがえる。

27. かなりの厚みをもち，厚さは最大幅の3分の2である。全体に剝離がなされており，側面はヘラ状に弯曲している。

29, 基部を欠いており，石斧として復原するとかなりの大型になる。側縁にあたる部分の一辺にも使用痕がみられるので，石斧として使用されていたとしても割れた後に転用された可能性が強い。

31, 打製石斧の一部であろう。かなり扁平で薄手であり，鋤状にひろが

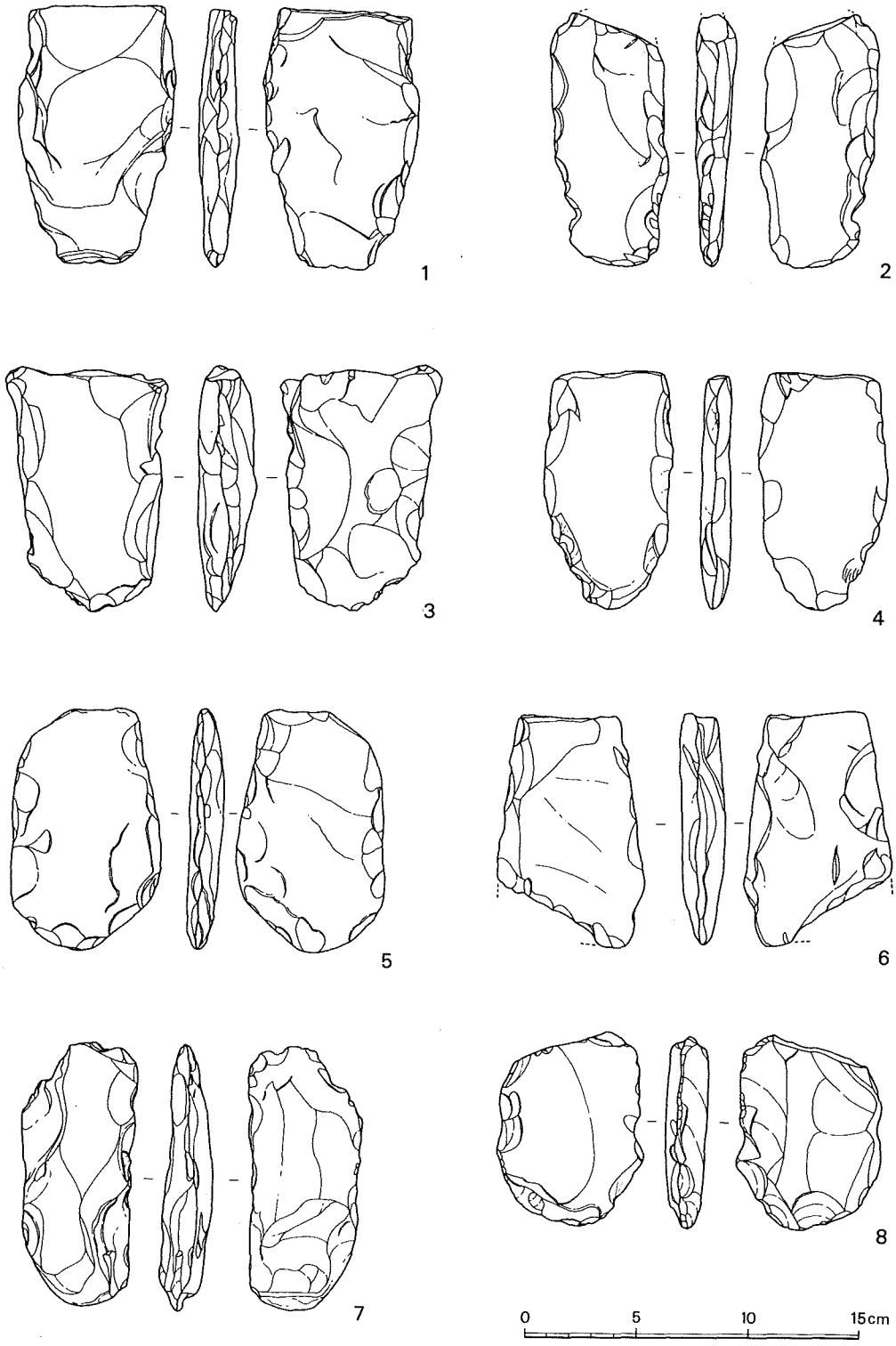


Fig.34　打製石斧①(1/3)

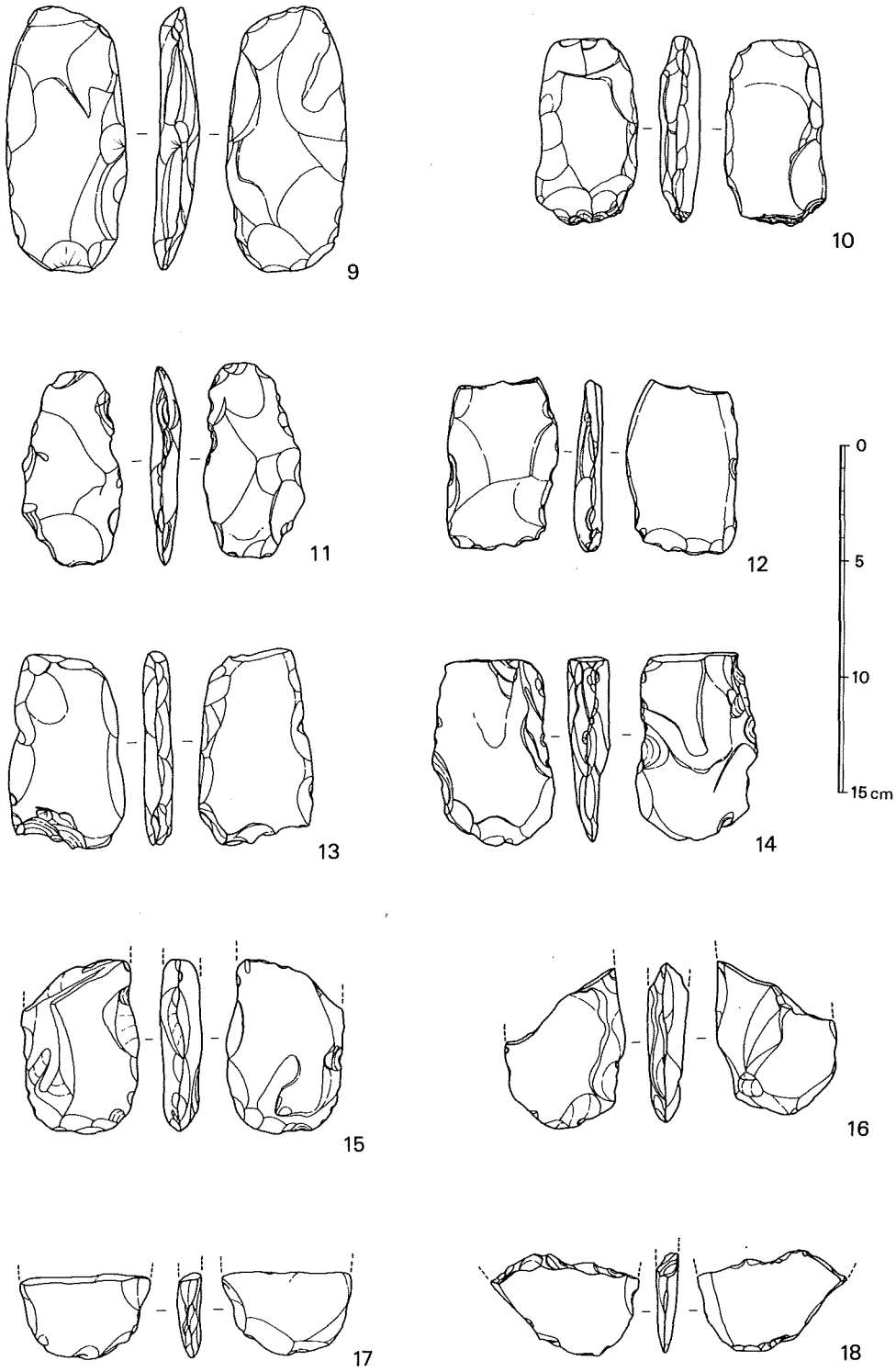


Fig.35　打製石斧②(1/3)

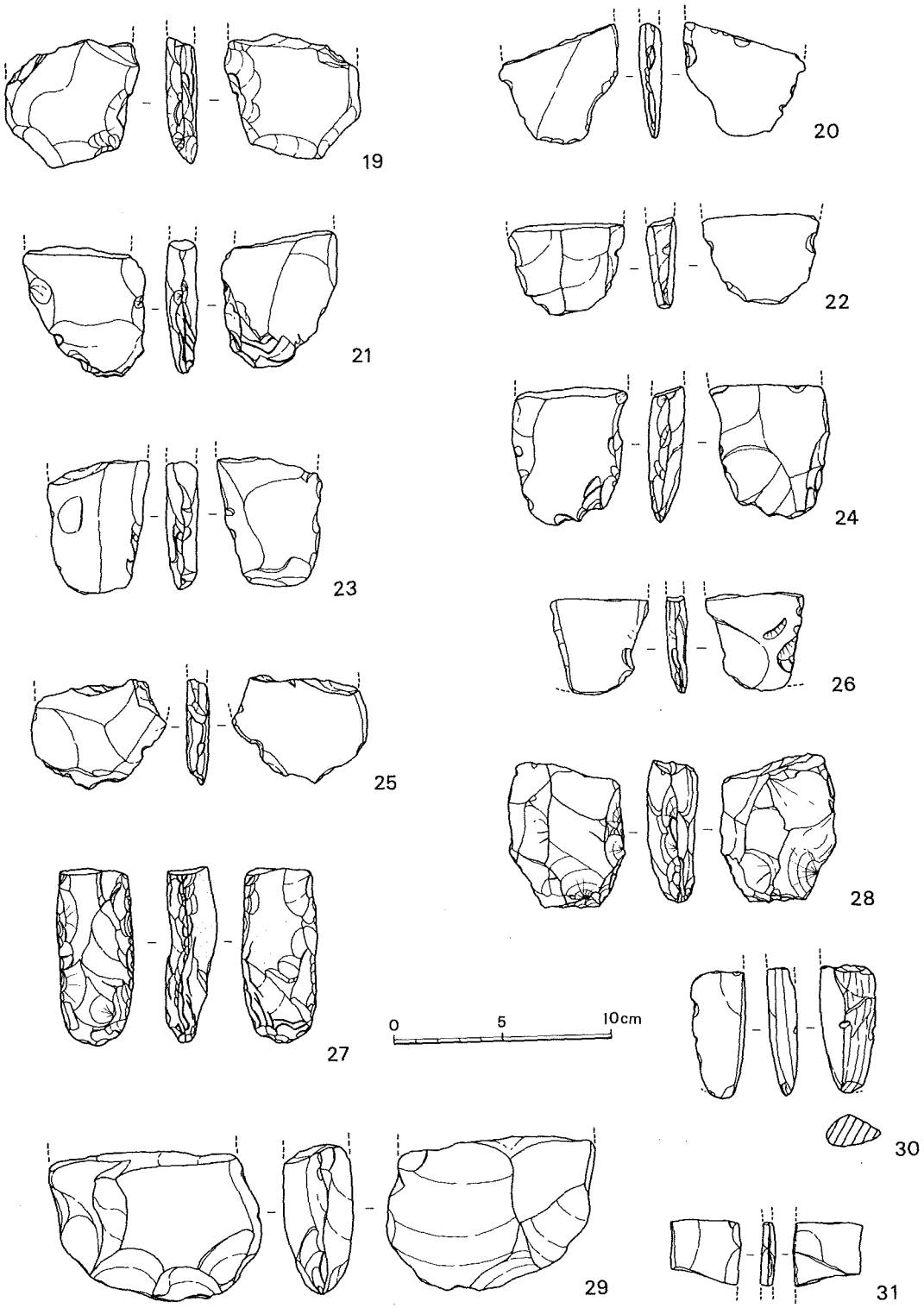


Fig.36　打製石斧③・その他の石器(1/3)

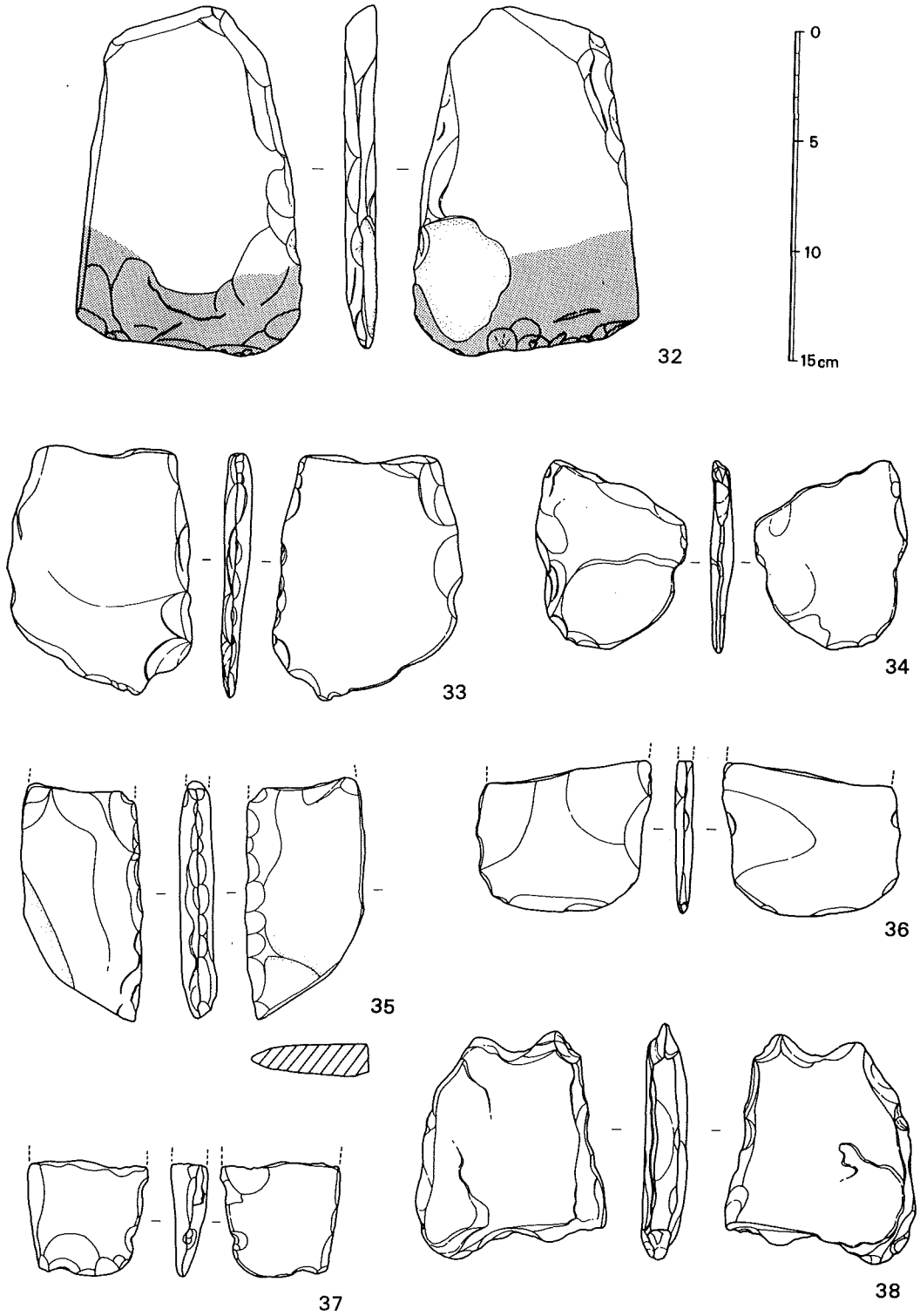


Fig.37　打製石斧④・その他の石器(1/3)

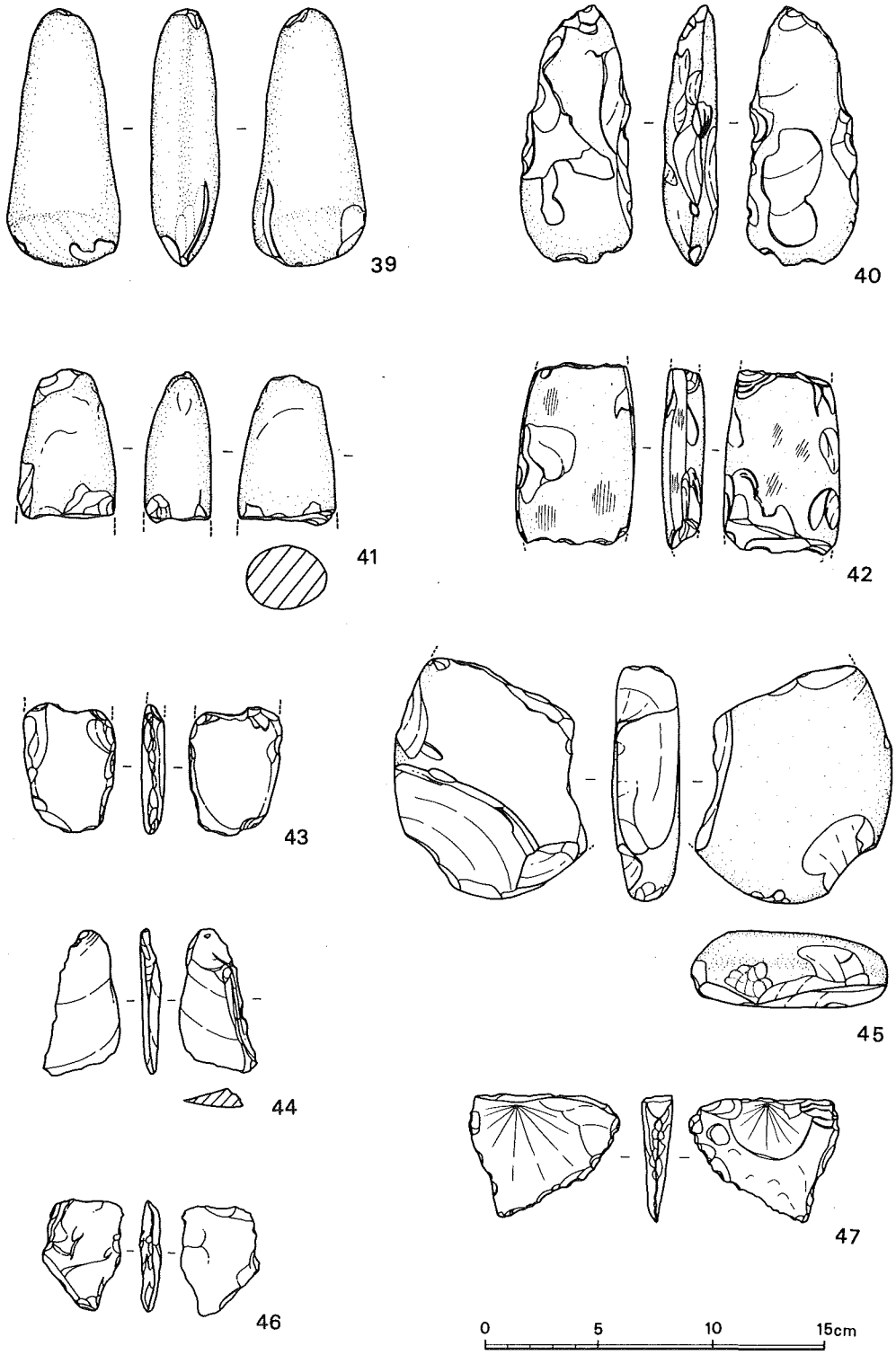


Fig.38　磨製石斧・その他の石器(1/3)

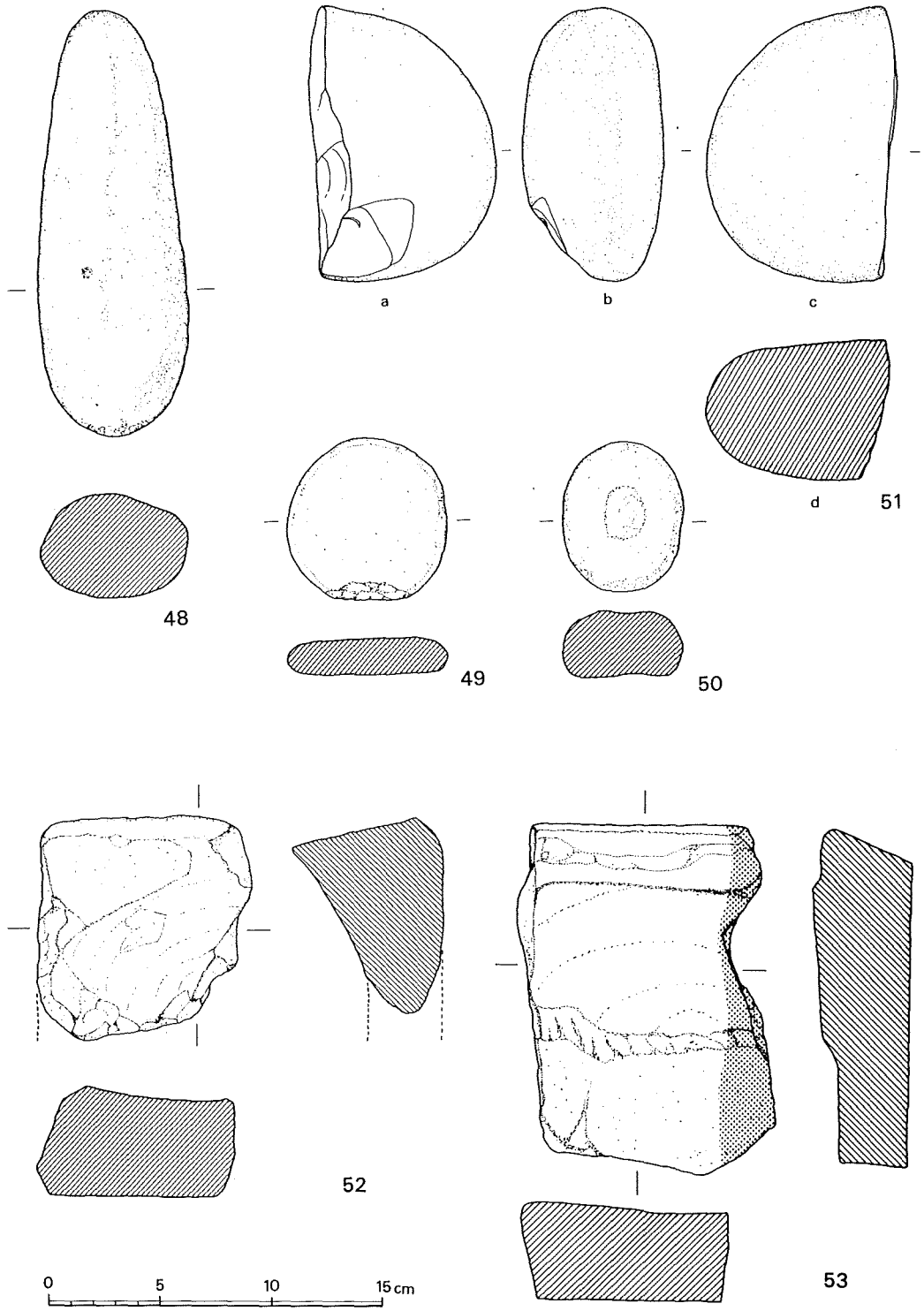


Fig.39　敲石・磨石・凹石・砥石(1/3)

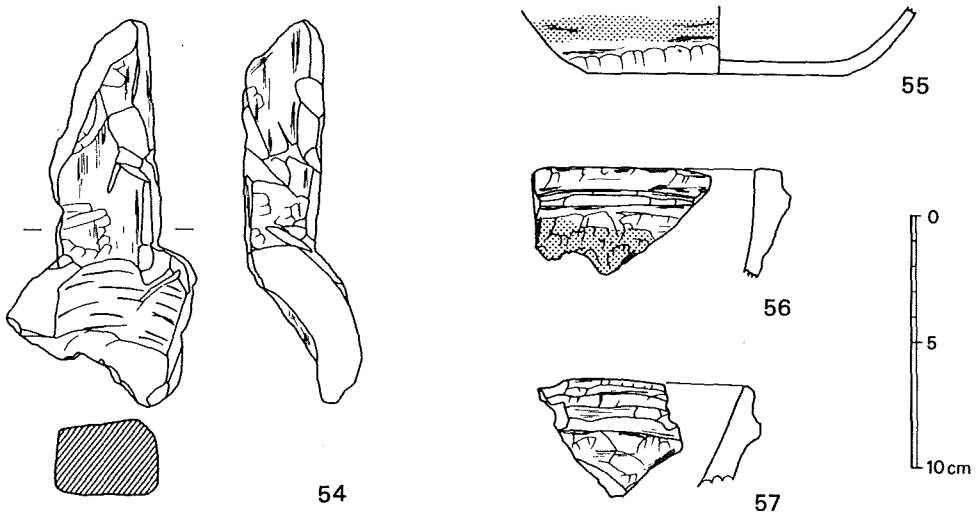


Fig.40　滑石製品(1/3)

る可能性もある。

33・34・36，扁平な板状を呈し，両面周囲から剝離により調整を施している。34，36は刃部が弧を描いているが，33は偏刃になっている。

磨製石斧
(Fig.38,
PL.26・27)

30，磨製石斧の一部である。刃部付近の側縁で，復原すれば短冊型を呈すと思われる。

39，乳棒状を呈し，楕円形の断面を有す。刃部は両刃で蛤刃になる。刃部には使用痕が観察できるが，基端にも剝離がみられる。

40，石材が軟質なためか摩耗が激しい。刃部は両刃で蛤刃になる。側縁の剝離が激しく，基部全体に擦痕が観察出来る。

41，刃部を欠くが，断面楕円形の乳棒状を呈している。復原すれば39と同形態を呈すると思われる。

42，刃部と基端を欠く。短冊型を呈し，表面は入念に研磨している。刃部も基端と同じような割れ面をしており，使用によるものと思われる。

43，基部を欠くが，短冊型を呈している。全体に摩耗しており，基部表面には縦方向の擦痕が観察できる。

敲石・磨石
(Fig.38・39,
PL.27)

45，全体に欠損が激しいが敲石と思われる。石質はスコリア（火山岩滓）的玄武岩である。若干の敲打痕が観察できる。　(横山)

48，敲石である。手頃な細長い自然礫を用いる。下端に敲打痕，上端に

磨痕が観察される。

51，磨石。かなり重量感があり，旧状は楕円形であったものと思われるが半分を欠損している。b面中央には磨痕が顕著である。

砥石
(Fig. 39, PL. 28)

52，砥石片と思われる。側面，下面共に欠損し4分の1個体程度が残存する。かなり使用に供したものとみえ，中央部がかなり薄くなる程弯曲している。図上部には，明確な焼けの痕跡を有するが，表採品の為に当初からのものであるかの断はできない。

53，砥石である。A－6区埋設甕上部の石囲いの石として転用されている。半分以上は欠損しているが，かなり使用に供されたものとみえ中央部が薄くなっている。下面は安定感を得るため平坦である。図，右側片の折れ口には火の痕跡が伺え，赤く変色している。　(高野)

その他の石器
(Fig. 36～39, PL. 26・27)

28，部厚な剝片の一辺に加工を施してあり，スクレイパーと思われる。

32，扁平な板状を呈し，石斧というよりも鍬又は鋤の形態をしている。周囲の四辺のうち二辺のみに両面からの剝離がみられ，残りの二辺は平坦になっている。図下部には焼けによる若干の黒変が観察できる。

35，一部を欠くが，石包丁の形態を呈するスクレイパーである。礫石原遺跡出土の石包丁形石器[註1]とはやや形態を異にしていた。一辺のみに両面からの剝離がみられる。手に持って使用したと思われる。

37，二辺に剝離を有する。断面は35に類するが，割れのため完形の形態は不明である。

38，全周に剝離を有するが，双角状になっている間の部分の剝離が激しく，石錘の可能性もある。

44，サヌカイトの剝片である。

46，玄武岩の剝片である。

47，二辺に剝離がみられ，一辺は平坦である。折れによるものであろう。打点が明確にわかる。

49，径7.3 cm，厚さ1.6 cmの扁平な円盤状の石器である。下端に両面からの簡単な剝離がみられる。

50，小さいが凹石状の形態をとる。両面に浅い凹みがある。上下両端には敲打痕らしきものが観察できる。　(横山)

註1　長崎県文化課保管

滑石製品
(Fig. 40, PL. 28)

54，一見柄杓状を呈する滑石製品である。柄の上部と杓の部分を欠損する為に全体の形状は不明。柄の部分は断面方形に整えてよく研磨を行う。

Tab. 8　石斧・その他の石器計測表（その1）

No.	種　類	地　区	石　質	長さ(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	挿図番号
1	打製石斧	B－2　表土	玄武岩	11.5	6.8	1.8	195	Fig. 34
2	打製石斧	C－5　表土	玄武岩	11.3	5.0	1.8	130	
3	打製石斧	C－4　表土	玄武岩	10.7	7.2	1.6	262	
4	打製石斧	B－3　表土	玄武岩	10.6	5.8	1.4	121	
5	打製石斧	B－7　表土	玄武岩	10.8	6.6	1.5	131	
6	打製石斧	A－7　表土	玄武岩	10.2	6.5	1.9	160	
7	打製石斧	A－2　表土	玄武岩	11.7	5.0	2.2	150	
8	打製石斧	D－6　表土	玄武岩	8.5	6.6	1.8	125	
9	打製石斧	E－3　表土	玄武岩	11.4	5.2	1.7	130	Fig. 35
10	打製石斧	E－2　表土	玄武岩	8.0	4.3	1.7	75	
11	打製石斧	A－7　表土	玄武岩	8.4	4.2	1.2	51	
12	打製石斧	C－2　表土	玄武岩	7.2	4.7	1.2	55	
13	打製石斧	E－4　表土	玄武岩	8.1	5.0	1.2	72	
14	打製石斧	A－5　表土	玄武岩	8.0	5.0	1.8	83	
15	打製石斧	B－7　表土	玄武岩	7.4+α	5.0	1.7	90+α	
16	打製石斧	B－4　表土	玄武岩	5.7+α	5.2	1.7	55+α	
17	打製石斧	E－2　表土	玄武岩	3.6+α	5.6	1.0	25+α	
18	打製石斧	A－6　表土	玄武岩	4.1+α	6.4	1.0	29+α	
19	打製石斧	A－4　表土	玄武岩	5.5+α	6.0	1.4	65+α	Fig. 36
20	打製石斧	E－6　表土	玄武岩	4.8+α	5.5	1.0	25+α	
21	打製石斧	CD-7　表土	玄武岩	5.9+α	5.3	1.4	55+α	
22	打製石斧	B－1　表土	玄武岩	4.2+α	5.3	1.4	34+α	
23	打製石斧	D－4　表土	玄武岩	6.0+α	4.5	1.5	48+α	
24	打製石斧	D－3　表土	玄武岩	6.2+α	5.1	1.6	65+α	
25	打製石斧	C－4　表土	玄武岩	4.4+α	6.2	1.0	32+α	
26	打製石斧	A－4　表土	玄武岩	4.7+α	4.5	0.9	24+α	
27	打製石斧	A－6　表土	玄武岩	8.0	3.4	2.2	73	
28	スクレイパー	B－7　表土	玄武岩	6.0	5.2	2.4	100	
29	打製石斧	E－4　表土	玄武岩	6.9+α	9.3	2.2	264+α	
30	磨製石斧	D－2　表土	蛇紋岩	5.9+α	2.5+α	1.3	25+α	
31	打製石斧	CD-7　表土	玄武岩	2.9+α	3.1+α	0.6	9+α	

No.	種　類	地　区	石　質	長さ(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	挿図番号
32	鋤状石器	C－6　表土	玄武岩	15.6	10.2	1.4	361	Fig.37
33	打製石斧	C－6　2層	玄武岩	11.1	8.2	1.3	145	
34	打製石斧	A－7　表土	玄武岩	8.1+α	6.9	1.1	62+α	
35	石包丁形石器	B－5　表土	玄武岩	10.4	5.5	1.6	145	
36	打製石斧	D－6　2層	玄武岩	5.5+α	7.8	0.8	55+α	
37	不明石器	B－7　表土	玄武岩	5.2+α	5.5	1.6	50+α	
38	不明石器	B－6　表土	花崗岩	9.6	8.6	1.9	220	
39	磨製石斧	CD-7　表土	結晶片岩	11.3	5.0	3.0	231	Fig.38
40	磨製石斧	表　採	蛇紋岩	11.4	4.9	2.3	150	
41	磨製石斧	D－4　表土	玄武岩	6.2+α	4.3	2.9	118+α	
42	磨製石斧	B－1　表土	蛇紋岩	7.9+α	5.1	2.8	150+α	
43	磨製石斧	D－4　表土	蛇紋岩	5.3+α	4.0	1.0	32+α	
44	剝　片	E－3　表土	サヌカイト	6.0	2.9	0.9	15	
45	敲　石	A－1　表土	スコリア的玄武岩	10.1+α	8.0	2.9	320+α	
46	剝　片	A－7　表土	玄武岩	4.8	3.5	0.9	15	
47	不明石器	E－4　表土	玄武岩	5.4	6.6	1.4	45	
48	敲　石	C－6　表土	砂　岩	19.1	6.7	4.7	695	Fig.39
49	円盤状石器	C－6　表土	雲母片岩	7.3	7.2	1.6	135	
50	くぼみ石	表　採	砂　岩	6.7	5.4	3.0	150	
51	磨　石	B－7　表土	スコリア的玄武岩	8.2+α	12.3	6.3	915+α	
52	砥　石	表　採	砂　岩	10.0+α	9.4+α	6.8	650+α	
53	砥　石	A－6埋甕上	砂　岩	15.1+α	9.5+α	4.2	1060+α	

又、杓内側の部分には横方向に鋭いノミ状の工具による調整痕が観察される。柄をもつ石鍋片の可能性もあるが，定かではない。表採。

55，滑石製石鍋の口縁部である。完成品であるがその大半は欠失している。

56，同じ滑石製石鍋の口縁部片である。大半を欠失するが，鍔の下部には全面に煤の附着をみる。厚みは鍔を除く面は大旨1cm程度であり，これは55の場合と同じである。

57，滑石製石鍋の底部である。全体的に厚さを5mm程度に薄く仕上げている。底部にはみられないが，底辺部には一面に煤の附着がみられる。内部には斜め方向に幅2～3mm程度のノミ痕が等間隔に残っている。

C－6区2層出土　　(高野)

(3) 遺　構

① ピット群
(Fig.41, PL. 9)

A－6，7区，B－6，7区を中心として多くのピットが見られた。蜜柑植樹の際の小さな攪乱壙も多く，縄文期のものとの区別が困難な面もあったが，大旨2層中より始まるピットのみを抽出した。

ピット群は不規則に広がり，形状，深さ共に一定しない。しかし，大体深さが20cmを超えるものは少なく10cm前後の浅いものである。

ピットの位置関係，深さ，掘られた角度等をみても，住居址の柱穴と思われるものは見当らない。ピットそのものの拡がりは，本来更に東側と北側にも及んでいたものと思われるがすでに旧状は削平されている為その全面的な拡がりを伺い知る事は出来ない。

したがって，このピット群を確実に生活面の一部であるとは理解しているが，ここでは単にピット群として報告しておきたい。

② 石囲埋設甕遺構
(Fig.42, PL.12・13)

A－6区，3層上面において，径40cm前後，数個の石で囲った半円形の石囲い遺構に接した。石の大きさは不規則で，内1個は砥石を転用したものと思われる。又，この砥石を含む2個の石にはそれぞれ側面部と上面に火の痕跡を有している。しかし石囲い内側には顕著な焼土や灰らしきものは見当らない。

石囲いの形状と石に対する火の痕跡からみて炉址と判断して下部を精査したところ，石の直下約7cmの所に甕の口縁部があらわれた。甕は若干欠けていたが，大旨完形であり，更に掘り進む内に直立した埋設甕であることが判った。甕の内側には3層と同じ黄褐色土が一杯に充塡されていたが，その中には若干の灰らしきものが，又外側の土壙内には炭化物がみられた。

埋設甕の構造は，径70cm程度の土壙と直立した甕，そしてその安定を計る為の2個の支え石，及び甕上部の石囲いから成っている。

甕自体の特徴は，周囲出土土器と変化なく，又，ピット群と同時期の所産であることは疑いない。

なお，土壙底には意味不明の小ピットがみられる。

以上の遺構については後述する。　　(高野)

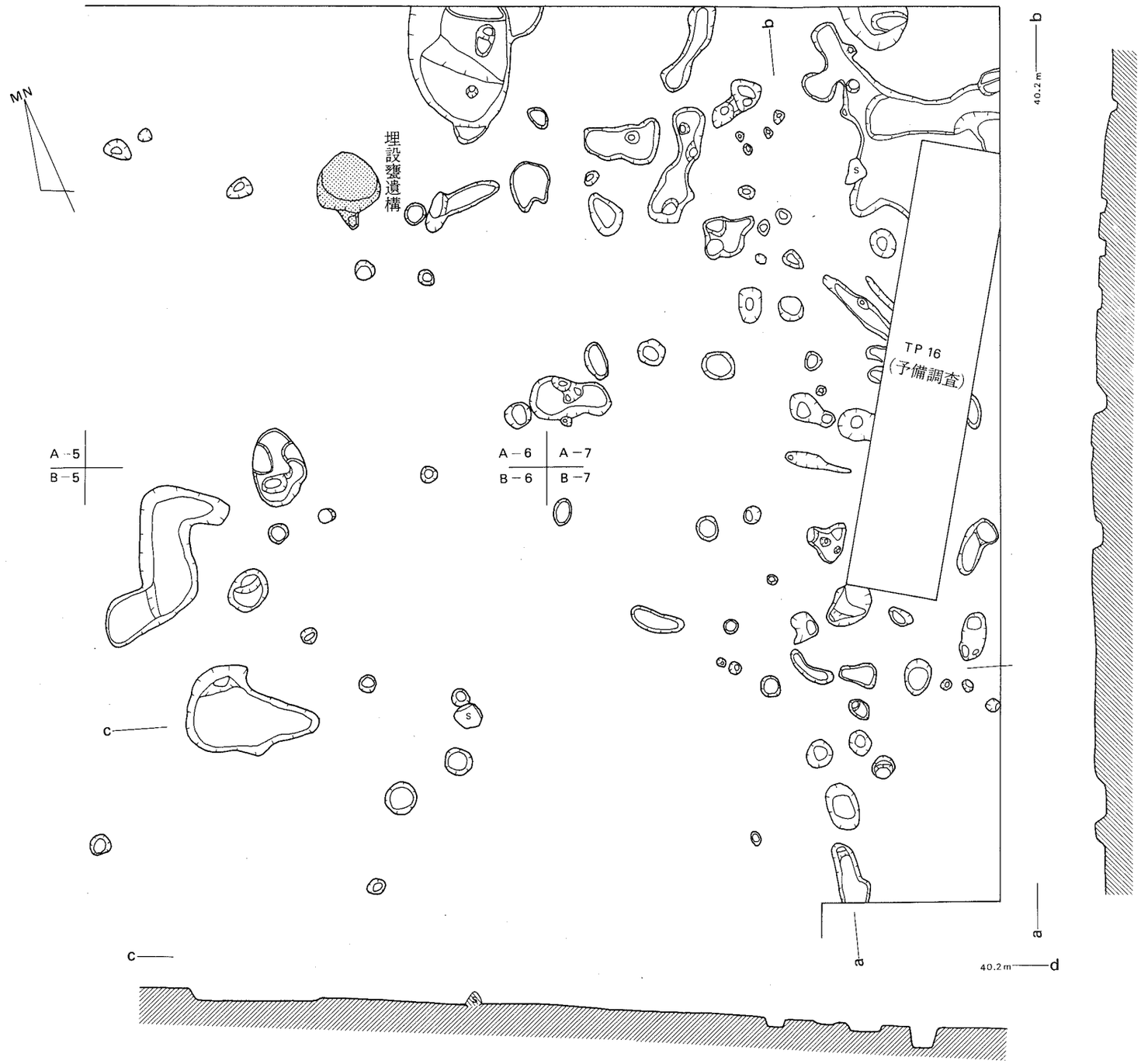


Fig.41　不明ピット群(1/60)

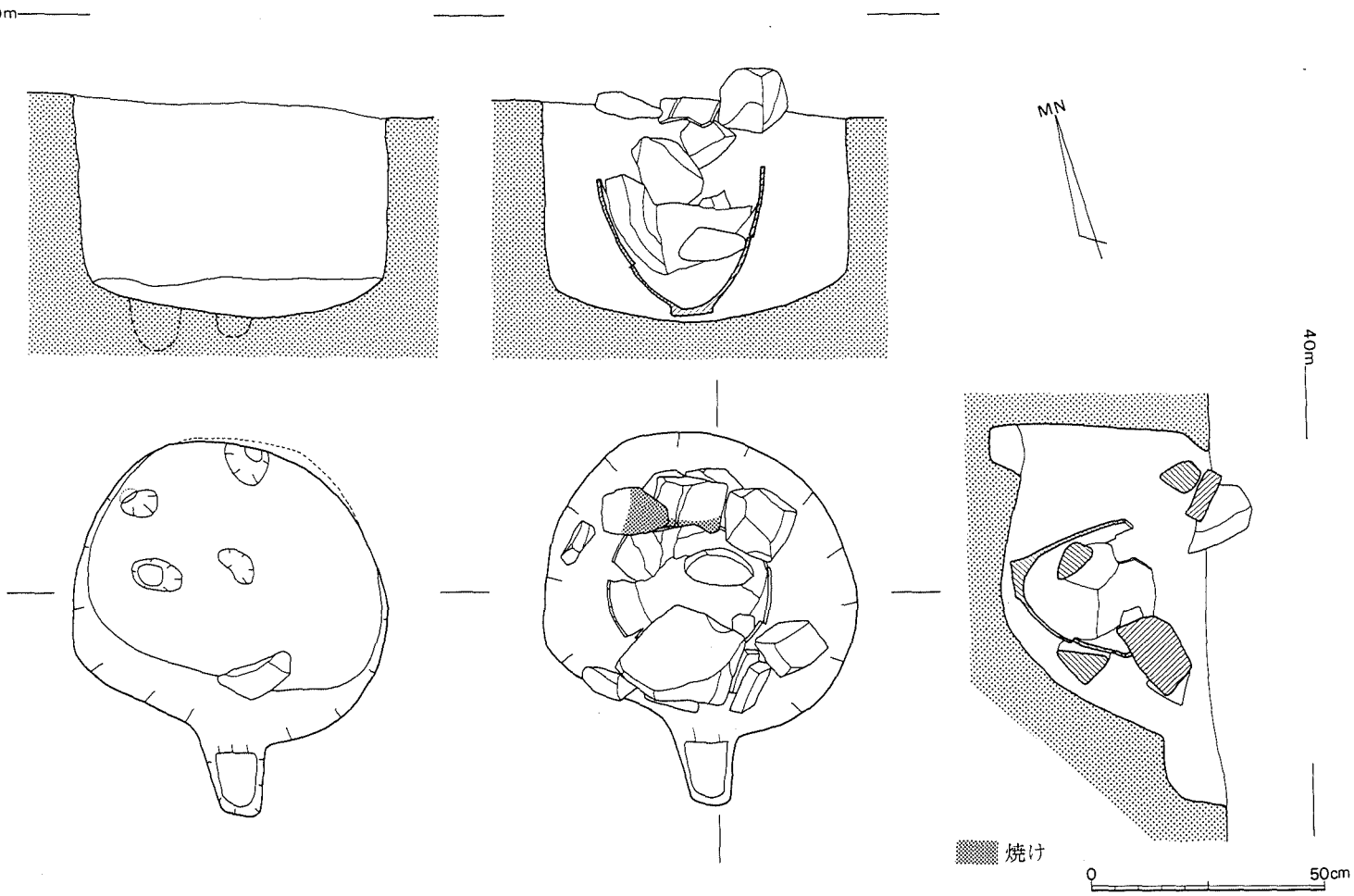


Fig.42　埋設甕実測図(1/15)

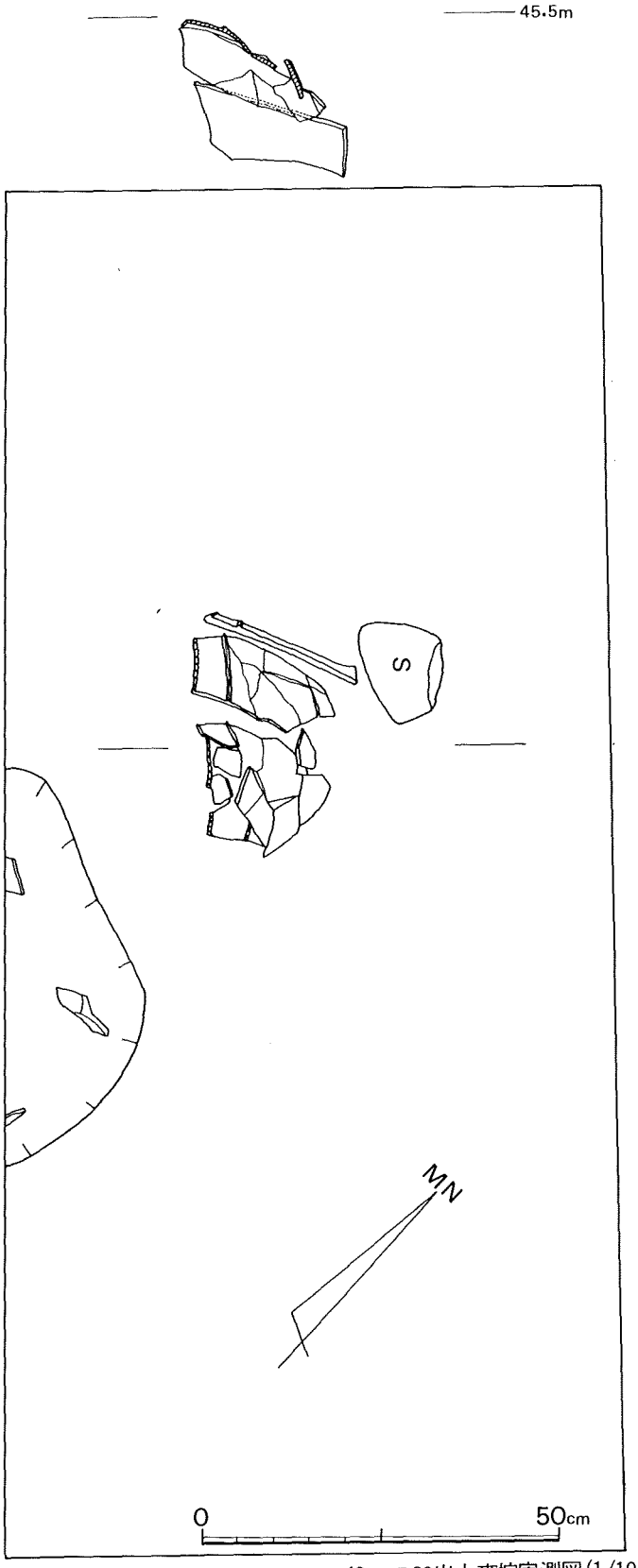


Fig.43 TP20出土甕棺実測図(1/10)

二、中屋敷B遺跡（D地点）

調査経過の項で述べた如く，遺物散布面積は12000㎡に及びこの中より且って石囲い棺が3基出土したといわれる。

現在それらしき残滓も見られないが，当該地より採集したという郷土史家小曽根名嘉次郎氏の資料の中には，多くの弥生土器片に混じって，棺の底部が含まれるなど，やはり弥生期の墓址である印象が強く残った。

しかし，反面旧状である傾斜地を削平して平坦化する段階で全て破壊された恐れもあって，当初の分布調査の折，平坦地の数ケ所に簡単な試掘擴を設定して地層を観察してみた。

それによるに，表土下1m位の深度で，厚くはないが未だ弥生の土器，石器片を含む層が残っている地点がある事を確認できた。

つまり，削平の段階では，単に高い所を削って低地に埋めるのみの工法であった為に，旧状高位置にあった北側の方は地山が露出していたが，南側低地部分は埋土により破壊を免れており，当該地にはなお石棺や甕棺が埋蔵されている可能性が大であると判断したわけである。

上記の経過があった為に，第1次調査の折には，当地区への試掘は行わず，むしろその墓域の広がりを確認する事に主眼を置くことにし，東側蜜柑畑に4ケ所の壙を設定した。（Fig. 3）

結果はＴＰ20，ＴＰ22に於いて，包含層が残存していることが判り，特にＴＰ20においては，縄文晩期に属する甕棺が出土するなど墓域は更に時間的広がりをも含む事が判明した。(Fig. 43)

そしてその広がりは凡そ7000㎡程度にわたるものと思われる。（高野）

(1) 出土遺物

① 土器

(Fig. 44, PL. 14・35)

第1次調査において出土・表採した土器は310点を数える。細片が多く，図示出来たものは中屋敷B遺跡に限られる。

1，ＴＰ20より出土した縄文晩期の甕である。3分の1個体程度で，底部は欠失している。肩部は屈曲せず内弯しながら口縁端にいたる。口縁部縁帯と肩部に刻み目凸帯を有し，本県山の寺梶木遺跡[註1]に類例をみる。復原高は31.1cm，復原口径は29.3cmとなる。砂粒を多く含み，焼成はややもろく，暗褐色を呈する。

2，ＴＰ22の1層より出土した弥生中期の甕の底部である。縦方向のハケ目がかすかに観察できるが，ほとんど表面摩耗している。1～2mm大の石英粒を多く含み，淡褐色を呈する。

3，ＴＰ20より出土した弥生中期の甕の底部である。平底をなす。砂粒を含むが胎土は緻密で，焼成は良い。縦方向のハケ目調製を施しており，

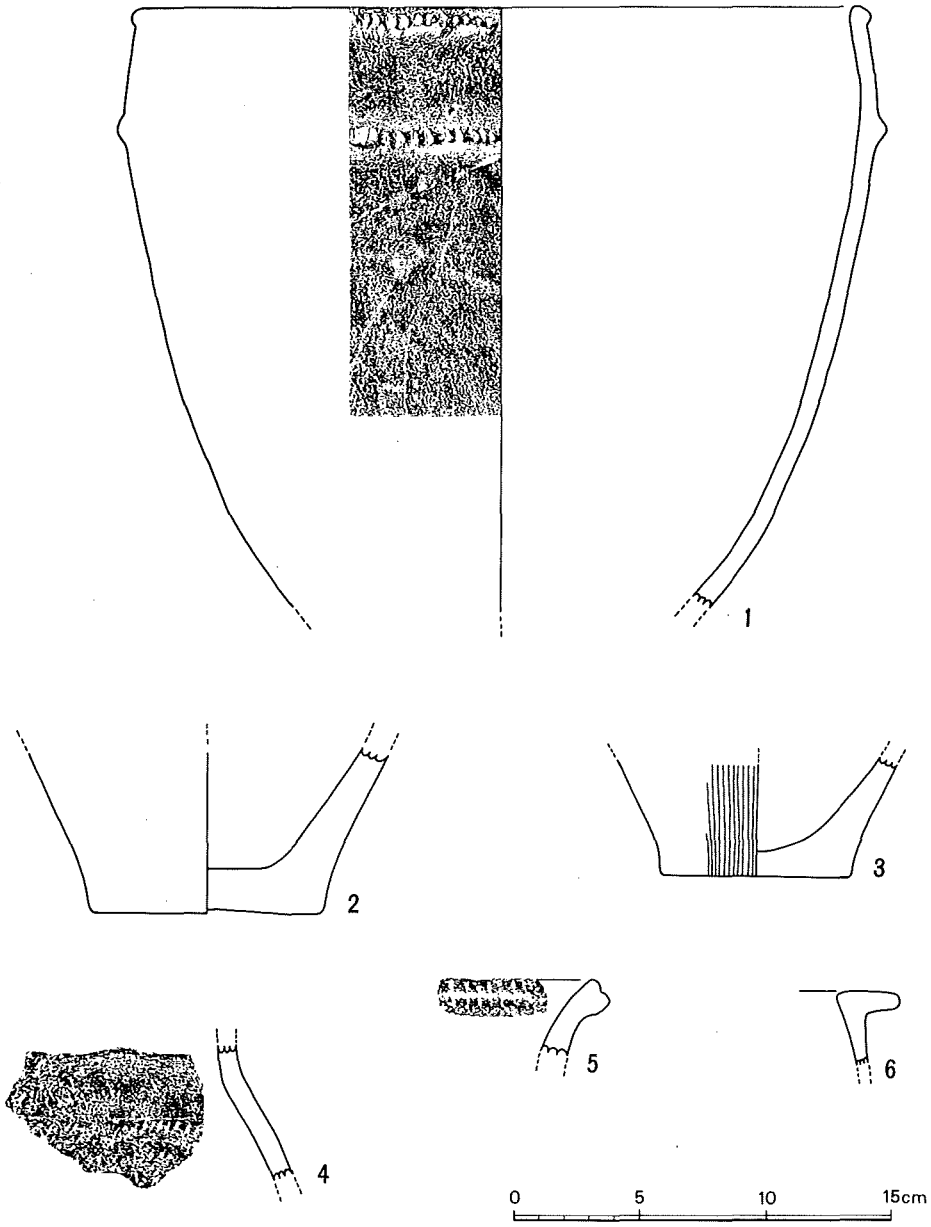


Fig.44　中屋敷遺跡出土土器(1/3)

褐色を呈する。

4．ＴＰ22の１層より出土した壺の肩部である。二条の直線の間に斜点が沈線で施されている。口縁部は屈曲して立ち上がる。１～２㎜大の小石粒を多量に含み，淡褐色を呈する。

5，ＴＰ22の１層より出土した弥生前期末の甕の口縁部で，口唇部に二段の刻み目を有す。１～２㎜大の石英粒を多量に含み，褐色を呈する。

6，ＴＰ22の１層より出土した弥生中期の甕の口縁部で，１～４㎜大の石英粒を多量に含み，胎土は粗い。淡黄褐色を呈する。

註１　古田正隆　1973「山の寺梶木遺跡」百人委員会埋蔵文化財報告第１集

② 石器

(Fig.45～47, PL.32・33)

第一次調査で出土した石器は，総数1974点を数える。中屋敷Ｂ地点では403点を表採・出土した。黒曜石の剝片が多い。なお先土器時代の石器，石鏃・サイドブレイドについては，「一、ケイマンゴー遺跡（２）遺物とその出土状況②石器」でまとめて記述した。

打製石斧

(Fig.45)

1，片側の刃部および側面を欠損している。使用によるものと思われ，本来は短冊型を呈するものであろう。基部の半円形の欠損は製作時の痕跡と考えられ，また側縁には調整を施している。

2，両面周囲から剝離により調整をおこなっているが，風化のため剝離痕は鋭さを欠く。

3，基端に突起をつくり出しており，使用されたものと思われる。木の根が両面にはりついていた痕跡をのこす。

4，基端を欠く。両面周囲からの剝離により調整を施す。

局部磨製石斧

(Fig.45)

5，刃部の一部に研磨面を有す。側縁には調整を施している。基端を欠くが，短冊形で厚みをもつ。

6，一部に研磨面を有し，側面には使用痕がみられる。また刃部片側の大きな剝離の上にも使用痕をとどめる。

磨製石斧

(Fig.45・46)

7，両刃でやや偏刃を呈する太型蛤刃石斧である。基端にも刃部をつけており，両頭斧として使用したものであろうか。弥生時代のものと思われる。

8，扁平片刃石斧で，全面を入念に研磨している。基端にも使用痕がみられる。

9，両刃で，片面全面と反対面の刃部のみを入念に研磨している。基部を半欠する。

10，基部の正，背両面に擦痕が観察できる。これは京都府舞鶴市桑飼下遺跡の報告書[註2]で想定された鋤先としての着柄方法，すなわち石斧の長さの下方より３分の１位の位置まで添え木が柄としてあてられ緊縛されていたと考えることができるのではないだろうか。

11，厚みをもち，刃部の片面のみの使用痕が著しい。

12，10と同様，基部の正，背両面に擦痕が観察できる。これも鋤先とし

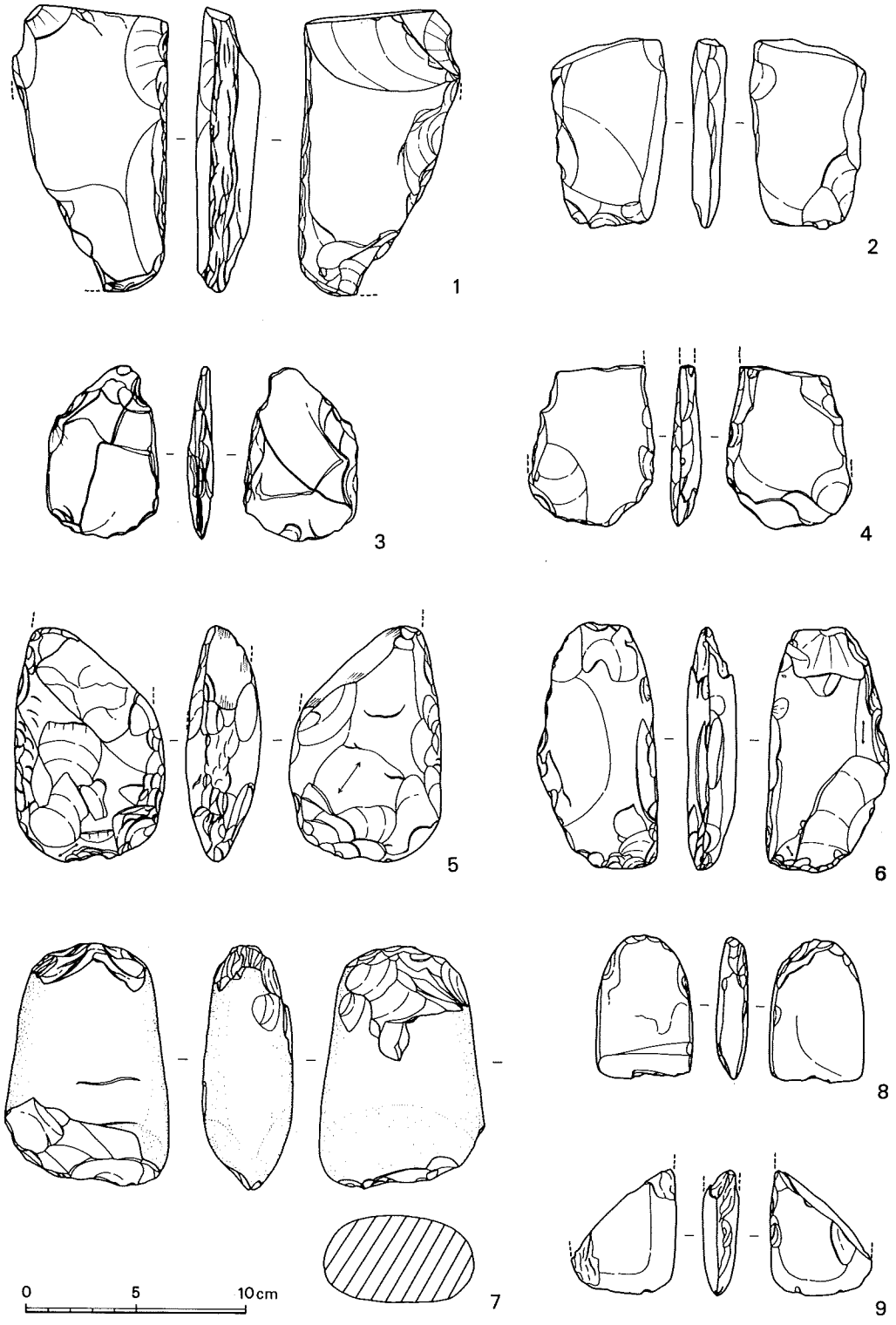


Fig.45　打製石斧・磨製石斧①(1/3)

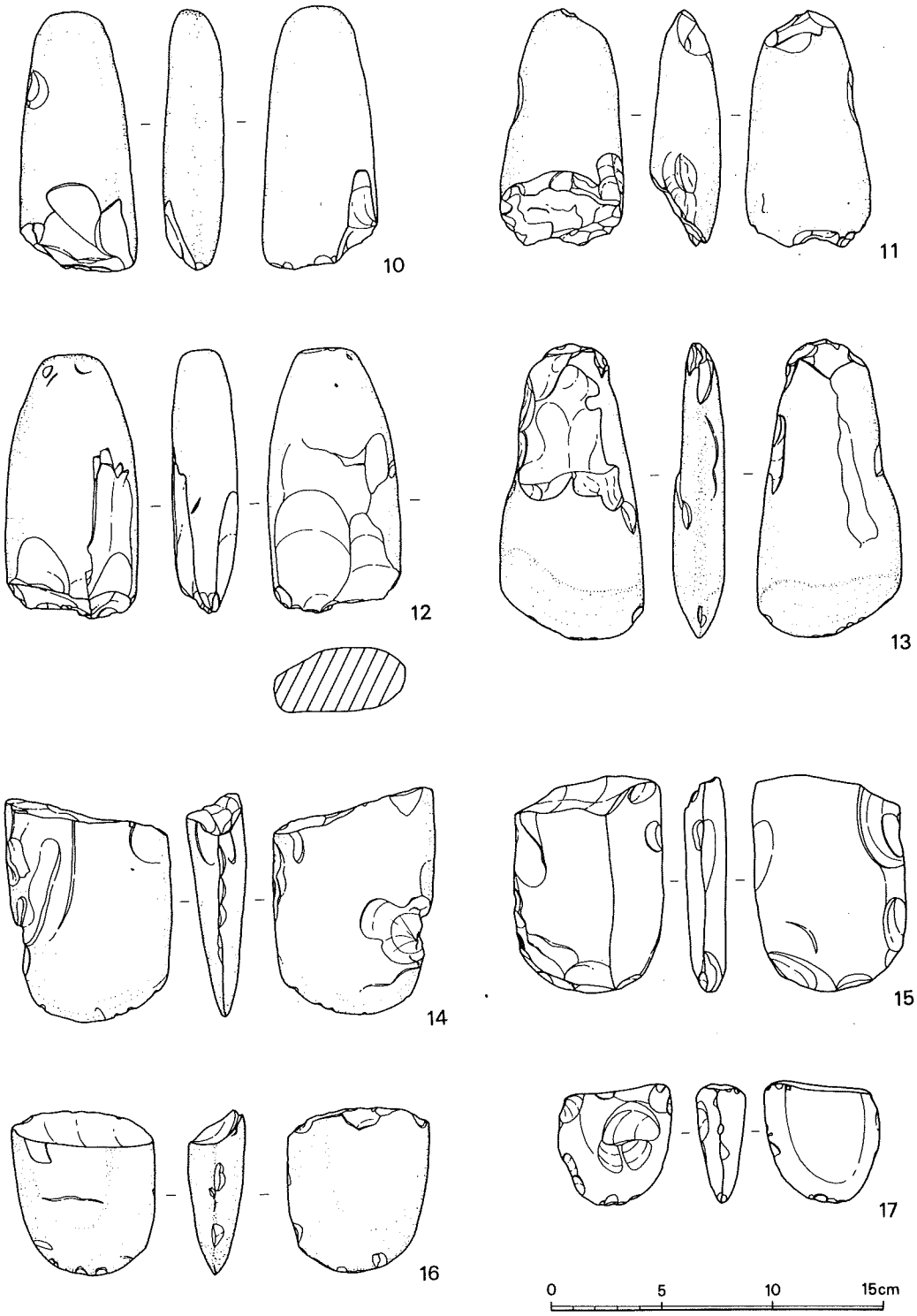


Fig.46　磨製石斧②(1/3)

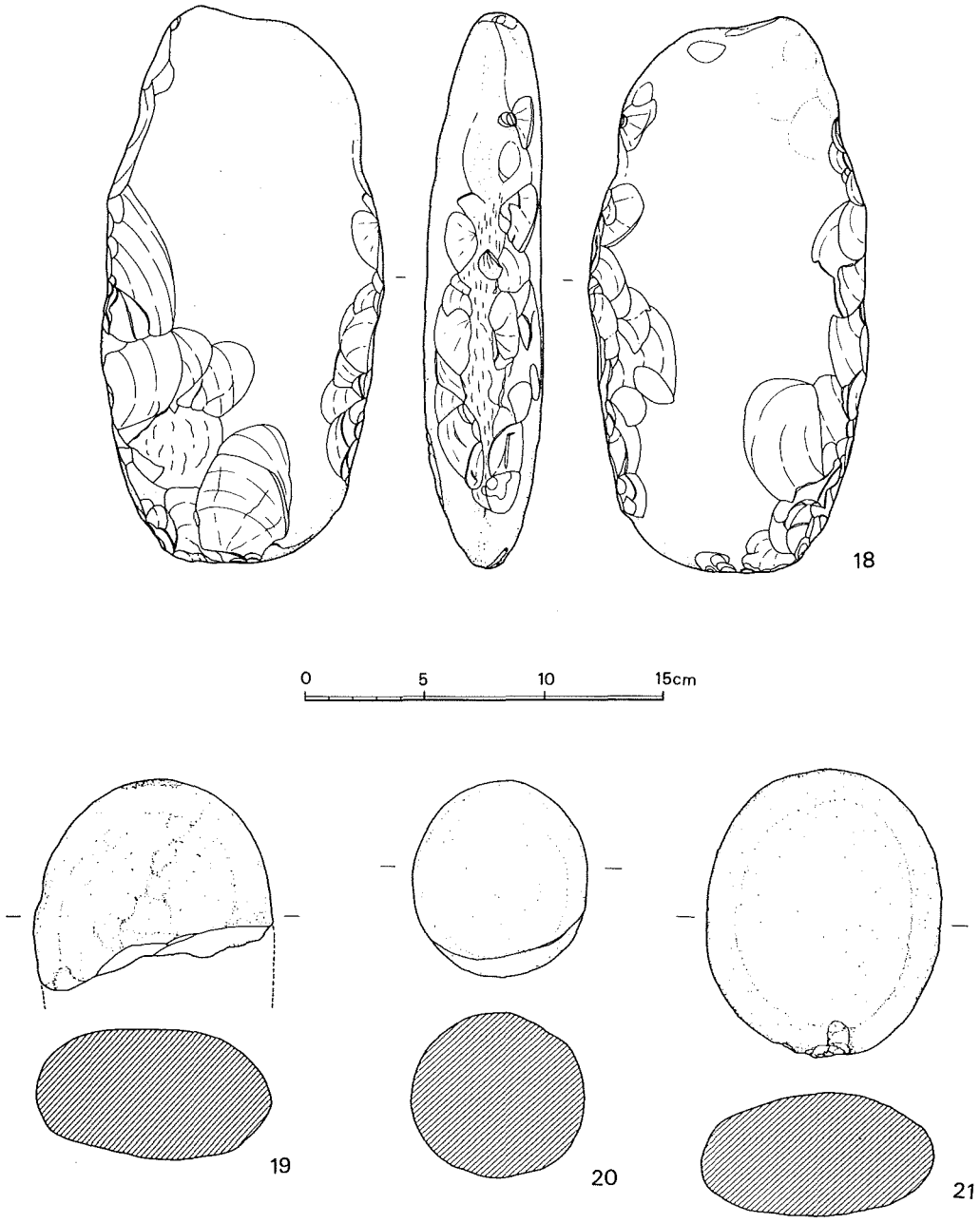


Fig.47　その他の石器(1/3)

て利用されていたのではなかろうか。

13，偏刃をもつやや扁平の磨製石斧である。偏刃は損耗と刃のつけなおしの結果として理解されている例が多いが，この石斧も偏った方に使用

Tab. 9　石斧・その他の石器計測表（その２）

No.	種　類	地　区	石　質	長さ(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	挿図番号
1	打製石斧	表　採	玄武岩	12.7	7.1	2.8	342	Fig. 45
2	打製石斧	表　採	玄武岩	8.4	5.2	1.5	100	
3	打製石斧	10トレンチⅠ層	玄武岩	7.7	5.2	1.2	61	
4	打製石斧	9トレンチⅠ層	玄武岩	7.2+α	5.6	1.3	74+α	
5	局部磨製石斧	表　採	玄武岩	10.6+α	6.8	3.3	305+α	
6	局部磨製石斧	表　採	玄武岩	11.0	5.5	2.2	170	
7	磨製石斧	A地点　表採	玄武岩	10.7	7.5	4.1	490	
8	磨製石斧	E地点　表採	蛇紋岩	6.4	4.4	1.4	70	
9	磨製石斧	表　採	玄武岩	5.2+α	4.6	1.6	43+α	
10	磨製石斧	A地点　表採	玄武岩	11.6	5.2	2.8	285	Fig. 46
11	磨製石斧	A地点　表採	玄武岩	10.3	5.6	3.2	245	
12	磨製石斧	表　採	蛇紋岩	11.8	5.9	2.9	321	
13	磨製石斧	A地点　表採	蛇紋岩	13.2	6.4	2.3	305	
14	磨製石斧	表　採	玄武岩	9.5+α	7.3	2.6	222+α	
15	磨製石斧	A地点　表採	玄武岩	9.6+α	6.7	1.9	154+α	
16	磨製石斧	表　採	玄武岩	7.4+α	6.4	2.6	152+α	
17	磨製石斧	A地点　表採	玄武岩	5.2+α	5.1	2.2	76+α	
18	不明石器	表　採	玄武岩	23.2	11.5	5.0	2,045	Fig. 47
19	敲　石	表　採	花崗岩	7.6+α	10.0	5.4	640+α	
20	磨　石	表　採	硬質砂岩	8.2	7.3	6.9	560	
21	敲　石	表　採	硬質砂岩	12.0	9.7	5.1	890	

痕が顕著であり，損耗と磨研の反復の結果とみる方が妥当かも知れない。

14，短冊型を呈し，刃部は弧を描く。平刃であり，側縁に使用による大きな剝離がみられる。

15，14と同じ形態だがやや扁平で刃部が短い。摩耗が激しい。

16，やや厚手で蛤刃を呈する。刃部は弧を描き，明瞭に使用痕が観察できる。断面をみるとやや厚さに片寄りがある。

17，16を小型にした形態を呈するが，全体に剝離がみられ摩耗している。

以上の磨製石斧は，その形態から大きく３種類に分類できる。

A類　刃部の幅が基端よりも広いやや撥形に近い形を呈し，厚みをもつもの。

7・10・11・12・13

B類　小型で，刃部を入念に研磨しているもの。

8，9

C類　刃部が弧を描くもの。

14，15，16，17

ほとんどが表採であるため時期の断定は出来ないが，7を除きほとんど縄文時代のものと思われる。

不明石器
(Fig. 47)

18，重量が2kg以上もある。石斧にしては刃部にあたる部分の摩滅が少なく，側縁に敲打痕がみられるので，刃部と基端にあたる部分を両手で持って側縁にあたる部分を使用したむしろ敲石としての機能を考えた方がよいように思われる。　(横山)

敲石
(Fig. 47)

19，半欠しており，側縁に敲打痕が観察できる。全体的に摩耗しているが，厚みをもち重量がある。

21，楕円形を呈する敲石である。正，背面は平坦で，表面に若干の焼痕を有する。側縁に敲打痕が観察できる。

磨石
(Fig. 47)

20，ほとんど球形を呈している。2片に割れていたが接合した。明確な剝離は観察されないが若干の凹みがみられ，磨石として利用していたと思われる。

註2　鈴木忠司　1975「京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書　第5節—2打製石斧」平安博物館

(2) 遺　構
(Fig. 43, PL. 31)

TP20において縄文晩期の甕棺と弥生中期の土壙とを確認した。

甕棺は⅓個体程度で，底部は欠失している。

長軸を大旨北東から南西に向け，やや傾斜をもって埋置されていたものと思われる。周囲には1個の石がみられ，当初は石囲いの状態があったのではないかとも推定されるが蜜柑植樹の折の攪乱ではっきりとしない。なお甕を埋置した土壙の輪郭も不明である。やはり上述の攪乱の為であろうか。

甕棺の南側の至近距離には，直径110cm程度，不規則な楕円状のpitがみられる。その中からは弥生中期の土器片のみが出土することから，当時期の土壙であることは疑いないが，上層部の攪乱と，その時点で埋め戻しを行った為に詳細は不明である。只，レベル的に縄文の甕棺より下部にあることからかなり深いものと思われる。　(高野)

付．中屋敷Ｂ地点表採資料について

西彼杵郡西海町横瀬郷２６９４に在住しておられた故古曽根名嘉次郎氏をはじめとして，西海町文化財調査委員会の方々により，西海町内の遺物が表採されていた。現在，古曽根氏の御自宅の一部を「郷土民俗資料館」とされ，様々な民俗資料とともに，表採された土器片80余点・石斧40点・石鏃34点・石鍋片等を公開展示されている。

ここに紹介する資料は，そのなかで器形のわかる土器片22点で，いずれも中屋敷Ｂ地点からの表採である。

(Fig.48, PL.34)　**1**は壺の口縁部であり，頸部に一条の凸帯を有す。１～２㎜大の石英粒を多く含み，胎土は粗い。

2～**12**は甕の口縁部で，いずれも１同様胎土が粗い。２は一条の凸帯を有し，５は口唇部に二段の刻みをもつ。６，９，11，12は黄白色でそれ以外は淡褐色を呈する。

13は壺肩部で，沈線による文様をもつ。砂粒を多く含み，淡黄色を呈する。器壁は厚い。

14～**17**は胴部片であり，14～16は凸帯をもつ。14は胎土緻密で焼成もよいが，15・16は小石粒を多く含み胎土が粗い。

18は甕棺の底部であり，胎土は粗い。ハケ目の上に横ナデ調整を施しており，外面は明褐色，内面は暗灰色を呈する。

19～**22**はいずれも甕の底部である。19はハケ目の上に不定方向にナデを施し，褐色を呈する。20～22はいずれもナデ調整を施しているが，表面摩耗しており，胎土は粗い。

これらの土器片は，いずれも弥生中期のものである。

なお，展示されている石器に関しては，ケイマンゴー遺跡出土の石器と類似し，石斧は扁平打製石斧が多く，石鏃もケイマンゴーと同じ範疇に入るので，あえて図示しなかった。

末筆ながら，これらの資料を本書提載のために心良く御貸与くださった小曽根名嘉次郎氏の御家族の方，西海町文化財調査委員会の方々に心より感謝いたします。

(横山)

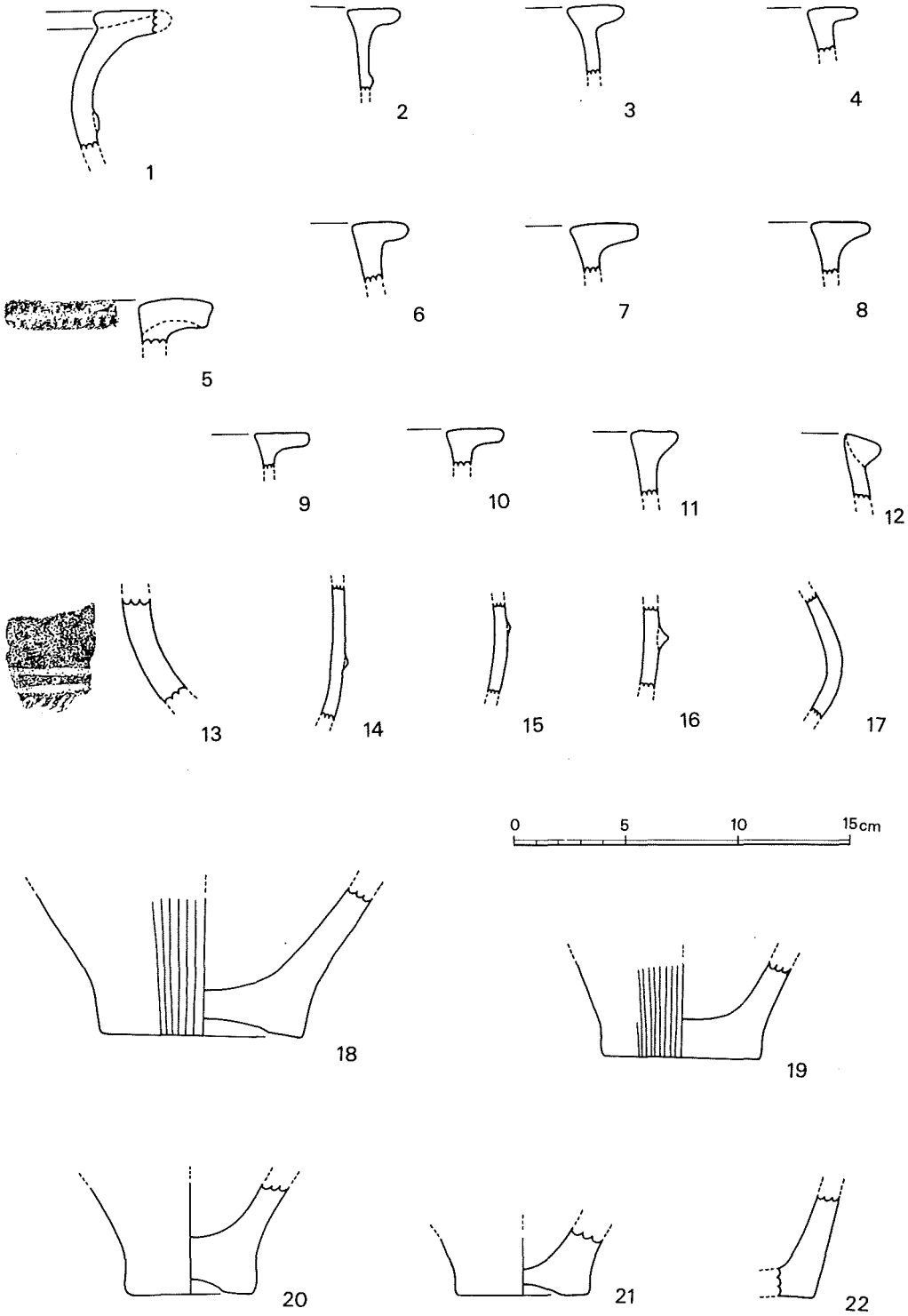


Fig.48　中屋敷B地点表採資料(1/3)

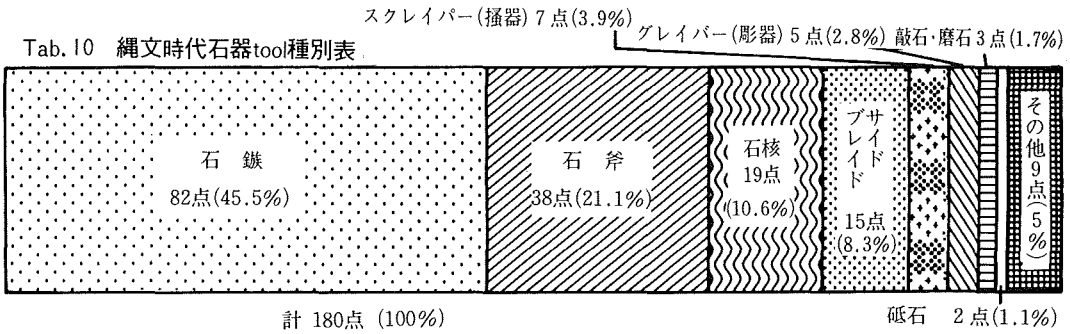
第3章　ま　と　め

遺跡自体については，中心地と思われる北東区域の一部がすでに後世の攪乱によって破壊されていた為に，その全容を伺い知ることが出来なかったが，遺物・遺構を通しての大まかな性格はつかむことができた。以下，ケイマンゴー地点と中屋敷地点の簡単なまとめを行いたい。

(一) ケイマンゴー地点

調査経過の項でも記した如く，当該地点より出土した遺物は，表採・表土中出土を含めて6118点である。これらの内，良好な堆積層より出土したtoolは少なく，特に石斧・石鏃・石核・サイドブレイド等，典型的な資料は大部分が表採，もしくは表土中よりのものであった。

Tab. 10　縄文時代石器tool種別表



しかし，出土遺物には先土器時代の資料，縄文晩期の資料，及び石鍋片等の若干の中世資料と，それぞれかなりの時間差が認められるところから，各遺物の所属する時期が不明瞭になることは無い。

先土器時代の資料説明は，別項に詳しく述べたとおりであるが，従来，この期のものは西彼半島においては，西彼杵郡長与町堂崎[註1]で多数の細石核が，又西海町白似田[註2]，及び西彼町白似田遺跡[註3]で多くのナイフ形石器や台形石器が出土している。その他は，西海町奥野[註4]，同町木場[註5]，大瀬戸町久良木[註6]，等多くは標高200mを越す山中に類例を散見し得る程度であり，当遺跡の如く，標高40～50mの低丘陵に比較的まとまった形で出土した例は無い。

これら資料の出土状態は，縄文晩期遺物との混在であり，明瞭な包含層は残っていなかったが，この地が長期にわたっての生活地址あった事実だけは認めることができよう。

縄文晩期の資料の中で，まとまって出土したのは，石鏃・石斧・サイ

ドブレイドであったが，概して石器の組成とその数量は貧弱であった(Tab. 10)[註7]。この内，石斧は扁平の打製石斧が圧倒的[註8]で，しかも折損率が高い事は，それらがかなりの頻度で用いられた消耗品であった事を示していよう。この他，それぞれ1点づつであるが，更に扁平で鍬，又は鋤状を呈する石器や，1辺のみに剝離を施こした背のぶ厚い一見石包丁形のスクレイパーが出土している。この事と先の多量の打製石斧の組み合わせから，直ちに何らかの栽培等を考えるのは安易すぎようが，一応その可能性は考えておきたい。

サイドブレイドが15点出土している。この種の石器は，石鋸[註9]と同じく組み合わせ石器として理解されており，その用途・機能については，且つては農耕具としての意見があったが[註10]，現在では，その出土遺跡の立地的特徴からも大形魚類を捕獲する為の漁具としての可能性の方が指摘[註11]されている。これらの石器がまとまって出土した事は，本遺跡の地形的環境からして肯首できる。

しかし，反面漁撈の成果としての直接的な動物遺存体や，その遺品等[註12]の痕跡は，地質的な要因もあろうが出土していない。又，漁網具と思われる遺物の出土も無く，この面では，内湾にたまたま迷いこんだ大形魚等の捕獲は行われたであろうが，より積極的な漁撈活動を示す根拠には乏しい。

不明のピット群の中に石囲いの埋設甕があった。調査区域に限っては一基だけの出土である。

この種の遺構は従来より炉址と埋葬址との二様に解釈されている。以下その性格について若干述べてみる。

まず炉址の場合，その形態は地床炉・集石炉・石囲炉，そして石囲埋甕炉等が知られる。地床炉は，縄文早期から全国的にみられ，最も簡単な構造として住居地の内外に設けられる。

集石炉は，最近とみに発見例が増え，縄文早～前期にかけて多く出土している。その分布は九州各地に及び，特に熊本県に多い。本県に於いても，最近，諫早市鷹野遺跡で，早期に属する8基の集石遺構がみつかった。何れも1m内外，浅く掘った土壙の中に大小の礫が投げ込まれたような形をとる。福岡県深原遺跡[註13]と同様，調査者[註14]は集石炉址と考えている。

石囲い炉は，数個の石を円形に囲っただけの簡単な炉で，各地で最もよくみかけるものである。卑近な例でも，佐世保市岩下洞穴[註15]，諫早市西

輪久道遺跡[註16]，小浜町朝日山遺跡[註17]等各時期を通して出土例がある。

一方，石囲埋甕炉の場合，その分布の中心は圧倒的に中部・関東・東北地方等の東日本にあり，その時期は中期以降に限られる。構造は，大型化した複式炉の場合もあり，大旨住居地内に設置されるのが普通のようであるが，屋外に設けられる場合[註18]もある。この種の明確な例は西日本では接し得ない。

石囲い埋設甕を埋葬遺構と考えた場合はどうか。

甕棺葬の出現自体は，日本の場合，縄文前期から知られ[註19]，以後縄文各期を通じて全国的に例がある[註20]。本県に於いては，縄文後晩期の例が殆どであり，具体的には，国見町筏[註21]，有明町二ツ石[註22]，島原市礫石原[註23]，布津町飯野[註24]，同彦原[註25]，有明町向原[註26]，深江町中原舟川[註27]，同山の寺[註28]，長崎市深堀[註29]，大村市黒丸[註30]，西海町中屋敷[註31]，更に支石墓や石棺墓と複合する場合は，北有馬町原山[註32]，鹿町町大野台[註33]などでも例がみられる。これらの場合，単棺，合わせ口甕棺共に底部を欠失する比率が極めて高い。

このように，縄文後晩期に甕が直立，あるいは斜位に埋置されてある場合，大旨埋葬遺構として理解するのが通常であろうが，しかし，形態的に甕棺共に底部を欠失する比率が極めて高い。

当該遺構を埋葬地として理解する場合，前述した石囲いにみられる火の痕跡は〝燔火〟[註34]の風習でもあったのであろうか。そうであれば，単に甕棺葬という葬法に限定するだけでなく，精神生活の一具現化として理解されぬこともない。

この他，縄文中期中葉以降，中部山岳地帯，関東地方を中心として分布している所謂〝埋甕〟的な性格をも考慮する必要があろう。この種の遺構は，最近では西日本でも発見され始め[註35]，近くでは熊本県上南部遺跡[註36]でもその例が知られている。又，その時期は上南部の例では縄文後～晩期に比定されている。

埋甕の風習が九州でもある程度普遍化していたのであれば，本遺跡の遺構もそれに近いものであるかも知れない。

以上，炉址と埋葬址との解釈を検討してみたが，明確な断定はできなかった。以後類似遺構の増加を待ちたい。

（二）中屋敷地点

範囲と内容確認の為の小試掘であった為に，詳細は不明である。結果，且つての削平の折に相当の攪乱を受けているとはいえ，弥生中期の包含層が未だ相当規模で残存しているものと思われる。又，同時期の甕棺や石棺も埋蔵されている可能性も強い。更には縄文晩期末の甕棺も出土す

るなど，西彼杵半島でも最大規模の墓地であろう事は想像に難くない。

なお，この区域は，今後，又石油備蓄基地構想が浮上してきても，将来にわたって現状保存を確約した地点であり，その点では詳細な遺跡の研究は将来にゆだねる事になった。（高野）

註1　長崎県教育委員会　1971「堂崎遺跡」長崎県文化財調査報告書第10集

2　賀川光夫　1976「後期旧石器文化から縄文文化への移行」別府大学文学部史学科研究論叢1

3　清水宗昭　1973「西彼杵半島西彼町白似田出土石器について」考古学論叢1

4　大崎高校社会部　1978「寺島遺跡調査概報」

5　同　上

6　二宮忠司　1975「九州地方におけるナイフ形石器について」九州考古学の諸問題所収　文中では外海町久良木と記されているが，大瀬戸町の間違いと思われる。

7　これらの石器の他，二次加工のある剥片とu・fの数量が300点近くみられる。

8　当該地区内の且つての表採品（小曽根氏収集資料）を合わせると70点を越す。これらの内80～90%は扁平打製石斧である。

9　C－6区，2層において石鋸が1点出土した（遺物番号S－136，PL.10）。ところが，この資料に限って紛失しているのを整理の段階で気付いた。調査終了後の器材撤収の折，紛失したものらしい。石鋸の特徴は，野帖記載のスケッチ（Fig.49）によれば，長さ3.2cm，現存巾1.5cm，厚さ6㎜。素材の全般にわたって調整剥離を施こし，両面からの加撃で鋸歯状の刃部を作り出す。黒曜石製で半月形を呈する。

Fig.49　石鋸スケッチ図(1/1)

10　芹沢長介　1968「シンポジューム日本農耕文化の起源」

11　佐原　真　1968「日本農耕起源論批判」考古学ジャーナル23　萩原博文・久原巻二　1975「九州西北部の石鋸・サイドブレイドについて」古代文化　第27集4号

12　骨製品等

13　福岡県教育委員会　1978「深原遺跡の調査」山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告　第8集

14　副島和明氏教示

15　麻生優他　1968「岩下洞穴の発掘記録」佐世保市教育委員会

註16　副島和明氏教示

17　小浜町教育委員会　1980「朝日山遺跡のあらまし」本年4月～5月，宅地造成に伴う緊急調査を行い，多くの縄文晩期の土器と共に石囲い炉1基，集石遺構の2基が出土した。報告書近刊

18　青森県教育委員会　1976「水木沢遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書　第34集

19　大塚和義　1979「縄文時代の葬制」日本考古学を学ぶ(3)　有斐閣選書

20　古田正隆　1974「筏遺跡」百人委員会埋蔵文化財調査報告　第4集

21　同　上

22　同　上

23　古田正隆　1977「礫石原遺跡」百人委員会埋蔵文化財報告　第7集

24　古田正隆　1974「長崎県の縄文時代のカメ棺」考古学論叢2

25　文化庁　1976「全国遺跡地図　長崎県」31―77

26　註24に同じ

27　同　上

28　古田正隆　1973「山の寺梶木遺跡」百人委員会埋蔵文化財報告　第1集

29　長崎県教育委員会　1967「深堀遺跡」

30　大村市教育委員会　1980「黒丸遺跡」

31　本書掲載

32　森貞次郎　1960「島原半島原山遺跡」九州考古学10他

33　大野台遺跡調査団　1974「大野台遺跡」

34　西村正衛　1965「埋葬」日本の考古学Ⅱ

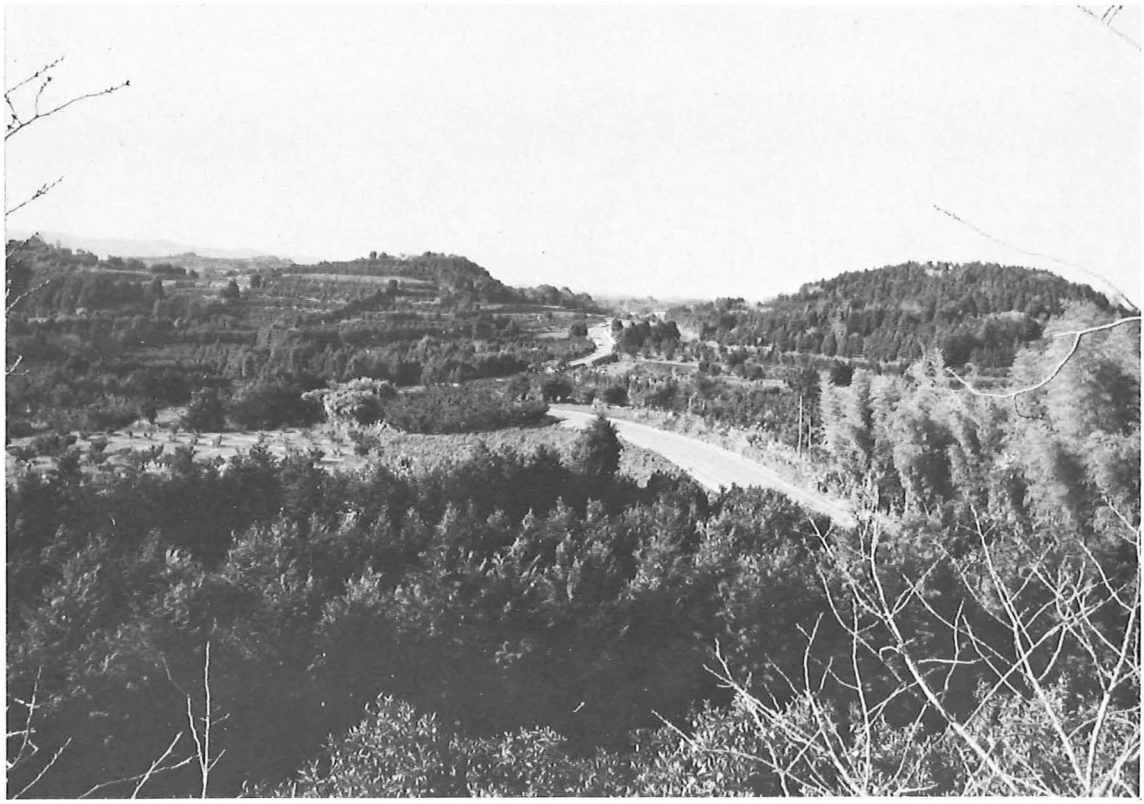
35　奈良県立橿原考古学研究所　1977「竹内遺跡」奈良県遺跡調査概報

36　富田紘一氏教示

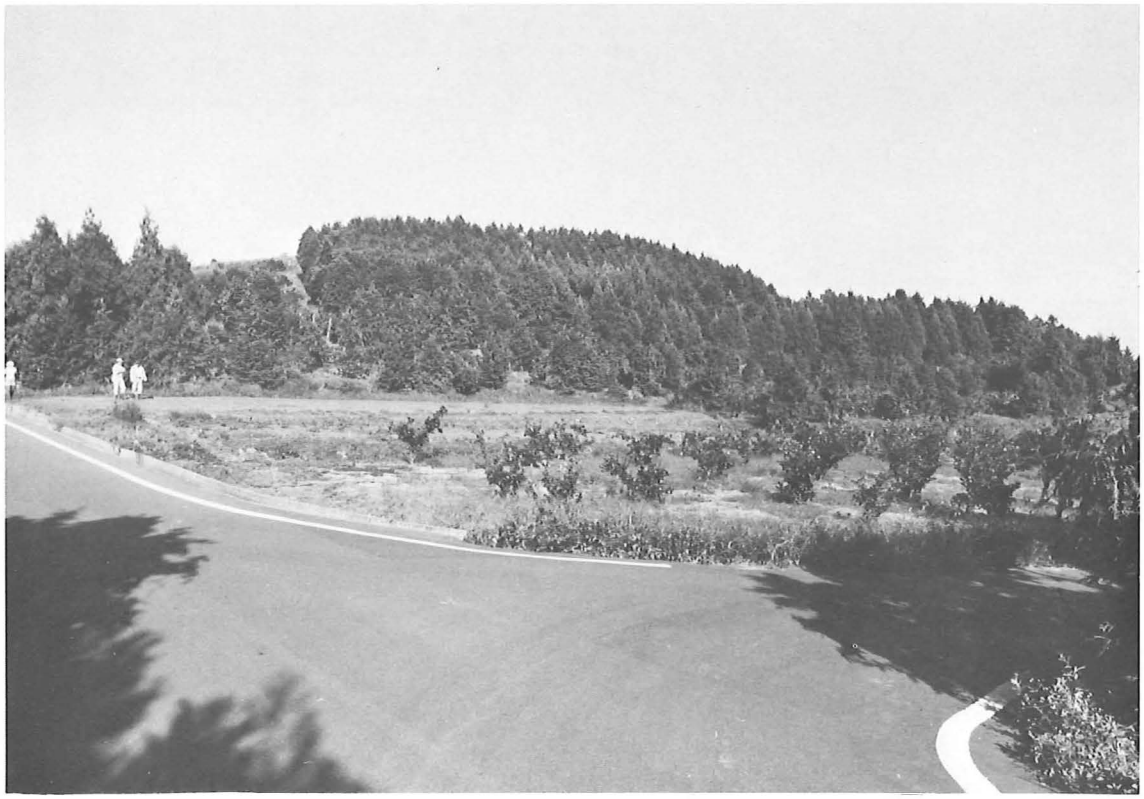
図　　版

ケイマンゴー遺跡

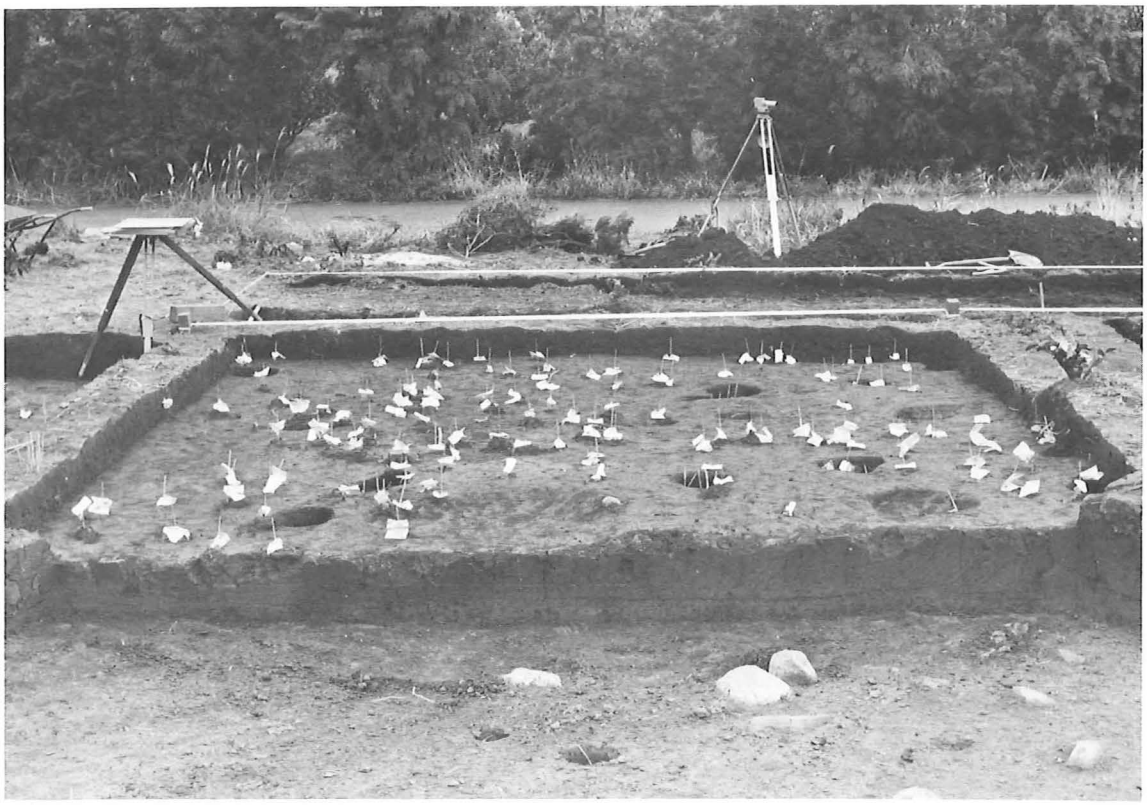
PL. I



ケイマンゴー遺跡遠景



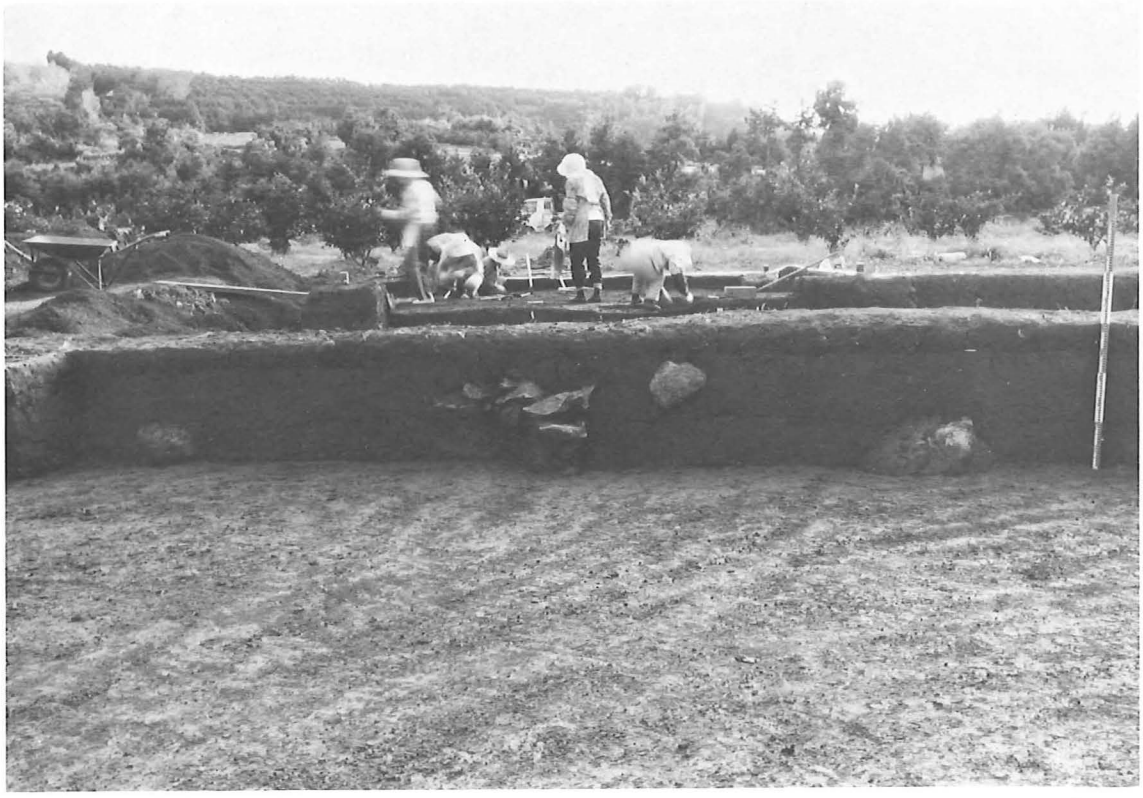
ケイマンゴー遺跡近景



A－6区遺物出土状況

調査風景

D－1区東壁



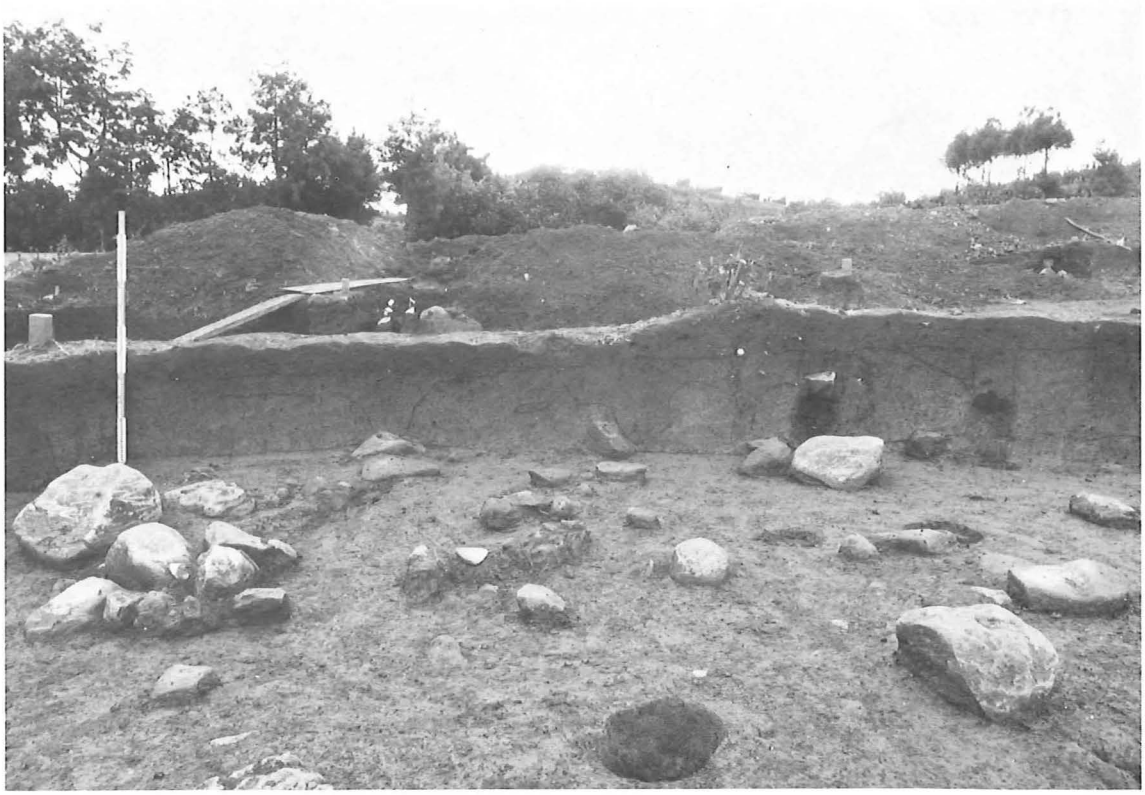
B－2区東壁

A－2区南壁

B－6区東壁

D－5区東壁

A－7区南壁

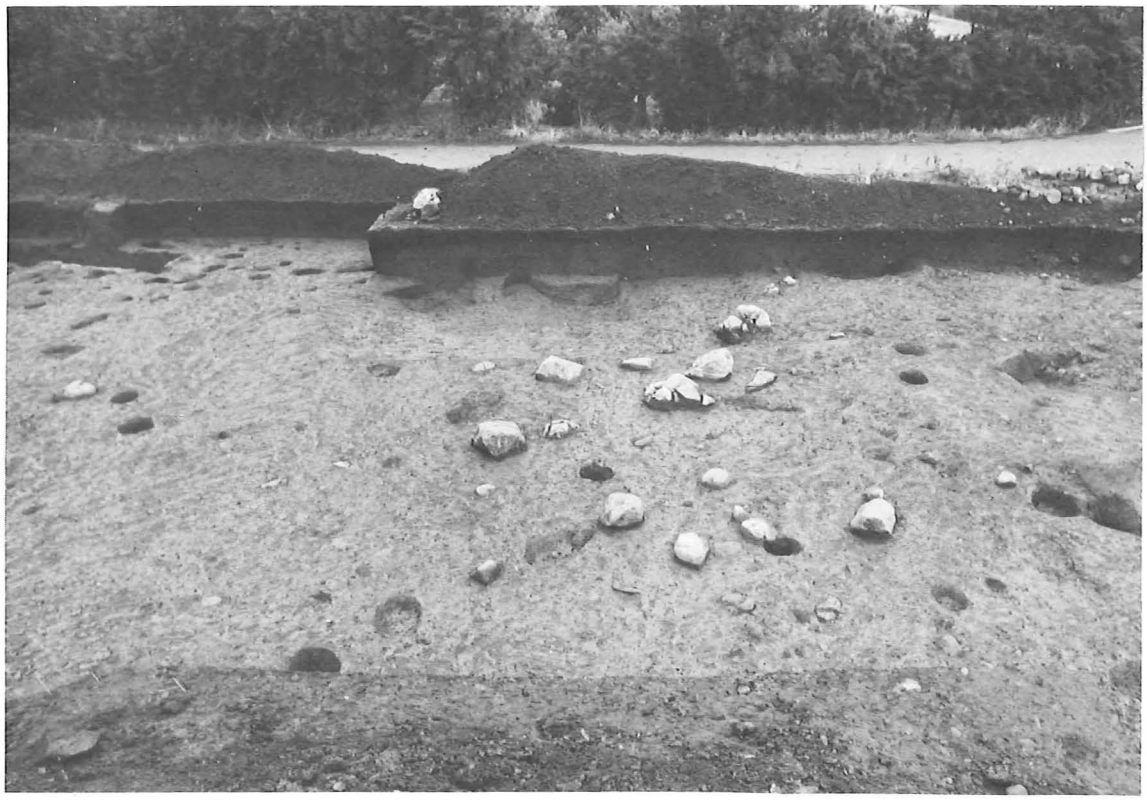


C－6区南壁

E－5区東壁

A－7区東壁

B－7区東壁

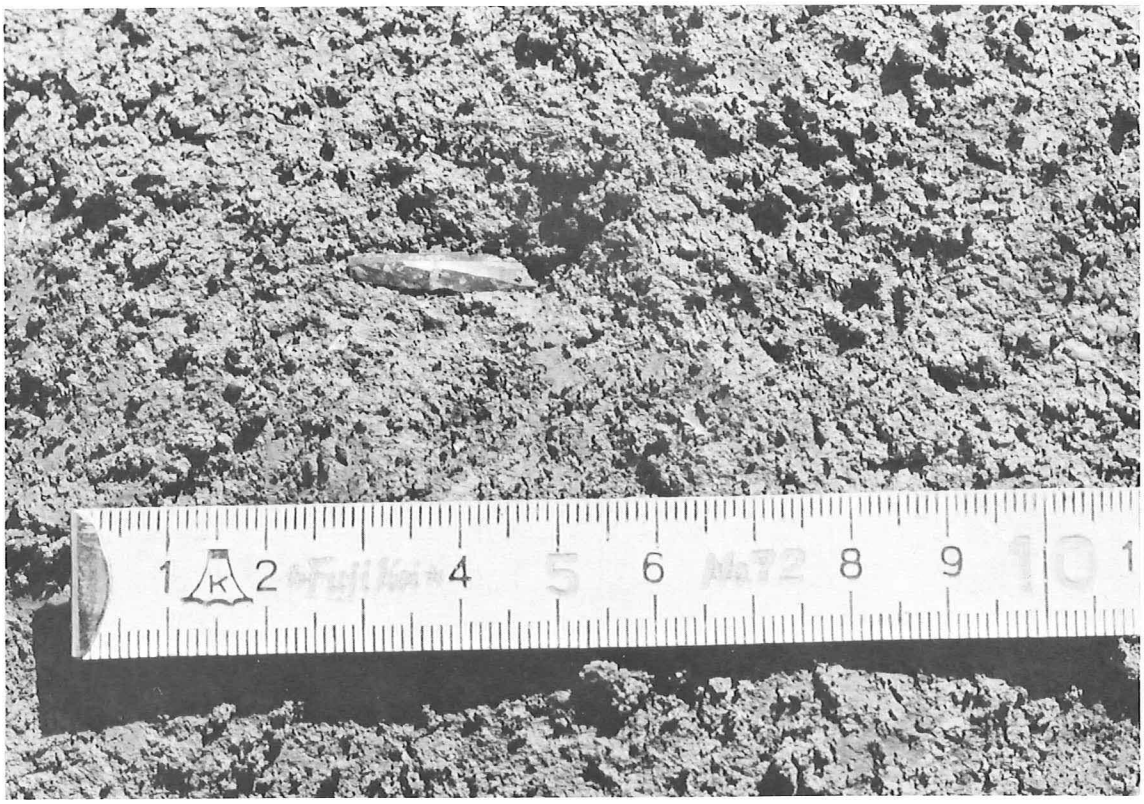


Pit群(西から)

A－6区東壁

Pit群(西から)

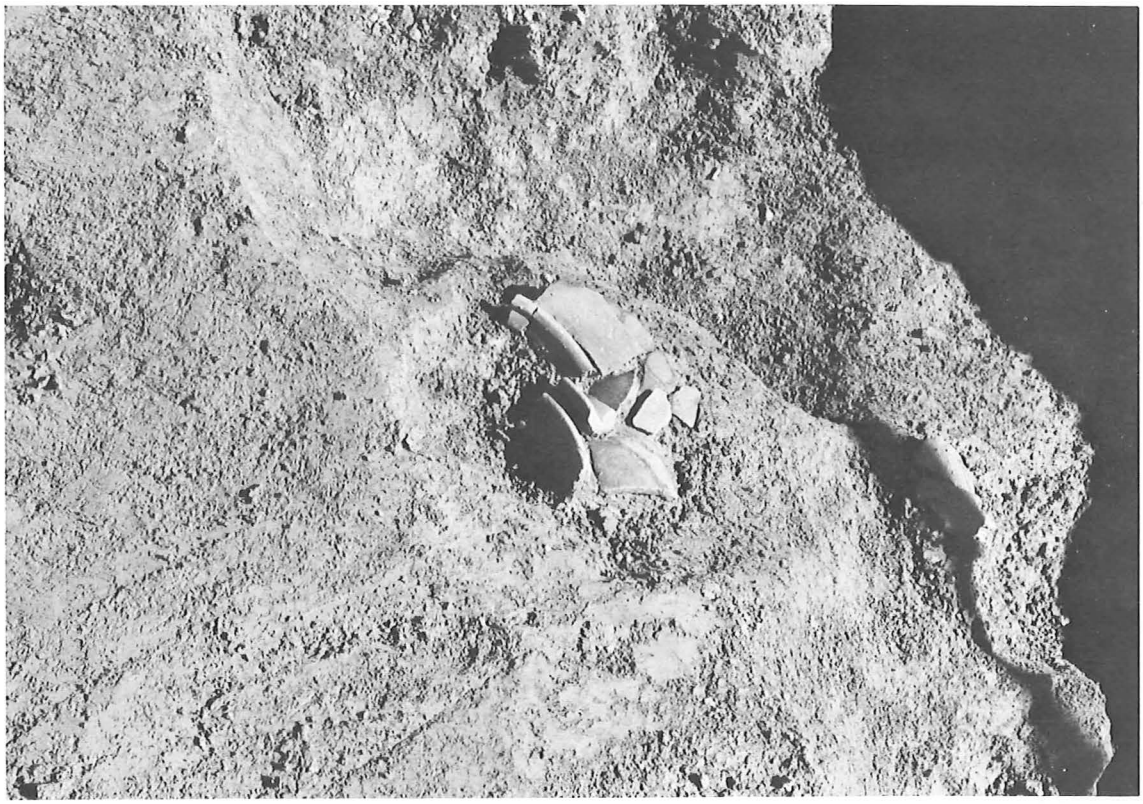
Pit群(北から)



ナイフ形石器出土状況

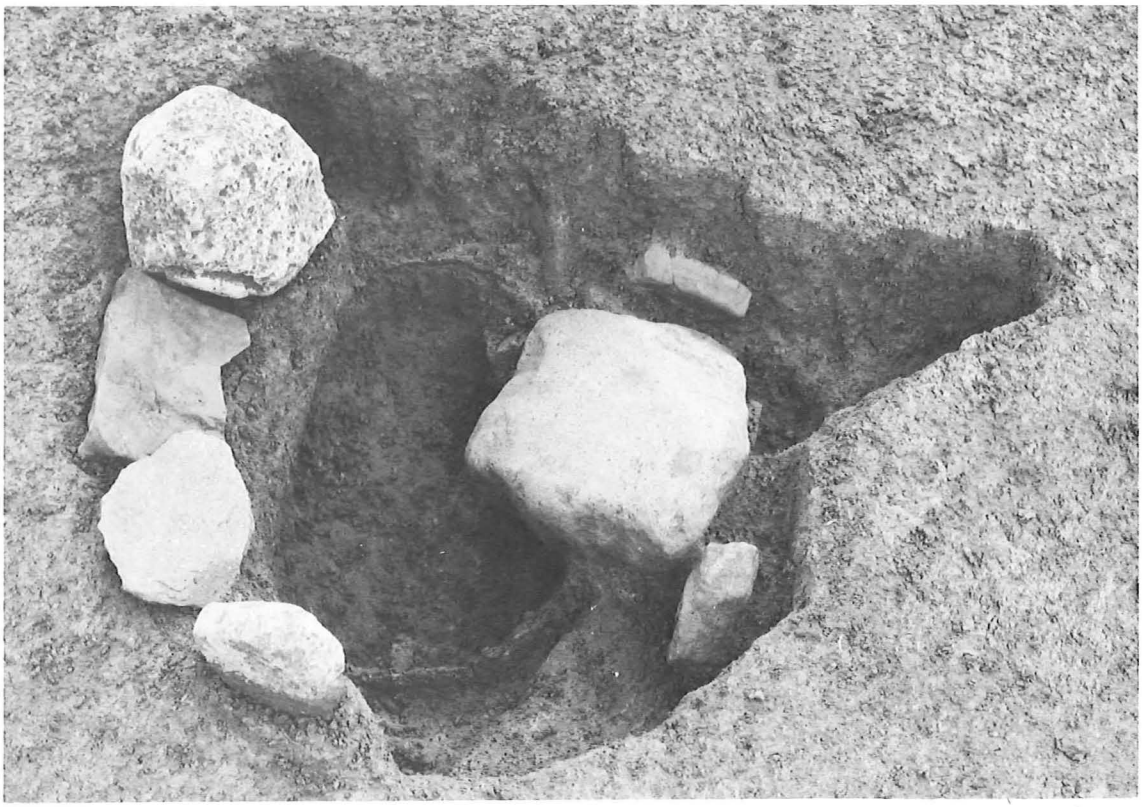
石鋸出土状況

甕底部出土状況(B—6区)

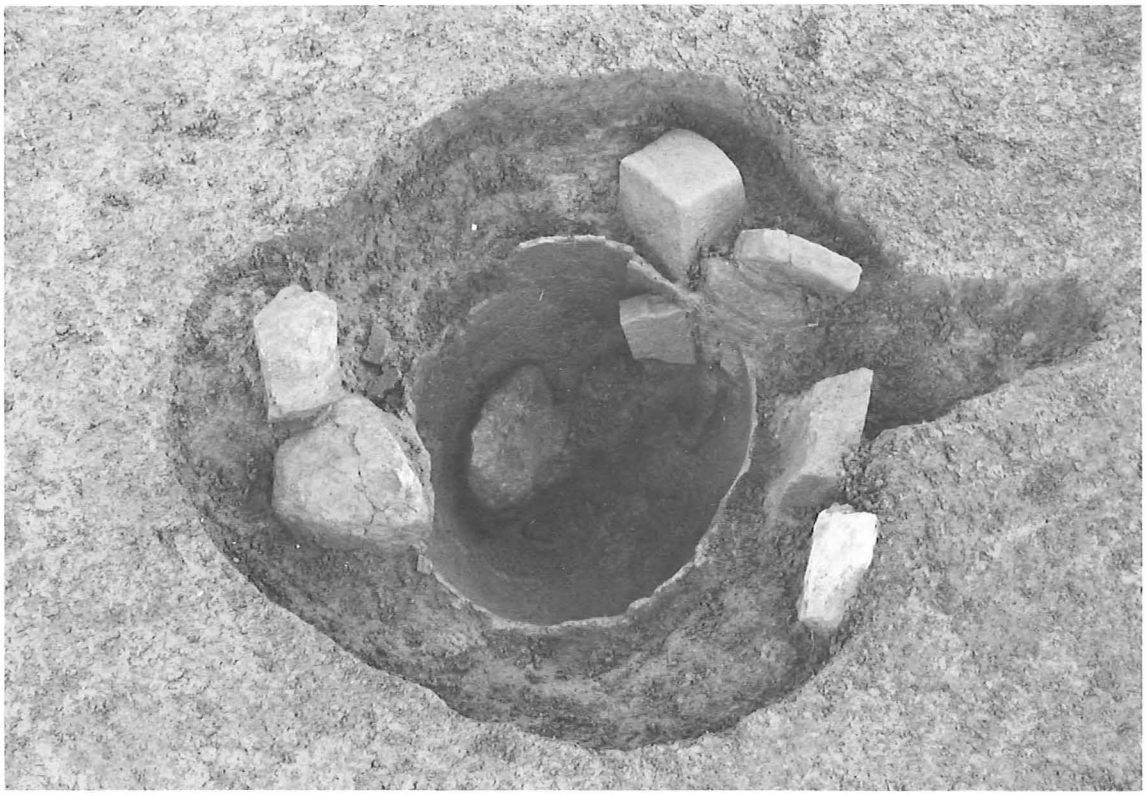


浅鉢出土状況(C—6区)

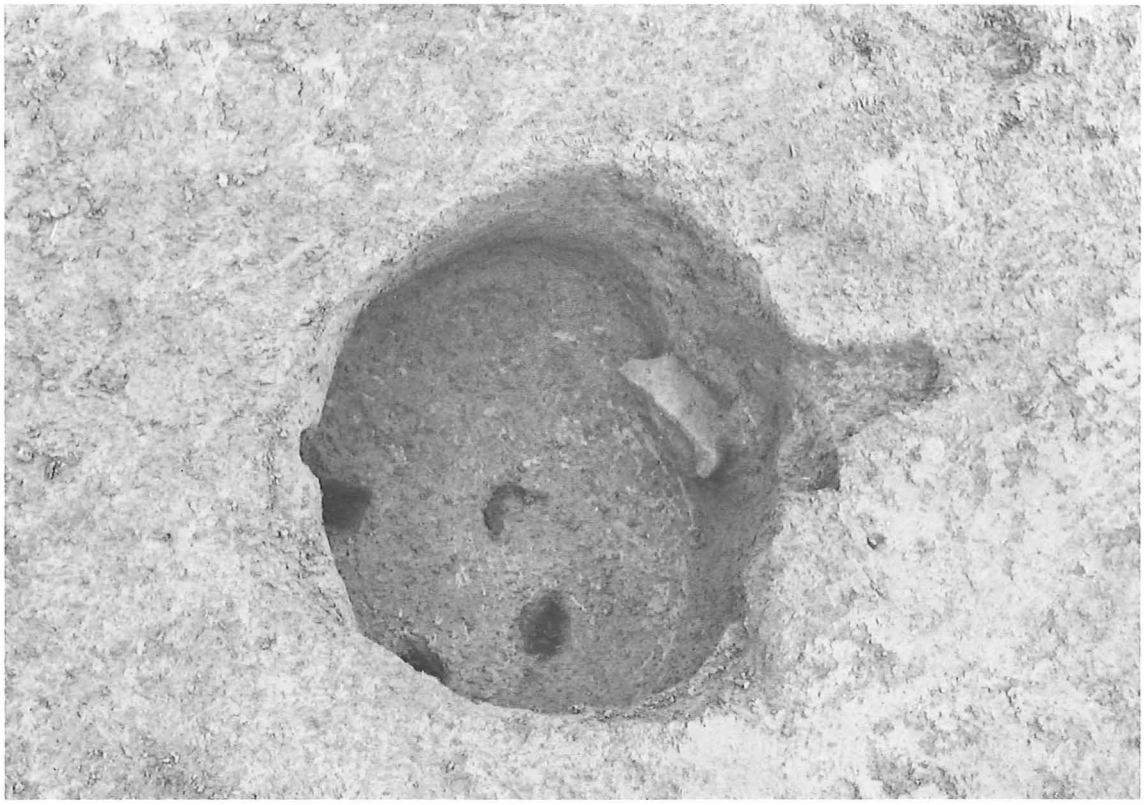
埋設甕上部石囲遺構出土状況



石囲遺構と埋設甕



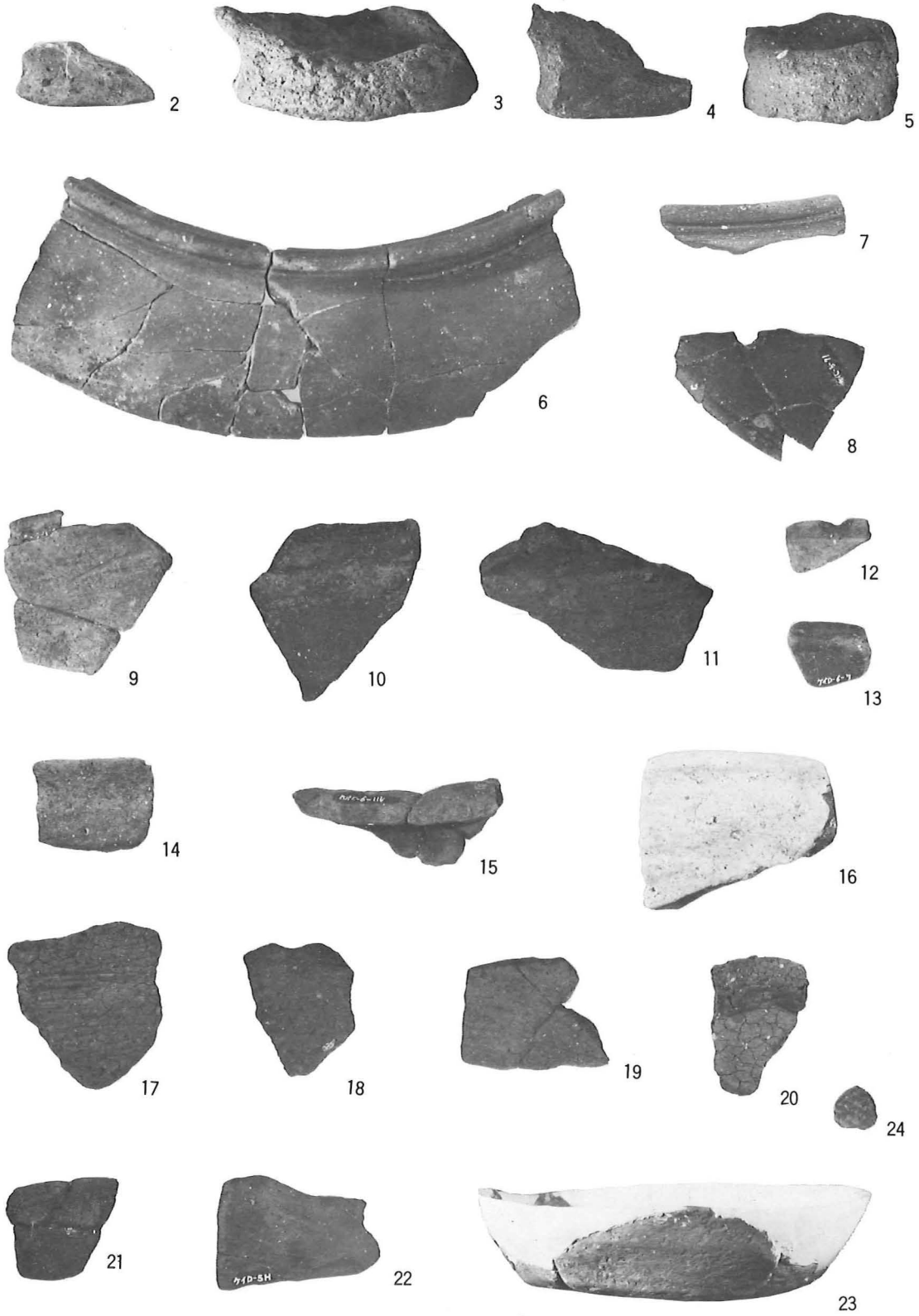
埋設甕出土状況



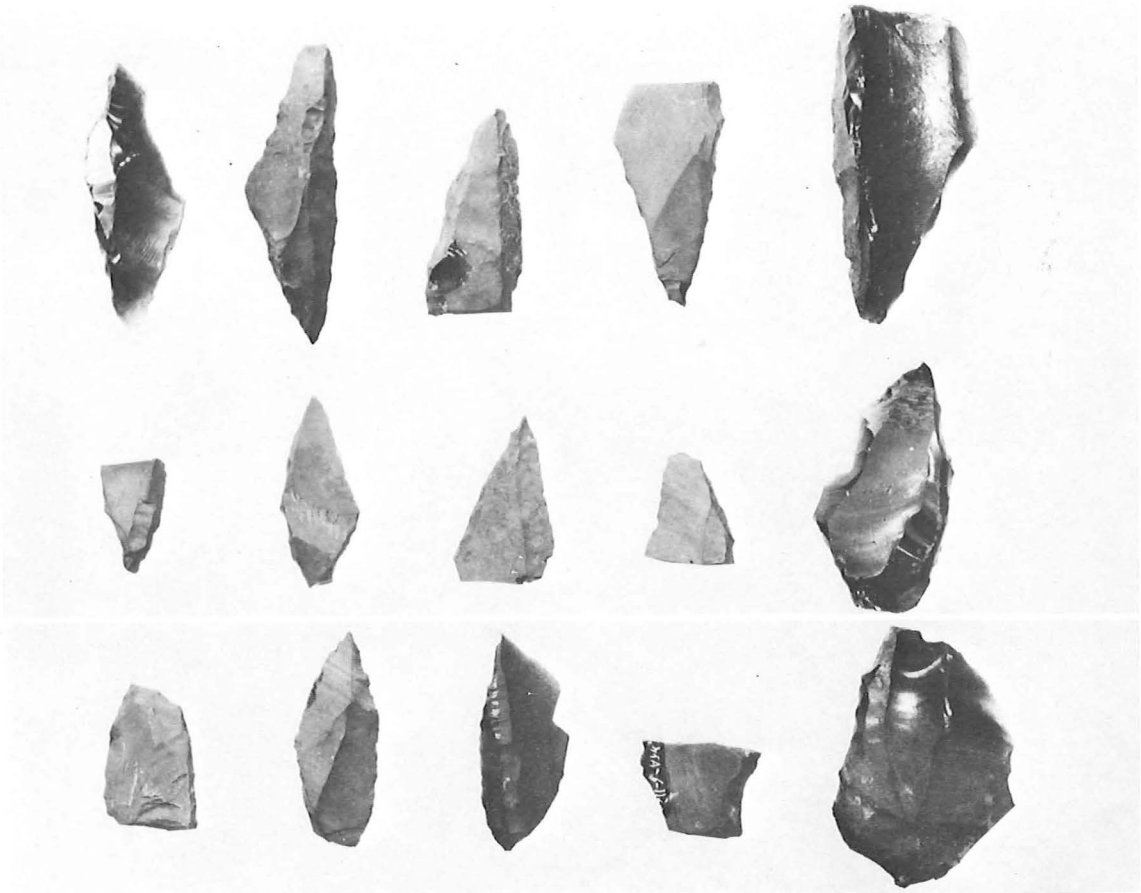
甕取上げ後の土壙

ケイマンゴー遺跡出土埋設甕

中屋敷遺跡出土甕棺



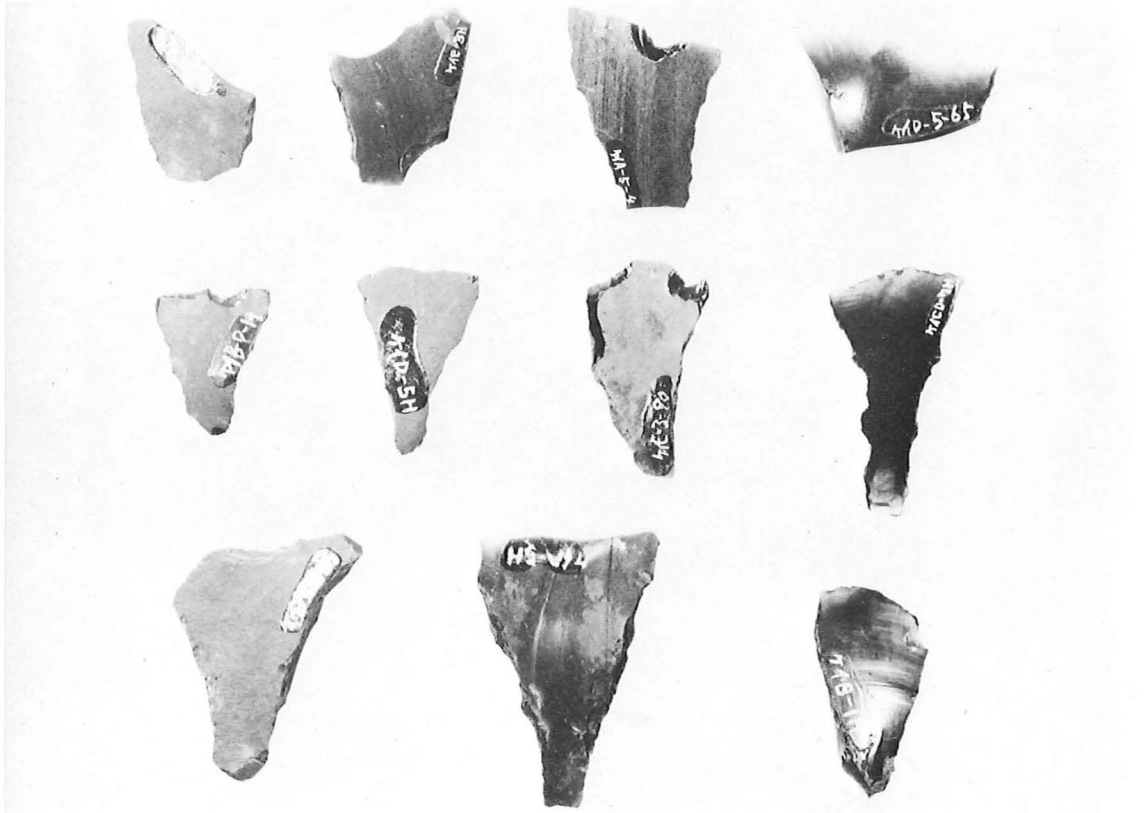
ケイマンゴー遺跡出土土器(1/2)



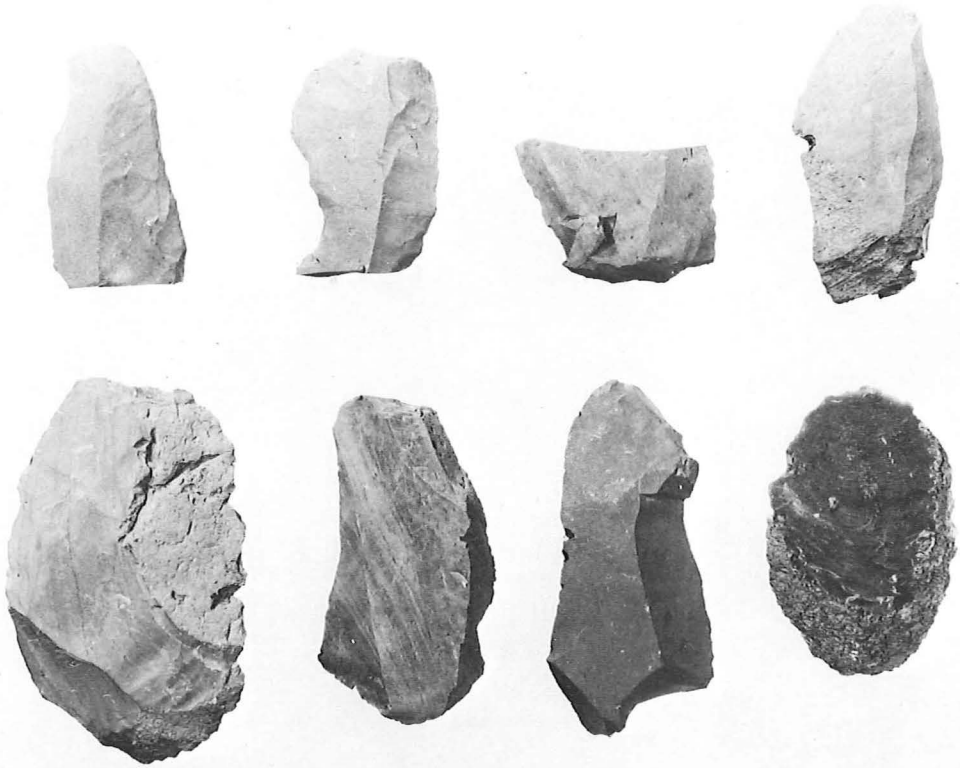
先土器時代の石器（ナイフ形石器）(1/1)

先土器時代の石器（台形・台形様石器）(1/1)

先土器時代の石器（ナイフ形石器の裏面）（1/1）

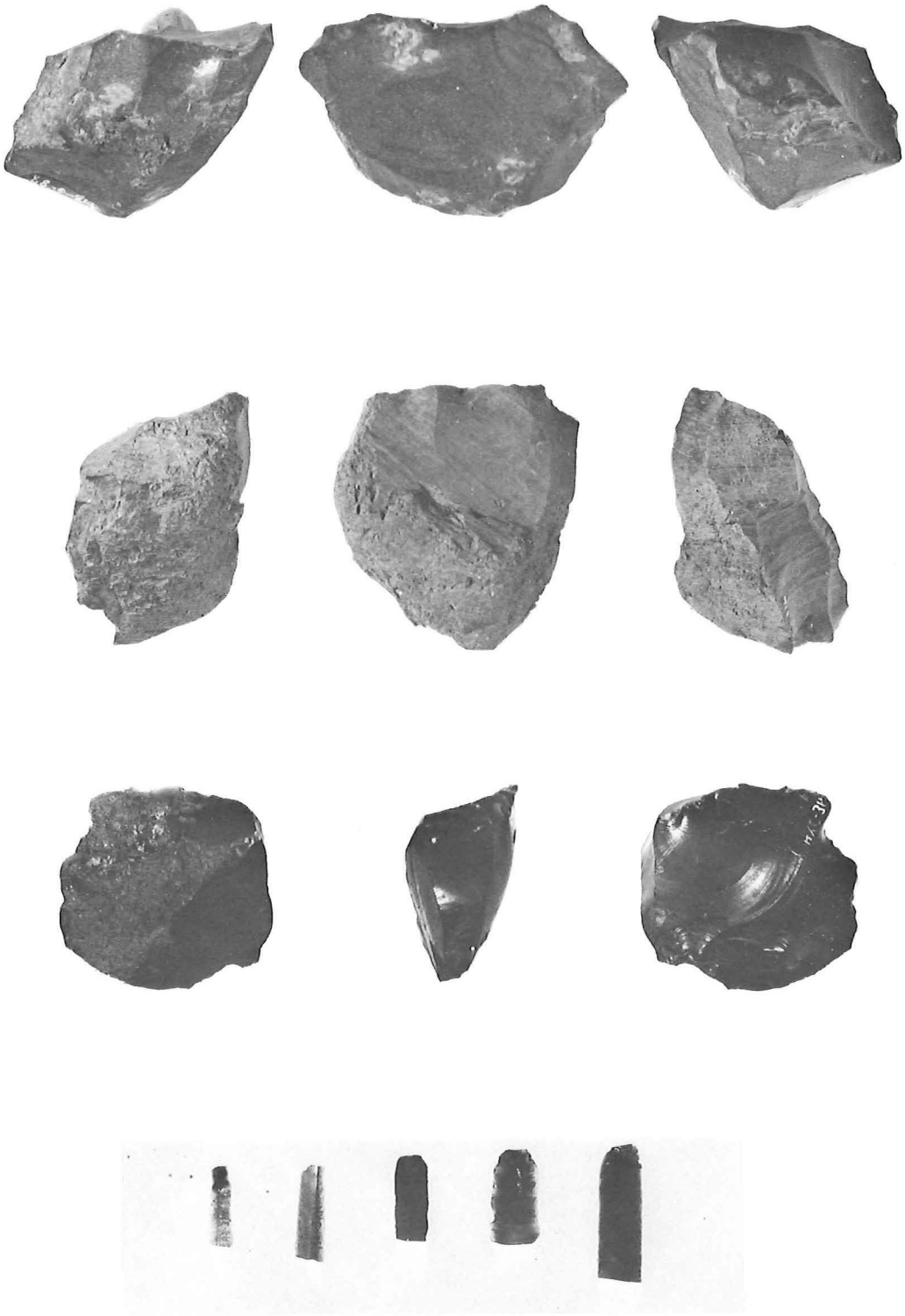


先土器時代の石器（台形・台形様石器の裏面）（1/1）

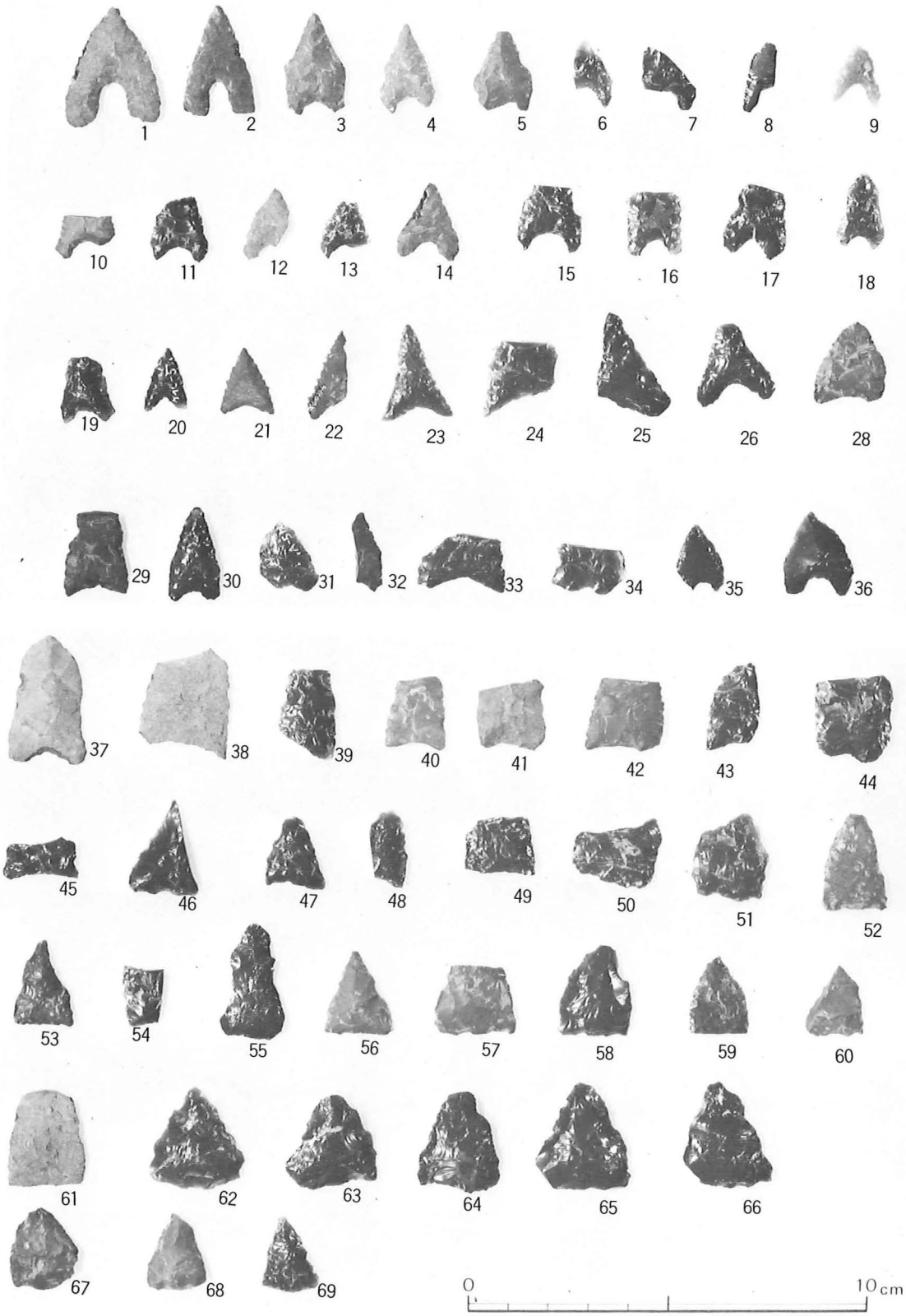


先土器時代の石器(掻器、削器、使用痕のある剝片、剝片)(2/3)

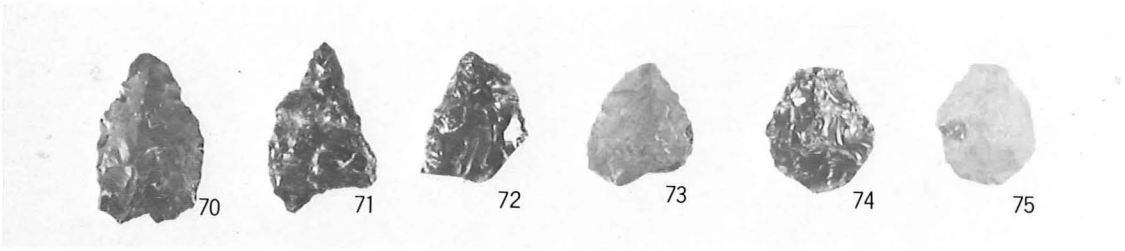
先土器時代の石器(同裏面)(2/3)



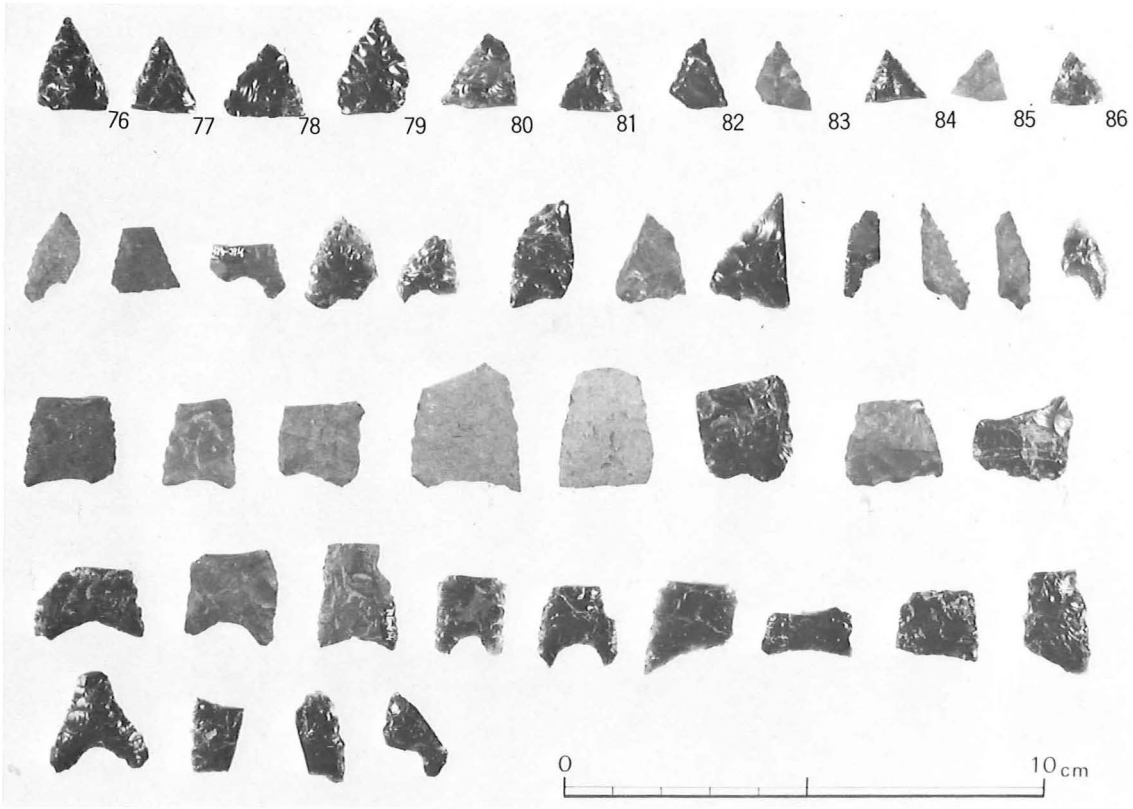
先土器時代の石器(石核、細石核、細石刃)(1/1)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
0
10cm

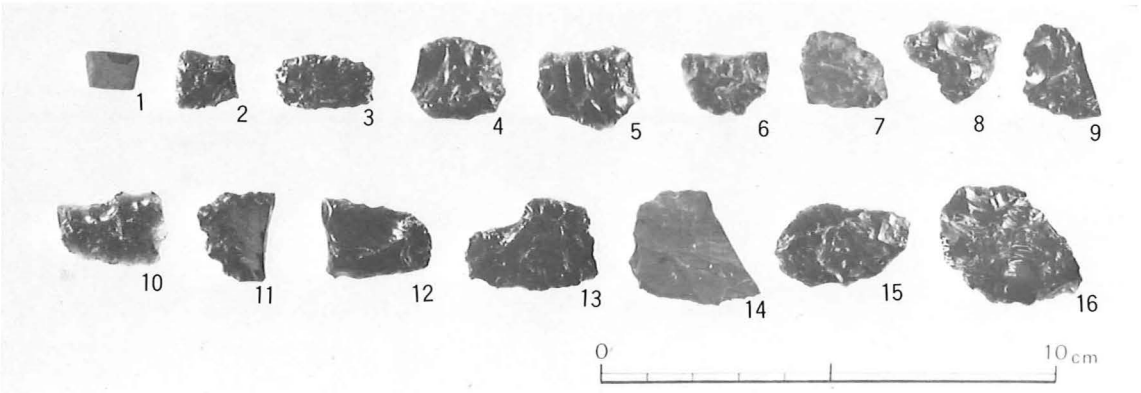
石　鏃(2/3)



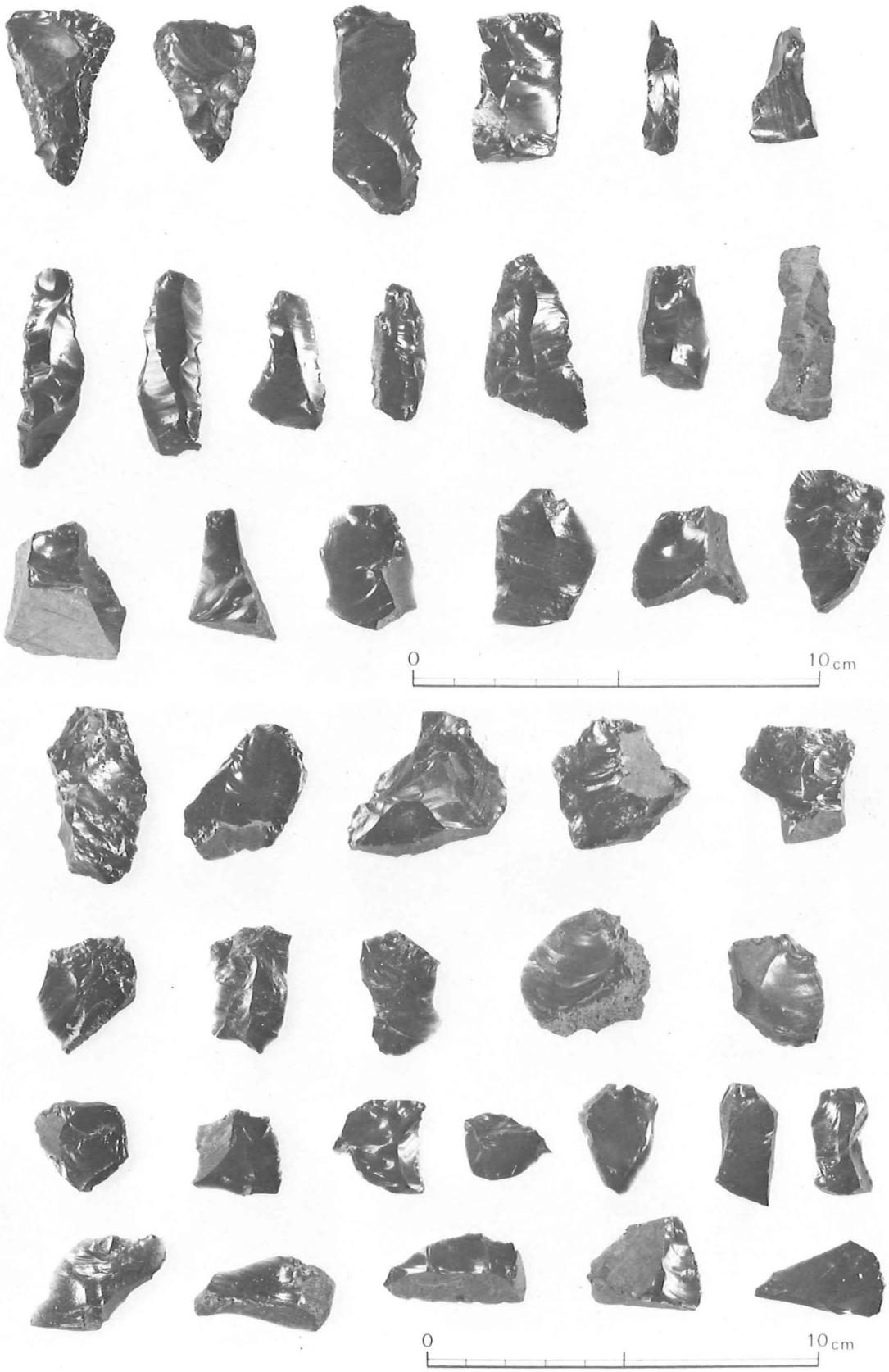
スクレイパー(2/3)



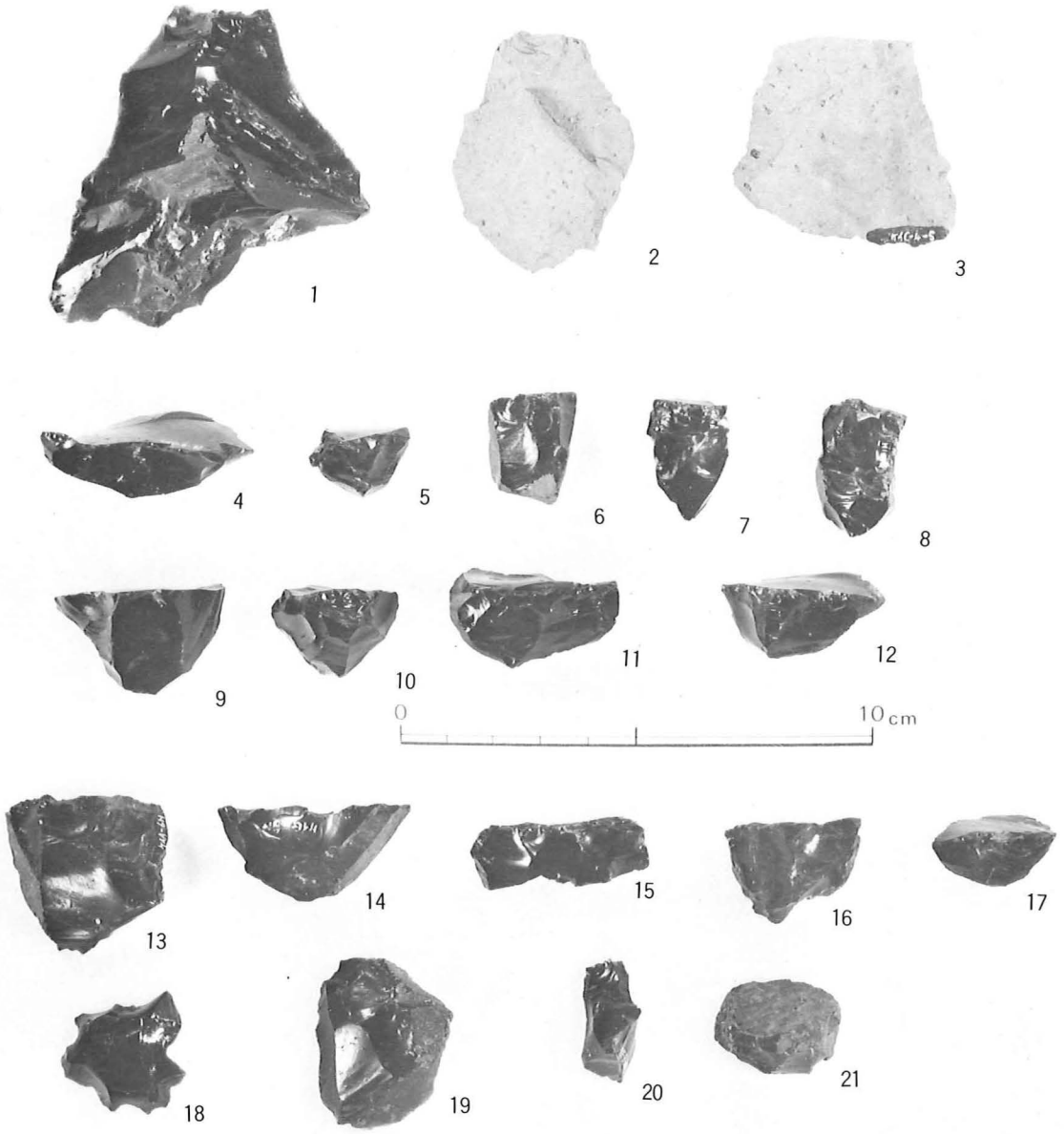
石鏃遺存状態(2/3)



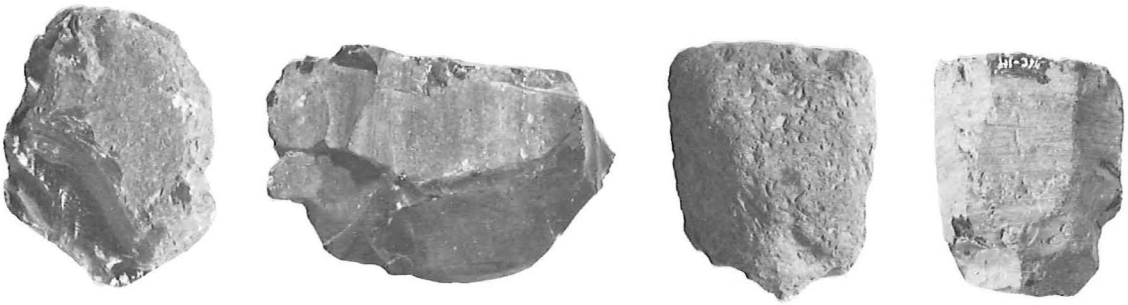
サイドブレイド(2/3)



彫器・剥片(2/3)



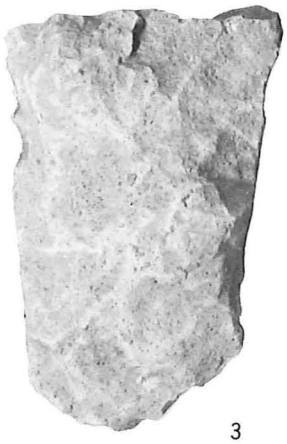
石核・剥片



原石(2/3)

1

2

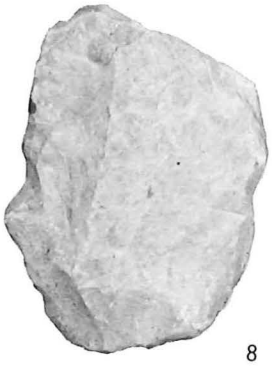

3

4

5

6

7


8

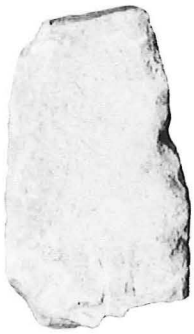
9

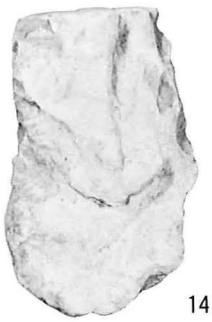
10

打製石斧①(1/2)

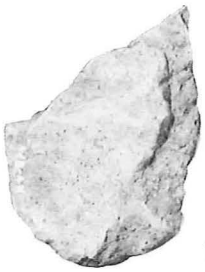
11

12


13


14

15


16

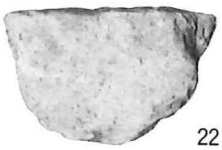
17

18

19

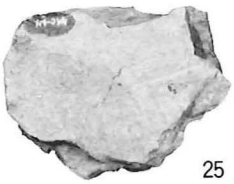
20

21


22

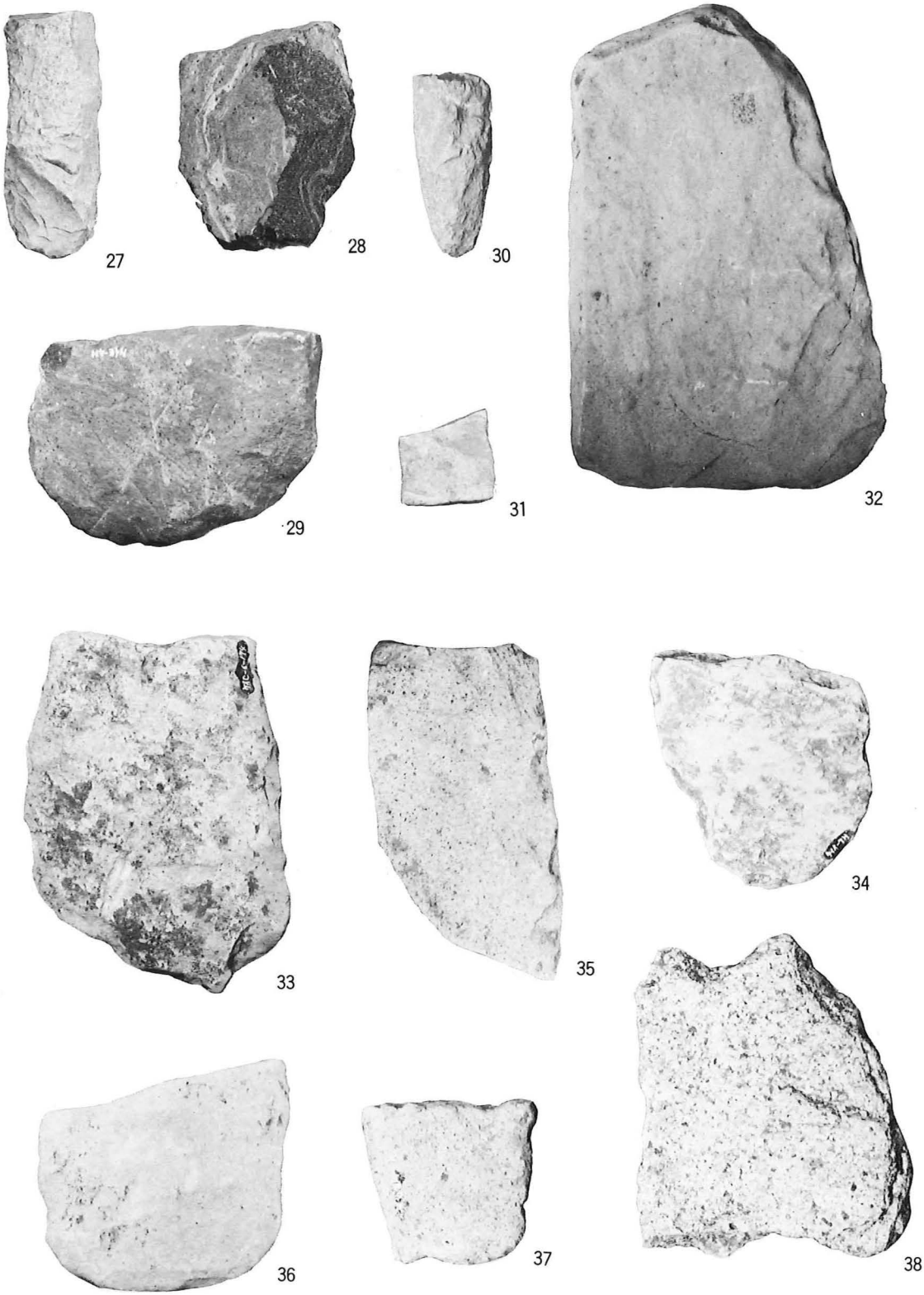
23

24


25

26

打製石斧②(1/2)



打製石斧③・その他の石器(1/2)

39

40

41

42

43

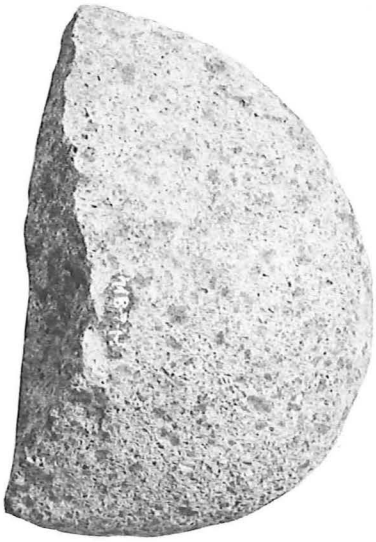
44

45

46

47

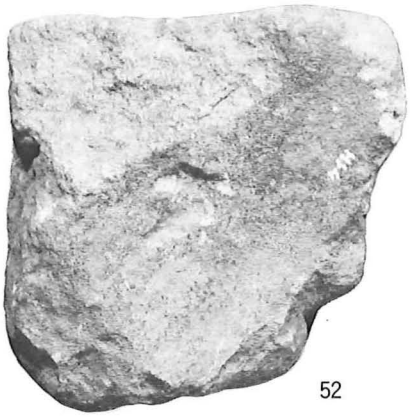
48


51

磨製石斧・敲石・くぼみ石・剥片(1/2)

49

50

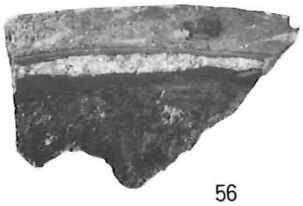


52

53

54

55



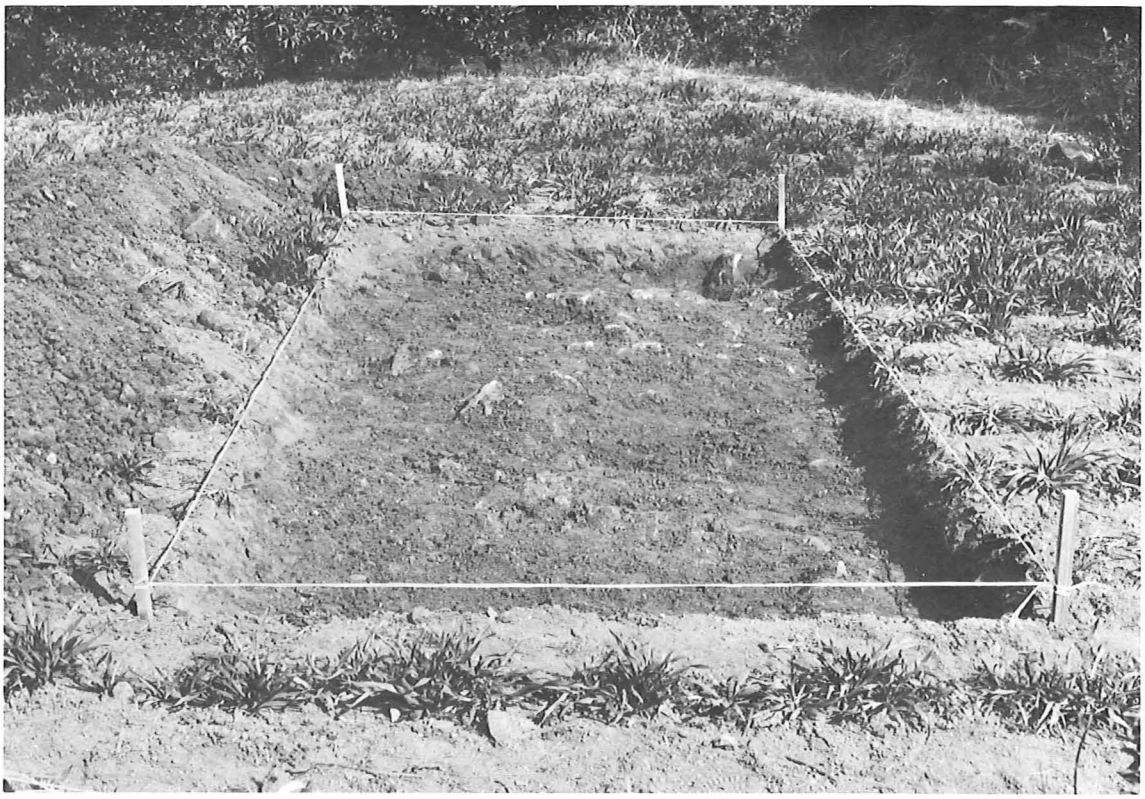
56

57

敲石・砥石・滑石製品(1/2)

中屋敷遺跡遠景

ケイマンゴーB地点遠景



調査状況(TP1)

遺物出土状況(TP18)

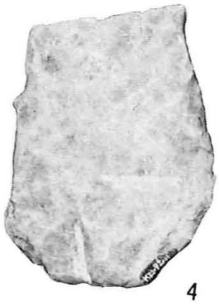
甕棺出土状況(TP22)

TP22

1

2

3


4

5

6

7

8

9

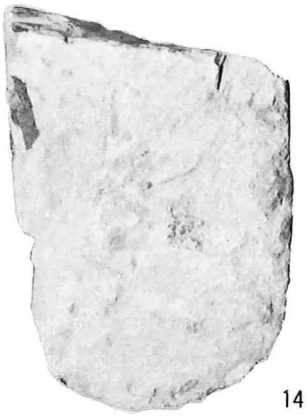
10

11

12

13

打製石斧・磨製石斧(1/2)


14

15

16

17

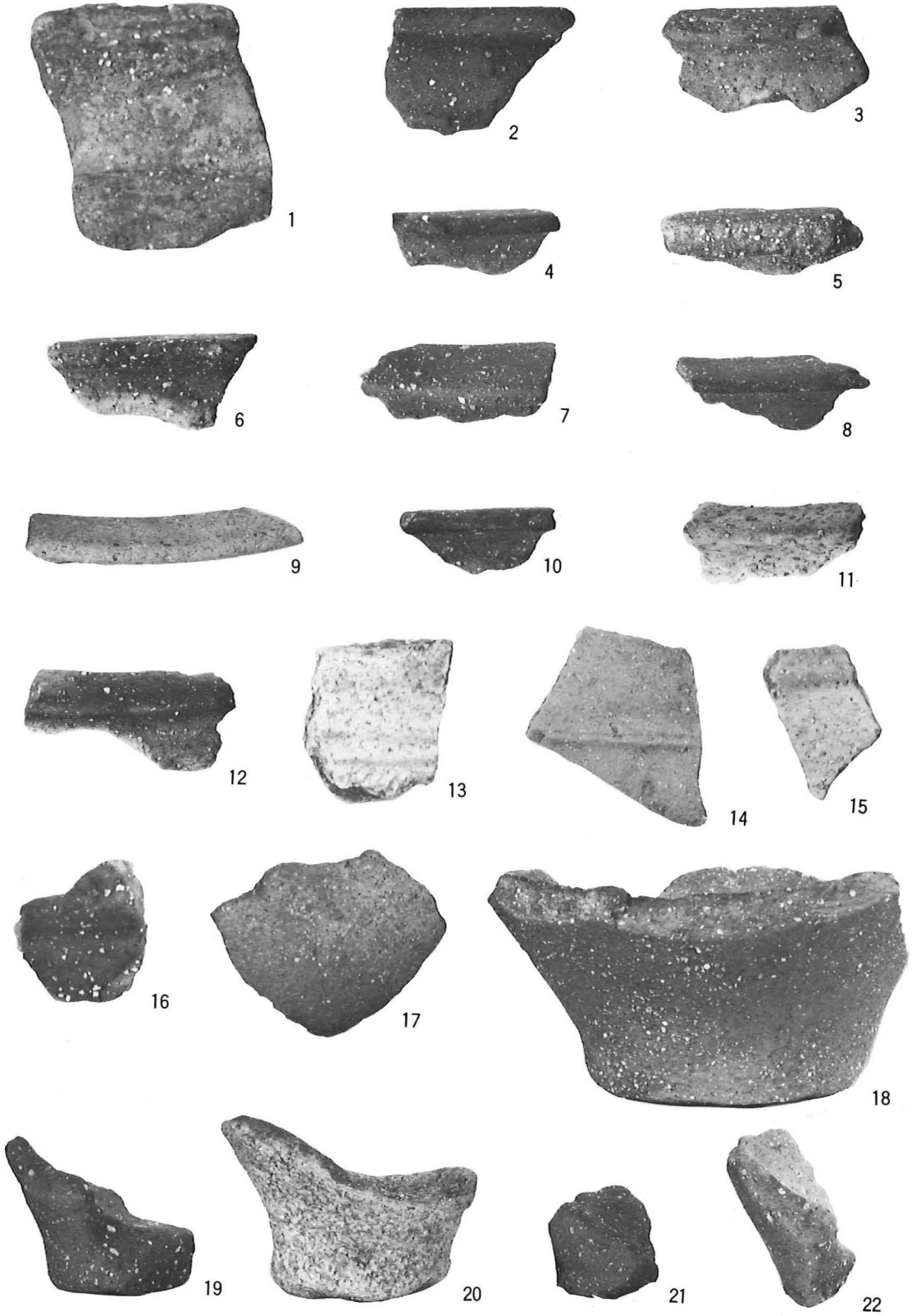
19

18

20

21

磨製石斧・敲石・磨石(1/2)



中屋敷B地点表採資料(1/2)

2

3

4

5

6

中屋敷遺跡出土土器(1/2)

発掘調査に参加した人々

ケイマンゴー遺跡

長崎県文化財調査報告書　第52集

昭和55年９月

発行　西海石油共同備蓄株式会社
長崎県教育委員会
長崎市江戸町２—13
印刷　日本紙工印刷株式会社
長崎市興善町２—６